

俘虜の人員點呼の時、腹痛を装うてゐた一人の露西亞兵が、莫斯科出發の混雜にまぎれて、逃亡した事が發見された時、この憎惡の念は益々激しくなつて來た。ピエールは、一人の佛蘭西兵が露西亞の兵卒を撲りつけてゐるのを見た。それはこの兵卒が道路から餘り遠く離れたためであつた。それからピエールは自分の親友である大尉が、露西亞兵逃亡のかどで下士を譴責し、軍法會議に廻すと云つて嚇かしてゐるのも聞いた。あの俘虜兵士は病氣で行軍が出来なかつたのだ、と云ふ下士の辯解に對して、將校は『落伍した者など射ち殺して了へといふ命令があつたではなにか』と言つた。ピエールは死刑執行の時に自分を壓倒し盡した力、俘虜生活の間ちう氣付かすにゐた運命的な力が、今また自分の全存在を領したのを感じた。彼は恐しくなつた。けれど運命的な力が彼を壓し潰さうと努力すればするだけ、その力に没交渉な生活力が段々と彼の心中に生長して、勢を増して來るのを感じた。

ピエールは裸麥の粉と馬肉の入つた汁で夕餐を濟し、暫くのあひだ仲間の者と話をした。

ピエールもまた仲間の者も、莫斯科で見たことや、佛蘭西人の態度の粗暴なことや、俘虜一同に發表された銃殺の命令などは、一ことも口に出さなかつた。一同は次第に惡化して行く状態に反抗しようとするやうに、いつもより格別元氣で快活だつた。みんな自分一個の追憶や、行軍中に見た滑稽な場面などを話し合つて、現在の狀況に關する話を揉み消すやうにしてゐ

た。

太陽はもう疾く沈んでしまつた。煌々たる星が空のこゝかしこに輝き始め、昇りそめた満月の光が火事のやうに赤く空の一端に漲つた。偉大な赤い球は、灰色が、つた靄の中であやしく揺れた。邊りは次第に明るくなつた。黄昏はもう終つたが、本當の夜はまだ始らなかつた。ピエールは新しい仲間の傍を離れて、焚火の間を縫ひながら道路の向う側へ行つた。彼はそこに俘虜の兵士らがあると聞いたので、彼らと話がして見たかつたのである。けれど道路の上で、佛蘭西の哨兵が彼を押し止めて、後へ歸れと命じた。

ピエールは引つ返したが、焚火に當つてゐる仲間の處へ行かないで、馬を離した荷馬車の傍へ近づいた。そこには誰もゐなかつた。彼は足を締め頭を垂れて、荷馬車の車輪に近い冷たい地べたへ腰を下し、何やら考へながら長い間じつとしてゐた。一時間以上すぎた。誰一人ピエールの靜思を亂す者もなかつた。と、不意に彼は持前の幅の有る、人のよい哄笑を上げた。その聲あまり大きかつたので、人々は吃驚して四方八方から、この不思議な、たつた一人らしい高笑ひのする方を振り返つた。

『はつ、はつ、はつ！』とピエールは笑つた。そして聲に出して獨り語を言ふのであつた。『あの兵隊は俺を通さなかつた。みんな俺を掴まへて押し籠めた。そして俺を俘虜にしてゐる。一

體おれとは誰だ？ 俺を？ 俺を？——不滅な俺の靈魂を！ はつ、はつ、はつ！……はつ、はつ、はつ！……」彼は目に涙を滲ませながら笑つた。

誰か一人の男が立ち上つた。そしてこの奇妙な大男が、何を一人で笑つてゐるのか見極めようと、彼の傍へ近づいて來た。ピエールは笑ひをやめて立ち上り、もの好きな男の傍を離れて、あたりを見廻した。

焚火のばち／＼大きくはざる音と人間の話し聲で、つい先ほどまで騒々しかつた巨大な果てしない露營地は、段々と靜まつて行つた。赤々とした焚火は、次第に消えて蒼白くなつた。明るい空に高く満月が懸つてゐた。以前見えなかつた野營地外の林や野が、今ではずつと遠くに展げて來た。そしてこれ等の林や野の向うには、ゆら／＼と揺れながら、招き寄せるやうな、明るい無限の遠方をちかたが見えた。ピエールは夜の空と、薄れつ輝きつしてゐる星の深淵を眺めた。「これはみんな俺の物だ。これはみんな俺の中にあるんだ、これはみんな俺なのだ！」とピエールは考へた。「やつらはこれを掴まへて、板で圍つたバラックの中へ入れたんだ！」
彼は莞爾とほ／＼笑んだ。そして眠りに就くために仲間の傍へ行つた。

一五

十月上旬、またもや一人の軍使がナポレオンの親翰をたづさへて、講和の提議にクトゥゾフの許へ派遣された。この親翰は偽つて莫斯科發となつてゐたが、その實、ナポレオンはもうクトゥゾフから少し前方へ寄つた、舊カルーガ街道へ來てゐたのである。クトゥゾフはこの書面に對しても、ロリストンの齎した最初の書狀に對すると同様な返答をした。即ち、平和などは談ずる餘地さへないと言ふのであつた。

その後まもなく、タルーチノの左方から進んでゐたドーロホフの遊撃隊バルチザンから報告が達した。他でもない、敵軍がフォミンスコエに現れたが、この隊はブルシエの一箇師團で編成されてゐるだけで、他の部隊から孤立してゐるから、容易に剿滅することが出来るといふのである。兵卒も將校も再び活動を要求した。タルーチノに於ける易々たる戦勝の記憶で、興奮して來た司令部の將官達も、ドーロホフの提議採用方をクトゥゾフに迫つた。クトゥゾフは全然攻撃の必要を認めぬなかつたので、中間の方法——即ち必然的に行はるべき事が決定された。かうしてブルシエ攻撃の任務を帯びた小部隊がフォミンスコエへ派遣された。

ドフトゥーロフは不思議な偶然によつて、最も困難にしてかつ重大な（これは後に分つた事である）この任務を受け取つた。このドフトゥーロフは小柄なつましやかな人物で、誰の戦記を見ても、彼が作戦計畫を編成したり、聯隊の先頭に立つて突進したり、士卒に十字章を撒きちらし

たりした事を描寫してゐるものはない。それ所か凡ての人から、不決斷で洞察力を缺いた人物と見做されてゐたが、しかし露佛戦争では、アウステルリッツ役から千八百十三年に到るまで、いとも困難な状況に遭遇する毎に、彼が重要な指揮官として働いて來た事實を、認めぬ譯に行かないのである。アウステルリッツでは、全軍が逃走したり戦死したりして、たゞ一人の將官さへ後衛にゐなかつた時、ドフトゥーロフは最後までアウゲストの堤防に踏み留まつて、聯隊を集めたり、出来るだけのものを救助したりした。また彼は熱病に悩み乍ら、僅か二萬の軍勢でナポレオンの全軍に對抗して、スモレンスクの防禦に馳けつけた。スモレンスクへ到着後激しい熱病の發作に襲はれて、やうやくマラホフスキイ門でうと／＼假睡みかけたかと思ふ間もなく、スモレンスク砲撃の音に目を醒された。さうしてスモレンスクはまる一日支持されたのである。ポロヂノの戦ひでは、バグラチオンが戦死して、わが左翼が一對九の割合で殲滅し、佛蘭西の砲火が悉くそこへ集中された時、急を救ふために派遣されたのは、ほかでもない、決斷力も洞察力もないドフトゥーロフである。クトゥゾフは初め他の人をそこへ派遣しようとしたが、急いで自分の謬りを正したのである。かうしておとなしい小柄なドフトゥーロフが馬を進めると、忽ちポロヂノの彼は露西亞軍の最も大なる光榮となつた。しかも多くの勇士が、詩や散文で今日まで傳へられてゐるにも拘らず、ドフトゥーロフについては殆ど一言も賀されてゐない。

今度もまたドフトゥーロフはフォミンスコエへ派遣され、そこから更に小ヤロスラーヰヅツへ廻された。それは佛蘭西軍との最後の交戦が行はれた場所であり、また明かに佛蘭西軍の滅亡が始つた所である。この時期に於ても、多くの天才や勇士のことが語り傳へられてゐるが、ドフトゥーロフについては一言も語られてゐない。よし語られてゐるとしても、たゞほんの僅かばかりか、それとも疑はしげな口吻を用ひてゐるに過ぎない。ドフトゥーロフに關するこの沈黙は、何よりも明瞭に彼の眞價を證明するものである。

機械の運轉を理解しない人が機械の動きを見たとき、この機械の最も重要な部分は、偶然その中に引つ掛つて、運轉を妨げながら／＼してゐる木つばだと思ふ、それは極めて自然なことである。機械の最も根本的な部分の一つが、ばた／＼しながら運轉を妨げる木つばではなくて、音もなく廻つてゐる小さな齒輪だと云ふことは、機械の構造を知らない人に、到底理解し得るものでない。

十月十日、即ちドフトゥーロフがフォミンスコエに達するまでの道程を半分ばかり進んで、アリストーゾと云ふ村に軍を止め、命ぜられた任務を精確に實行する準備をしてゐた當日、佛蘭西の全軍は痙攣的な行動を続けながら、多分戦闘開始の目的であらう、ミュラートの陣地まで達したが、不意に何の理由もなく右方の新カルーガ街道へ轉じ、たゞブルシエ軍のみが駐屯してゐる

ファミンスコエへ入り始めた。この時ドフトゥーロフの指揮下にあつたものは、ドーロホフのほか、フィグネルとセスラーギンの二小枝隊に過ぎなかつた。

十月十一日の晩、セスラーギンは佛蘭西近衛兵の捕虜をつれて、アリストーゾにゐる長官の所へやつて来た。捕虜の自白によると、今日ファミンスコエへ入つた隊は大きな全軍の前衛であつて、ナポレオンもその中にゐる、そして全軍が莫斯科を出てから、もう五日目になるとの事であつた。その晩ポーロフスクから来た一人の家僕は、大軍が町へ乗り込むのを見たと言つた。ドーロホフ枝隊の哥薩克兵も、ポーロフスクさして路を行軍してゐる、佛蘭西の近衛兵を見たと言つた。かう云ふ様な報告によつて見ると、たゞ一箇師團しかゐないと思つてゐた處に、今度莫斯科から思ひがけない方向を取つて——舊カルーガ街道に沿うて進んで来た、全佛蘭西軍の存在が明かになつた。ドフトゥーロフは、もう自分の任務が如何なる點にあるのか、はつきりと知ることが出来なかつたので、一切の行動を見合せた。彼はファミンスコエ攻撃の命令を受けて来たが、ファミンスコエには以前ブルシエ一人きりであつたけれど、今では佛蘭西の全軍が到着したのである。エルモーロフは自分の見込みで行動しようとしたが、ドフトゥーロフは公爵閣下の命令を得てからでなければならぬと主張した。で結局、司令部へ報告することに決つた。これがために、ボルホギチーノフと云ふ、よく物の分る將校が選ばれた。彼は報告書のほかに、

一切の状況を口頭で話さなければならなかつた。夜の十一時すぎにボルホギチーノフは報告書と口頭の命令を受けて、換馬を曳いた一人の哥薩克を随へ、總司令部へと馬を飛ばした。

一六

暗く暖い秋の夜であつた。もう四日も續けて雨が降つてゐた。ボルホギチーノフは二度馬を換へて、僅か一時間半の間に、どろ／＼したぬかるみ路を三十露里も駛つて、夜中の一時過ぎにレタシヨーフカへ着いた。編み垣の上に「總司令部」と云ふ標札の懸つてゐる百姓屋の傍で馬を降りると、そのまま馬を打ちやらかして暗い玄關へ入つた。

『當番將官を早く呼んでくれ！ 非常に重大な要件だ！』誰やら玄關の暗闇のなかに起き上つて、鼻を吸つてゐる男にむいて、彼はかう言つた。

『將軍は夕方から病氣であります。もう三晩もお寝みになりませんので。』と従卒らしい聲が庇ふやうな調子で囁いた。『それより大尉殿を先にお起しになつたら。』

『非常に重大な要件だ。ドフトゥーロフ將軍から派遣されたんだ。』手捜りで探し當てた開けつ放しの戸口へ入りながら、ボルホギチーノフはかう言つた。

従卒は先に立つて奥へ入ると、誰やら起し始めた。

『隊長殿、隊長殿——急使であります。』

『なに？ なに？ 誰から？』誰かの眠さうな聲がかう言った。

『ドフトゥーロフ將軍からです。アレクセイ・ペトローギッチからです。ナポレオンがファミンスコエ村にゐるのです。』とボルホギチーノフは言った。暗いので訊き手が誰やら分らなかつたが、聲の響きで察すると、コノヴニーツインではないらしかつた。

起された人はあくびに續いて伸びをした。

『わたしは將軍を起したくないんですよ。』と彼は何やら探りながら言った。『少々お加減が悪いんですからね！ たゞの風説ぢやないですか。』

『これが報告書です。』とボルホギチーノフは言った。『すぐに當番將官に渡せと云ふ命令でした。』

『一寸待つて下さい。あかりを點けますから、おい、畜生、一體貴様はいつでも何處へ突つて了ふんだ？』伸びをした男は從卒に向つてかう言った（これはコノヴニーツインの副官シチエルビーニンであつた）。『あつた、あつた。』と彼は附け足した。

從卒は燧石をかち／＼云はせ、シチエルビーニンは手さぐりで燭臺を探した。

『あゝ、いま／＼しい奴等だ！』彼は嫌惡に堪へぬやうにかう言った。

ボルホギチーノフは火花の光で、蠟燭を手にしたシチエルビーニンの若々しい顔と、前の方の隅に眠つてゐる別な人を見た。これがコノヴニーツインであつた。

附け木が初め青く、やがて赤い焰でほくちに燃え始めた時、シチエルビーニンは蠟燭に火をともして使者を見た（燭臺からは蠟燭を嚙つてゐた油蟲が逃げ出した）。ボルホギチーノフは體ぢう泥にまみれてゐたが、袖で顔を拭いたために、顔まで泥だらけにしてゐた。

『ですが、それは誰が報告したんです？』シチエルビーニンは封書を取りながらかう言った。

『確かな報告なんです。』とボルホギチーノフは言った。『捕虜も哥薩克も間諜も——みんな口を揃へて同じ事を言ふのです。』

『どうも仕方がない、お起ししなきや。』シチエルビーニンはしぶ／＼立ち上つて、夜の頭巾を被り、外套にくるまつて寝てゐる人の傍へ寄りながら、かう言った。『ピョートル・ペトローギッチ！』と彼は言った（コノヴニーツインは身動きもしなかつた）。『司令部がやつて來ましたよ！』彼はにやりとしながらかう言った。この言葉で必ず彼を起すことが出來ると知つてゐたので。

果せる哉、夜の頭巾を被つた頭はすぐ持ち上つた。熱のために燃えるやうな頬をした、コノヴニーツインの美しい引き締つた顔には、ほんの一瞬間、現状から遠くかけ離れた夢見心地がまだ

残つてゐたが、やがて不意に彼はぶるつと身慄ひした。と、その顔はいつもの落ち着いた、毅然たる表情を帯びて來た。

『一たい何事だ？ 誰の使だ？』灯りのために瞬きしながら、急きこみはしなないが少しの猶豫もなく、彼はかう訊ねた。

將校の報告を聞きながら、コノヴニーツインは報告書を開封して讀んだ。讀んで了ふか了はぬ中に、彼は毛絲の長靴下を穿いた兩足を土間へ下して、靴を穿きにかゝつた。次に頭巾を脱ぎ、鬢の毛を掻きつけて、軍帽を被つた。

『君は随分早く着いたやうだな？ さあ、公爵閣下のところへ行かう。』

コノヴニーツインは、齎された報告が非常に重大な意味をもつてゐて、一刻の猶豫も出來ないとすぐさま悟つたのである。彼はこの報知がよいことか悪いことか、さう云ふことは考へもしなければ、自ら反問もしなかつた。そんな事は彼に取つて興味がなかつたのである。彼は戦争に關するすべての事件を見るのに、智力や判断を用ひないで、何かほかの物に依つてゐた。彼は口こそ出さね、何事もうまく行くだらうといふ、深い信念を心中に潜めてゐた。しかしそれを信じていけなければ、口に出すのはなほ更よくない、たゞ自分のなすべき事をすればいいのだ、と、かう思つてゐた。で、彼は全力を傾注して自分の任務を盡したのである。

ピョートル・ペトロギッチ・コノヴニーツインは、ドフトゥーロフと同じやうに、所謂千八百十二年の勇士達——バルクライ、ラーエフスキイ、エルモーロフ、プラートフ、ミロラードギッチなどと云ふやうな人々の間に、たゞほんのお義理で名を列ねて貰つてゐるに過ぎない。そしてドフトゥーロフと同じやうに、矢張り無能無識の譏を受けてゐた。またコノヴニーツインはドフトゥーロフと同様に、決して作戰計畫を提出するやうな事などしなかつたが、常に最も困難な局に當つた。當番將官に任命されて以來、どんな使が來ても起すやうに吩咐けて、いつも戸を開けたまゝ寝についた。戦闘の時はいつも砲火に身を曝すために、クトゥゾフはそれを譴責して、彼を戦線へ出すのを恐れるほどであつた。彼はドフトゥーロフと同じやうに、騒々しく鉦太鼓を鳴らしはしなかつたけれど、機械のもつとも主要な部分を成す齒輪の一つであつた。

コノヴニーツインは、じめ／＼した暗い夜の中へ出ながら顔を擧めた。一つはまた募つて來た頭痛のためでもあつたが、一つはふと頭に浮んだ不快な考へのためでもあつた。今この報知が傳へられると、例の司令部付き権力階級の巢が全體に騒ぎ出すことだらう。殊にタルーチノ以來クトゥゾフと犬猿も管ならぬ、ベニグセンが騒ぎ出すに相違ない。そしてみんなが提言したり、議論したり、命令を發したり、變更したりすることだらう。彼はその避け難いことを知つてゐたけれど、さう云ふ事を豫想すると不快の感を禁じ得なかつた。

果せるかな、彼がトールの許へ行つて新しい報知を傳へると、トールはすぐさま一緒に住んでゐる將官に向つて、自分の意見を述べ始めた。ぐつたりとして無言のまゝ聞いてゐたコノヴィーツインは、そろ／＼公爵閣下の所へ行かなければと彼に注意した。

一七

クトゥゾフはすべての年とつた人達の例に洩れず、毎夜少ししか眠らなかつた。彼はよく晝間、突然こくり／＼居睡りを始めた。しかし夜、服を脱がないで床に就くと、多くは寝ないで考へてばかりゐた。

彼は今もさう云ふ風に、傷痕だらけの重い大きな頭をぶく／＼した手に載せて、寢臺の上に身を横たへたまゝ、隻眼を開けて闇の中を見詰めながら、じつと考へ耽つてゐた。

皇帝と直接書面の往復をして、司令部中たれよりも勢力をもつてゐるベニグセンが、クトゥゾフを避けるやうになつて以來、彼は自分も軍隊も、二度と再び無益な攻撃行動を強ひられはしまいと思つたので、その點に於てすつと氣が落ちついて來た。病的なくらゐ彼の記憶に刻み込まれてゐる、タルーチノの戦闘とその前日の教訓も、矢張り利き目があつたに相違ない、かう彼は考へた。

「攻勢をとれば敗けるだけだと云ふことは、彼等も合點していゝ筈だ。忍耐と時間——これがわしの勇士なのだ！」とクトゥゾフは考へた。林檎はまだ青いうちに取つてはいけない、それを彼はよく知つてゐた。林檎は熟したらひとりでに落ちるものである。青いうちに搥ぐと、林檎の實と樹を傷つけるばかりか、自分でも齒の根を浮かさなければならぬ。彼は熟練した獵師のやうに、獸が手傷を負うた事を知つてゐた。露西亞全軍の力が許すかぎりの手傷を負はした。しかし致命傷かどうかと云ふ事は、未詳の問題であつた。尤も今ではクトゥゾフも、ロリストーンやベルテミなどの派遣と、遊撃隊の報告に依つて、獸の傷が致命傷であることをほゞ知つてゐた。けれどもまだ確證が必要であつた、待たなければならなかつた。

「みんなは獸を殺したかどうか、駈け出して行つて見たいのだ。まあ、もう少し待つて見れば分ることではないか。いつも策動とか進撃とか、そんな事ばかり言つてゐる！」と彼は考へた。「何のためだ？ たゞ殊勳を立てたいばかりなんだ！ まるで戦争するのを、何か面白い事やうに思つてゐる。自分達がどのくらゐ喧嘩が上手か、と云ふことばかり見せたがつて、様子を訊いても皆目わけの分らない子供のやうなものだ。しかし今はそんな事が問題ぢやないのだ。」

「あの連中はみんな實に巧妙な作戦を薦める！ 先生達は二つか三つ偶然の場合を考へ出すと（彼は彼得堡から來た全局的作戰計畫のことを想ひ出した）、何もかもみんな考へ付いたやうに思

つてゐるらしい。ところが、偶然には數限りがないのだ！」

ボロヂノで與へた傷が致命傷かどうかと云ふ未決問題は、もうまる一箇月の間も、クトゥゾフの頭上に懸つてゐた。一方佛蘭西軍は莫斯科を占領してゐる。また一方クトゥゾフは、自分がすべての露西亞人と一緒に、全力をふるつて加へたあの恐い打撃が、當然致命的のものでなければならぬと、全存在を擧げて痛感してゐた。しかしいづれにしても證據が必要であつた。彼はそれをもう一箇月も待つてゐたのである。時が経てば経つだけ、いよゝ待ち遠しくなつて來た。彼は眠れぬ夜半の床に横たはつたまゝ、若い將官達と同じやうなこと——彼自身非難してゐることをするのであつた。彼は若い將官達と同じやうに凡ゆる偶然を考へた。けれど兩者の間の相違は、彼がそれらの豫想の上に何物をも築かなかつた事と、さう云ふ豫想を二つや三つでなく、幾千となく認めた點なのである。彼が長く考へれば考へるほど、その豫想もますます多くなつた。彼はナポレオン軍の全體または一部分のあらゆる行動——彼得堡への進撃、クトゥゾフ軍に對する攻撃あるひは迂回——を考へた（これは彼の最も恐れる所であつた）。また彼はナポレオンが敵の武器で戦ふ場合、即ち莫斯科に留つて、自分を待ち受ける場合も考へた。クトゥゾフはナポレオン軍がメドゥインから、ユフノフ方面へ退却する場合さへ考へた。しかししたつた一つ彼の豫想出來なかつた事があつた。それは實際に生じた事なのである。即ちナポレオン軍が莫斯科出發

後、最初の十一日間に示した氣ちがひめいた癡癡的な彷徨である。その彷徨は當時のクトゥゾフでさへ夢にも見ることが出來なかつた、佛蘭西軍の全滅を實現させたのである。ブルシエ師團に關するドーロホフの報告、ナポレオン軍の災厄に關する遊撃隊の報知、莫斯科出發の準備に關する風説——これらはすべて佛蘭西軍が撃破されて、敗走の準備をしてゐると云ふ豫想を、裏書するものであつた。しかしこれは若い人にとつて重大らしく思はれる豫想であつて、クトゥゾフを動かす性質のものではなかつた。彼は六十年間の經驗によつて、すべて風説といふものにどのくらゐ重きを置いたらよいか知つてゐた。また何事か望んでゐる人が、自分の希望を裏書するやうに、すべての報告を整理安排して、その場合すべて反對矛盾するものを、悦んで見通して了ふと云ふことも知つてゐた。クトゥゾフは自分の希望が強ければ強いだけ、益々それを信ずることを自ら警めた。この問題が彼の全精神を支配してゐたので、その他のものはすべて彼にとつて、ただ習慣的生活の履行に過ぎなかつた。司令部員との會話や、タルーチノから送つたマダム・スタール宛ての手紙や、小説の繙讀や、賞與の分配や、彼得堡との文通などが、即ちこの習慣の履行であり、生活に對する服従なのであつた。けれど彼一人のみが豫見してゐた佛蘭西軍の滅亡は、彼にとつて唯一の精神的希望であつた。

十月十一日の夜、彼は肱枕をして横になつたまゝ、このことを考へてゐた。

隣室に人の氣配がした。と、すぐにトールと、コフヴニーツインと、ボルホギチーノフの足音が聞えた。

『おい、そこにゐるのは誰だ？ 入つて来い、入り給へ！ 何か珍しい話でもあるのか？』と元帥は聲を掛けた。

從僕が蠟燭を點してゐる間に、トールは報告の内容を物語つた。

『誰がその報告を持つて来たんだ？』とクトゥゾフは訊いた。蠟燭が點いたとき、トールはクトゥゾフの冷たい嚴つい顔色に一驚を吃した。

『閣下、それには一點も疑ひの餘地がありません。』

『呼んでくれ、その男をこゝへ呼んでくれ！』

クトゥゾフは一方の足を寢臺から垂れ、今一方の曲げた足に大きな腹をのし掛けながら、じつと坐つてゐた。彼は使者の様子をよく見さだめて、始終自分の心に掛つてゐることを、その顔色から讀み取らうとでもするやうに、見える方の片眼を細くした。

『さあ、君、聞かしてくれ、聞かしてくれ。』彼は一ぱい開いてゐる襦袢の前をかき合せながら、老人らしく低い聲でボルホギチーノフにかう言つた。『もつと傍へ来るがよい、もつと傍へ。どんな報知を持つて来たのだ？ うむ？ ナポレオンが莫斯科を出たつて？ 本當にさうか？』

『うむ？』

ボルホギチーノフは命ぜられたことを、もう一度詳しく報告した。

『早く話してくれ、早く。氣をもましてくれるな。』クトゥゾフはボルホギチーノフの言葉を遮つた。

ボルホギチーノフはすつかり話してふと、口を噤んで命令を待つてゐた。トールが何やら言ひ出したが、クトゥゾフはそれを遮つた。彼は何か言はうとしたが、その顔が急に曇つて皺だらけになつた。彼はトールに向つて片手を振ると、くるりと後ろ向きになつて、澤山の聖像で黒く見える部屋の一隅へ向いた。

『神よ、我等の主よ、爾は我等の祈りを聴こしめし給へり……』彼は両手を組んで、慄へる聲でかう言つた。『露西亞は救はれた、神様、わたくしはあなたに感謝いたします。』かう言つて彼は泣き出した。

この報知を受け取つてから戦争の終るまで、クトゥゾフの全活動は、たゞ一事に傾注されてゐた。それは権力と機智と懇願によつて麾下の軍隊を抑制し、無益な攻撃や策動や、自滅しつゝあ

敵との衝突を、回避せしむる事であつた。ドフトローロフは小ヤロスラーエツツへ進んだが、クトゥゾフは全軍を率ゐて逡巡を続けながら、カルーガ撤退の命令を發した。カルーガの彼方へ退却することは、極めてあり得べき事と思はれたのである。

クトゥゾフは到るところ退却ばかりしてゐた。しかし敵は彼の退却を待たずして、反對の方向へ逃走するであつた。

ナポレオン史家は、タルーチノ及び小ヤロスラーエツツ方面に於ける彼の巧妙な策動を叙述して、もしナポレオンが豊饒な南方の諸州に侵入してゐたなら、果して如何なる結果を生じたらうか、と云ふやうな想像をめぐらしてゐる。

しかし、ナポレオンがこの南方諸州へ入るのを妨げるものは、何一つなかつたのである（何故と云つて、露西亞軍はナポレオンのために進路を開いてゐたからである）。が、それは別にしても、ナポレオン軍を救ひ得るものが何一つとしてなかつた事を、歴史家は忘れてゐるのである。なぜと云つて、ナポレオン軍は既にその當時、避け難い滅亡の條件を自分自身の中に藏してゐたからである。莫斯科で豊富な糧食を見出しながら、それを維持する事が出来ないで脚下に蹂躪したナポレオン軍、スモレンスクへ入つた時も糧食を整理せずに、掠奪をほしきままにしたナポレオン軍が、莫斯科と同じやうに、燃えついたものを悉く焼き盡す性質を持つた火を有し、同じ露

西亞人を住民としてゐるカルーガ縣で、どうして頽勢を挽回することが出来よう？

ナポレオン軍は何處へ行つても、頽勢を挽回し得る筈がなかつたのである。この軍隊はポロヂノ會戰と莫斯科掠奪の後、もう一種の化學的解體の條件を自分自身の内に含んでゐたのである。

嘗て軍隊を組織してゐた人々は（ナポレオンを初め一兵卒に到るまで）、現在の行き詰つた境遇から少しも早く、自分一人だけでも遁れたいと云ふ希望を抱きながら、所屬部隊の指揮官と共にあてもなく走つた。彼等は自分の境遇が行き詰つたことを、漠然ながら意識したのである。

たゞこの一つの理由によつて、小ヤロスラーエツツの會議の席で、彼等——將軍達——は様々な意見を持ち出しながら、如何にも評議をしてゐるやうな風を粧つてゐたが、最後に率直な一兵卒のムートンが、出来るだけ早く逃げ出した方がよいと云ふ意見、即ちすべての人が腹の中で考へてゐることを表白した時、將軍達はみな口を噤んで了つた。そして誰一人として——ナポレオン自身でさへ、一同の意識してゐるこの眞理に、一ことも反對することが出来なかつた。

かうして一同は退却の必要を知つてゐたけれど、しかし逃走しなければならぬと云ふ意識を、恥づる心持がまだ残つてゐた。この羞恥心を征服するには、外部的衝動が必要であつた。しかもこの衝動は必要な時に現れた。それは佛蘭西人の所謂 *le Hourra de l'Empereur* (伏兵の) であつた。

會議の翌日ナポレオンは軍隊を檢閲し、過去及び將來の戰場を視察すると云ふ口實の下に、朝早く幕僚の諸元帥や護衛兵を隨へて、軍隊配備線の中央に馬を進めた。かねて獲物の附近を彷徨出沒してゐた哥薩克の一隊が、偶然皇帝の一行にぶつ突かつて、危く彼を生捕にするところであつた。この時哥薩克兵がナポレオンを生捕にしなかつたのは、佛蘭西軍を滅したと同じ原因が、彼を救つたからであつた。それは他でもない、哥薩克兵がこゝでもまたタルーチノと同様に、人間には眼もくれず鹵獲品に飛び蒐つたのである。彼等はナポレオンに氣がつかないで、獲物の方へ飛んで行つたので、ナポレオンはその間に遁れ去ることが出来た。

Yes enfans du Don (ドン河の子等)がかう云ふ風に皇帝自身を、友軍のたゞ中で、殆ど生捕にするこゝとさへ出来たとすれば、今はもう覺えのある手近な路を、出来るだけ早く逃げるより他、方法がなくなつたと云ふことは明かである。いかにも四十男らしい便々たる腹を抱へたナポレオンは、もう以前の敏捷と勇氣がなくなつたのを感じながら、この暗示を理解したのである。彼は哥薩克兵から受けた恐怖に支配されながら、すぐさまムートンの意見に同意して、歴史家の言葉を藉れば、スモレンスク街道へ退却の命令を發した。

ナポレオンがムートンの意見に同意して、軍隊が退却を始めたこと云ふことは、彼が退却を命じたこと云ふ事實を證明するものではない。たゞ全軍に働きかける力——モジャイスク街道傳ひに軍

隊を進めた力が、同時にナポレオンにも働きかけたことを示すに過ぎないのである。

一九

人間は運動状態にある時、いつもその運動の目的を案出するものである。千露里の路を進むためには、この千露里の彼方に何かいゝ物があると思はなければならぬ。運動の力を得るためには、聖約の地といふ觀念が必要になつて来る。

佛蘭西軍にとつて進撃當時の聖約の地は莫斯科であり、退却の時は故郷であつた。けれど故郷は餘りに遠かつた。で、千露里を歩む人は究極の目的を忘れて、今日四十露里行けば、休息と宿泊の地に到着するのだと、必然的にかう考へざるを得ない。そして最初の一行程を進む間、この休息の地は究極の目的を蔽ひ隠して、その中にすべての望みと願ひを集中して了ふ。個々の人に現はれる欲求は、群集となつた場合、常に廓大されるものである。

スモレンスク舊街道を退却し始めた佛蘭西軍にとつて、故郷と云ふ究極の目的は餘りに遠かつた。で、一番手近な目的はスモレンスクであつた。すべての願ひと望みは、群衆の大きさに比例して廓大されながら、この目的に向つて集中されてゐた。事情を知つてゐる者も知らない者も、皆一様に自分で自分を欺きながら、聖約の地へ進むやうな氣持でスモレンスクへ向つた。別段ス

モレンスクに糧食や、新鋭の軍隊が澤山あると思つたのでもなければ、人からそんなことを聞いた譯でもない（それどころか、却つて軍隊の最高幹部もナポレオン自身も、モレンスクに糧食の少い事を知つてゐたのである）、たゞこの事一つだけが彼等に動く力を與へ、現在の困窮に耐へる力を授けたからである。

佛蘭西軍は大街道へ出るや否や、驚くべき精力と前代未聞の速力をもつて、その假想目的に向つて突進した。佛蘭西兵の群衆を一體に結合させ、それに或る種の精力を與へた、この共同努力なる原因以外に、佛蘭西人を結合させる今一つの原因があつた。それは佛蘭西兵の數であつた。物理學に於ける引力の法則と同じやうに、彼等の大群衆それ自身が個々の分子——人間を引き寄せたのである。彼等はまるで一つの王國のやうに、十餘萬の集團を形作りながら動いて行つた。彼等はみな一樣にたゞ一つを望んでゐた。それは敵方の捕虜となつて、ありとあらゆる恐怖や不幸を遁れることであつた。けれど一方に於ては、モレンスクといふ目的に向つて走る全體の力が、すべての人を同一の方向へ引きつけた。また別な方面から見ても、一軍團が一中隊の捕虜になる譯にはゆかなかつた。佛蘭西兵は互に離れぬになつて、一寸でも體裁の好い口實があれば投降しよう、絶えず機會を狙つてゐたにも拘らず、さう云ふ機會は矢鱈に見附からなかつた。それに佛蘭西軍の兵數も密集した迅速な運動も、彼等からさう云ふ可能を奪つたのである。露西

亞側にとつても、佛蘭西兵の群衆が全精力を集中したこの運動を阻止するのは、單に困難なばかりでなく不可能なことであつた。物體を機械的に分裂しても、現に行はれつゝある腐敗作用を、ある限度より以上に速めることは出来ない。

雪の塊りを一瞬間に溶かすことは不可能である。それには一定の時間の限度があつて、どんなに強く熱を加へても、その限度より速く溶かすことは出来ない。却つて、熱を加へれば加へるだけ、残つた雪はますます堅くなるものである。

露西亞軍の指揮官の中でも、クトゥゾフより外には、誰一人それを理解するものがなかつた。佛蘭西軍の潰走がモレンスク街道に沿うて方向を定めた時、十月十一日の夜コノヴニーツインが豫見した事は、いよゝ的の中し始めた。軍の最高幹部はみんな殊勳を立てたり、敵の退路を遮断したり、捕虜にしたり、顛覆したりすることを望んで、誰も彼も攻撃を要求した。

たゞクトゥゾフ一人だけは、自分の全力を（どんな總指揮官でも、餘り大きな力を持つてゐるものではない）攻撃反對に傾注した。

クトゥゾフとても、今日我々が言つてゐるやうなことを、彼等に言つて聞かせることは出来なかつた。決戦したり、退路を遮断したり、味方の兵員を失つたり、不幸なものを無情に追窮して打ちのめしたりして、それが果して何になるか？ 莫斯科からギャージマまで行く間に、敵軍の

三分の一が戦はずして消滅したのに、なぜそんなことをする必要があるか？——こんな事を當時のクトゥゾフは、口に出して言ふことが出来なかつた。しかし彼は自分の老人らしい智慧の中から、人々の理解し得るやうなものを抜き出して話した——彼は皆に黄金の橋のことを言つて聞かした。すると人々は彼を嘲笑したり讒謗したりした。そして殺された獣の前で暴れたり、跑いたり、力んだりしたのである。

エルモーロフ、ミロラードギッチ、プラートフその他の者は、ギャージマ附近で佛蘭西軍に接近したために、佛蘭西の二箇軍團の退路を断つて、これを顛覆しようと言ふ希望を抑へることが出来なかつた。そして自分達の計畫をクトゥゾフに傳へる時、報告書の代りに一葉の白紙を封筒の中へ入れてやつた。

どんなにクトゥゾフが友軍を抑へようとしても、将卒は突撃して敵の退路を断たうとした。傳ふる所に依ると、歩兵の數箇聯隊は樂隊を奏し、太鼓を打ち鳴らしながら突撃して、數千の人命を奪ひかつ失つたとのことである。

けれど肝腎の退路を断つと云ふ段になると——誰一人そんなものを断つことも出来なければ、また顛覆することも出来なかつた。佛蘭西軍は危険のためにいよ／＼堅く緊縮して、じり／＼と断えず消えて行きながら、依然スモレンスクさして滅亡の路を續けるのであつた。

第十四編

ポロヂノの會戦と、それに續く莫斯科の占領と、その後一戦も試みずに決行した佛蘭西軍の逃走は、歴史上もつとも教訓的な現象の一つである。

國家および國民が相互間に衝突を起した場合、その外面的な活動は戦争となつて現れる、また軍事的成功の大小如何によつて、國家および國民の政治的勢力の消長が直接に左右される——これはすべての歴史家の一致するところである。

ある王もしくは皇帝が、他の皇帝もしくは王と衝突したため、兵を集めて敵の軍隊と戦ひ、三千、五千、もしくは一萬なりの人間を殺して勝利を博し、その結果一つの國と幾千百萬の國民を征服した、かう云ふやうな歴史的記録は如何にも奇異に感じられる。また全國民の力の百分の一に過ぎない一軍隊の敗北が、どうして國民全體に屈服を強ひるのか、これもまた随分不可解な話である。しかし歴史上のあらゆる事實は（我々に知れてゐる範圍内で）、或る國の軍隊が他國の軍

隊に對して贏ち得た成功の大小が、民力消長の原因になる、少くとも根本的徴候になる、と云ふ説の正しさを裏書してゐる。軍隊が勝利を博するや否や、戰勝國民の權利は忽ち増大して、反對に敗戰國民の權利は減少する。軍が破れるが早い、すぐさまその敗北の程度に應じて、國民は權利を失はなければならぬ。もし軍隊が全く撃破されたならば、國民は全く征服されて了ふのである。

古代から今日に到るまで（歴史に従へば）常にこの通りであつた。ナポレオンの行つたすべての戰爭も、またこの法則を確證してゐる。奧太利軍の敗北の程度に應じて、奧太利國はその權利を失ひ、佛蘭西の權利と勢力が増大して行つた。イエーナとアウエルシテートに於ける佛蘭西軍の戰勝は、普魯西の獨立的存在を絶滅したほどである。

しかるに、思ひ掛けなく千八百十二年に到つて、佛蘭西軍は莫斯科附近に於て勝利を博し、莫斯科の町は占領された。それに續いて別段新しい戰闘もなかつたに拘らず、滅亡したのは露西亞でなくて六十萬の佛蘭西軍であり、次にナポレオン治下の佛蘭西帝國であつた。歴史の法則に強ひて事實を當て嵌めようとして、ボロヂノ役では戰場が露西亞軍の手に残つたとか、莫斯科の放棄後たび／＼行はれた戰闘が、ナポレオン軍を亡すに到つたのだ、などと云ふやうな強辯は不可能である。

佛蘭西軍がボロヂノで勝利を博した後に、一度も大決戦が行はれなかつたばかりでなく、多少なりとも重要視さるべき戰闘は全然なかつたにも拘らず、佛蘭西軍は存在を消したのである。これは一體何を意味するのであらう？ もしこれが支那歴史からでも取つた實例であれば、それは歴史的現象でないと言へたかも知れない（つまり何か自分等の尺度に當て嵌らない事が起つた場合、歴史家がすぐに利用する拔道である）。もしまた少數の軍隊しか参加しなかつた、短期間の小衝突に關する事ならば、この現象を例外と解することも出来たであらう。しかしこの事件は我が父祖の眼前で行はれたことで、彼等にとつては祖國の生死の別れ目であつた。しかもこの戰爭はあらゆる著名な戰爭中で、最も大規模なものであつた。

千八百十二年の役で、ボロヂノの會戰から佛蘭西軍の掃蕩に到る期間は、次の事實を證明した——即ち戰爭の勝利は征服の原因でないばかりか、征服の不變の徴候でさへもない。國民の運命を決する力は征服者や、軍隊や、戰闘などでなくして、何か別のものに含まれてゐるのである。

佛蘭西の歴史家は、莫斯科出發前の佛蘭西軍の状態を記述するに當つて、この偉大な軍隊は騎兵と砲兵と輜重を除くのほか、悉く整然たる秩序を保つてゐたが、たゞ牛馬の糧秣が缺乏してゐたのだと力説してゐる。この災厄は何人といへども救済の方法がなかつた。何故と云つて、莫斯科近郊の百姓達は自分の乾草を焼き棄てて、佛蘭西軍に渡さうとしなかつたからである。

戦勝は通例の結果を齎さなかつた。それはほかでもない、佛蘭西軍の退却後、カルプやヴラー
スなどといふ無数の百姓が、市街掠奪のために荷馬車を持つて莫斯科へ出かけるより他に、全體
として個人的に少しも愛國心を示さなかつたけれど、どんなに好い相場をつけられても、莫斯科
へ乾草を持つて行かないで、どん／＼焼き捨てて了つたからである。

今かりに二人の人が劍を執つて、劍道のあらゆる法則に従ひながら決闘を始めたとして、勝
負はかなり長く續いてゐたが、不意に一人の敵手は自分が負傷をしたのに氣附いて、これは決し
て冗談ではない、自分の命にも關する大事だと悟ると、いきなり劍を投げ棄てて、あり合す一本
の棍棒をおつ取り上げ、びう／＼と振り廻し始めた。しかし目的を達する爲に最も確かな、最も
單純な手段を合理的に使用した敵手が、それと同時に騎士道の傳統に支配されて事件の真相を隠
し、自分は劍道のあらゆる法則に従ひながら、劍を以て果し合に勝つたのだ、とかう主張したと
假定しよう。もしこの決闘に關してかう云ふ記述を試みたならば、そこに如何なる混亂と曖昧が
起つて來るか、想像するに難くない。

法則どほりに戦はうと要求した劍道家は佛蘭西人であつた。劍を投げ出して棍棒を取つた敵手
は露西亞人であつた。劍道の法則によつて、一切を證明しようとする人は、この事件を記述した

歴史家である。

スモレンスクの焼失以來、従前の如何なる軍事的傳統にも當て嵌らない戦争が始つた。市街や
村落の焼失、戦後の退却、ポロヂノの打撃、それに續く再度の退却、莫斯科の炎上、掠奪兵の逮
捕、輸送車の奪取、遊撃戦——これらはみな法則はづれの事件であつた。

ナポレオンはこれを感じた。彼は劍道の正しい姿勢ポズで莫斯科にとどまりながら、敵手が劍を構
へる代りに棒を振り上げてゐるのを見た時から、斷えずクトゥゾフとアレクサンドル帝に向つて
（人を殺すのに何か法則でもあるかのやうに）、戦争の経過が凡て法則に反してゐると訴へた。佛
蘭西側が法則の蹂躪を訴へたり、露西亞側でも地位の高い人々が、何故か棍棒で闘ふのを恥しく思
つて、萬事法則どほりに *en quarte* (四第) や *en tierce* (三第) の姿勢を保つたり、*prime* (最初の) で巧
妙な突きを入れようとしたにも拘らず、國民戦争の棍棒は物凄い偉大な力をこめて振り上げられ
誰の趣味にも法則にも頓着せず、愚直ながらもよく目的に適ひつゝ、滅茶々に振り上げられた
り打ち下されたりして、つひに侵入軍が全滅して了ふまで、佛蘭西人を打ちのめしたのである。

千八百十三年に於ける佛蘭西軍のやうに、劍術のあらゆる法則に従つて會釋した後、優美慇懃
な態度で柄を逆さにして、寛大な征服者に劍を差し出さない國民は幸である。かう云ふ國家的試
練の時、ほかの國民は法則によつてどんな行動をするか、などといふことに一切頓着なく、率直

に氣輕に有り合せの棒を振り上げて、憤怒と復讐の情が侮蔑と憐愍に變るまで、散々に敵を打ちのめす國民は幸である。

二

いはゆる戦争の法則に對する違反の中で、最も明確かつ有利な方法は、個々に分散した人々が、一團に密集してゐる人々に向つて行動することである。この種の行動はいつも國民的性質を帯びた戦争に現れるものである。かう云ふ行動は、集團と集團とが相對峙する代りに、めい／＼離れ離れになつて個別に襲撃し、強力な軍隊の攻撃を受ければすぐ遁走し、更にまた機を見て襲撃する方法を云ふのである。西班牙の不正規兵はかう云ふ方法^{グレナダ}を採つた。高架索の山族もこれを行つた。千八百十二年に於ける露西亞人も、かういふ風にしたのである。

人々はこの種の戦争を遊撃戦と名づけ、この命名によつてその意義を明かにしたやうに思つてゐた。けれどこの種の戦争は、如何なる法則にも當て嵌らないばかりでなく、完全無缺と認められてゐる著名な戦術と全然正反對なのである。この戦術の云ふところによると、攻撃軍は戦闘の瞬間、敵より優勢を占めるために、自己の軍隊を集中しなければならぬのである。

然るに遊撃戦は（歴史の示す所によると常に成功してゐる）、この法則に全く相反してゐる。

この矛盾は用兵學が軍隊の力を、その數と同一視することから生じる。用兵學は兵の數が多ければ多いだけその力も大きいと云つてゐる。Les gros bataillons ont toujours raison (大軍は常に道^{有理を}有す)

かう云ふことを主張する用兵學は、かの機械學に似通つてゐる。機械學は力を量の方面からのみ觀察して、量が等しいか否かに基づいて、力が等しいか否かを斷定するものである。

力（運動の量）は、數量と速度の乗積である。

軍事に關して言へば、軍の力はその數に或る何物かを——或る未知の x を乗じたものである。用兵學は、兵數が屢々兵力と一致しないで、小部隊が大部隊に打ち勝つた無數の實例を、歴史の中に見出す結果、臆げながらこの未知の乗數の存在を認めて、或ひは幾何學的編成の中に、或ひは武装の中に、或ひは——これが一番普通な場合である——指揮官の天才の中に、この乗數を見出さうと努力してゐる。しかしかう云ふ風に、様々な意味の乗數を當て嵌めて見ても、史的事實と一致した結果を得ることは出來ない。

ところがこの未知の x を發見するには、戦時に於ける最高權の命令の效力に關して、勇士英雄に都合よく固定した虚偽の見解を、斷然捨てさへすればよいのである。

この x は軍の士氣である。即ち軍隊を編成してゐる各人の戦はんとする意志、自己を危險に投

じようと云ふ希望の多少に依るのである。戦闘に當る人々が天才の指揮を受けてゐようが、非天才の指揮を受けてゐようが、戦線が三重になつてゐようが、二重になつてゐようが、武器が棍棒であらうが、一分間に三十回も發射する銃であらうが、そんな事には全然關係がないのである。最も多く戦闘の希望をもつてゐる人は、常に最も有利な戦闘條件に身を置くものである。

軍の士氣は乗數である。これを數量に乗じて、始めて力なる積を得ることが出来る。この未知の乗數、即ち軍の士氣の意義を定めて表現するのが、取りも直さず用兵學の目的である。

未知の x の意義を研究する代りに、力の發現に伴ふ條件を、勝手に當て嵌めるやうな方法を棄てた時、初めてこの問題の解決が望まれるのである。つまり軍指揮官の指令や、武装などを乗數の意味に取り扱ふのを止めて、この未知數（即ち程度に多少の相違こそあれ、兵員の戦はんとする意志と、自己を危険に投ぜんとする希望）を、全圓的に認めねばならない。その時初めて或る歴史的事實を方程式で現し、この未知數の相對的意義を比較する事に依つて、未知數そのものの定義を望むことが出来るのである。

十人の人、或ひは十の大隊乃至師團が、十五人の人、或ひは十五の大隊乃至師團と戦つて勝つたとする。つまり一人残らず敵を殺戮し捕虜にして、自分の方では僅かに四人だけ失つたとする。さうすれば一方は四人を失つたのに反して、今一方は十五人を失つたのであるから、四は十五に

匹敵した譯である。それ故、 $4x = 15y$ であり、従つて $x : y = 15 : 4$ である。この方程式は未知數の意義を解き示してこそくれないが、しかし二箇の未知數の關係を示す道理である。種々な方法で取り出された歴史上の單位（戦闘、戦役、戦争の期間）をかう云ふ方程式に當て嵌めて見ると、そこに幾つかの數が得られる。これらの數の中に何等かの法則が存在すべきであり、また發見の可能性も存在するのである。

進撃の際には集團的に行動し、退却の際には分散せよと教へる戦術上の原則は、兵力が軍の士氣に左右されると云ふ眞理を、無意識に立證してゐるにすぎない。多くの人を砲彈の下へ導くには、攻撃軍を撃退する時より以上の規律を要する。そしてこの規律は集團行動によつてのみ得られるのである。しかし軍の士氣を無視してゐるこの原則は、常にその不正確を暴露する。殊に軍の士氣が甚しく昂揚したり銷沈したりする場合——例へばすべての國民的戦争に於て、著しく實際と背馳するものである。

佛蘭西軍は千八百十二年の退却の際、戦術から言へば個々に分散して防禦すべき筈なのに、却つて一團に塊つてしまつた。それは軍の士氣が極度に沮喪して、たゞ集團に依つて漸く軍を支へることが出来たからである。これに反して露西亞軍は、戦術から言へば集團で攻撃すべき筈であるにも拘らず、實際はばらばらに分散してゐた。それは軍の士氣が甚しく昂揚して、個人々々が

命を待たずに佛蘭西軍を攻撃したので、彼等をして困難と危険に身を投ずるやう、外部から強制する必要がなかつたのである。

三

いはゆる遊撃戦は、敵がスモレンスクへ入つた時から始つた。

遊撃戦が我が政府に依つて公然採用される前、すでに數千人の敵兵——落伍者、掠奪兵、徴發隊など——は哥薩克や百姓共に剿滅された。丁度犬の群が風來の狂犬を無意識に噛むやうに、彼等は無意識に敵兵を打ち殺したのである。ヂェニス・ダヴィドフは露西亞人獨特の直覺で、戦術などに頓着なく佛蘭西軍を滅した、かの恐しい棍棒の價値を第一番に曉つた。そして、この戦法を正則化する第一歩の名譽も彼のものとなつたのである。

八月二十四日、ダヴィドフの第一遊撃隊が編成されると、やがて他の隊も次ぎ／＼と編成されるやうになつた。戦局が進展するにつれて、かう云ふ部隊の數はますます／＼多くなつた。

遊撃隊は巨大な敵軍を端から端から滅して行つた。彼等は枯れ果てた佛蘭西軍の樹から、自然に落ちる葉を拾つて行つた。時とすると、その幹を揺ぶる事もあつた。十月になつて、佛蘭西軍がスモレンスクさして走つてゐる時など、大さや性質を異にしたこの種の徒黨が、幾百となく出

來上つてゐた。中には軍隊としての形式を悉くとり入れて、歩兵や、砲兵や、司令部や、その他生活の必要品さへ備へたのもあつた。中にはたゞ騎馬の哥薩克のみから成り立つたのもあつた。歩兵と騎兵と混合の小さな集團もあつた。誰も知らない百姓や地主の徒黨もあつた。一箇月のうちに數百の捕虜を得た助祭を、指揮者に戴いてゐるのもあつた。また數百人の佛蘭西兵を殺したと云ふ、村長の女房のワシリーサもあつた。

十月の下旬は遊撃戦の最も酣な時であつた。この戦の第一期、即ち遊撃隊が自分で自分の大膽に驚き乍ら、斷えず佛蘭西軍のために擱まつたり、圍まれたりしはしないかと恐れて、鞍も解かなければ馬からも殆ど下りないで、林の中に潜伏しながら、今か今かと追撃を待つてゐたやうな時期は、もう過ぎてしまつた。今ではこの戦法はちやんと固定して了つて、佛蘭西軍に對してなすべき事と否とが、すべての人にはつきりと分つて來た。もう今となつては、色々な仕事を不可能と思つてゐるのは、法則通り司令部と共に佛蘭西軍から遠く離れて進んでゐる、大部隊の指揮官だけであつた。ずつと前から仕事を始めて、佛蘭西軍を手近に觀察してゐた遊撃兵の小部隊は、大きな隊の指揮官が夢にも考へないやうな事を、立派に實現出来るものと認めてゐた。佛蘭西軍の間を徘徊する哥薩克や百姓達は、今ならもうどんな事でも出来ると思つてゐた。

十月二十二日、遊撃戦士の一人たるヂェニソフは、徒黨と一緒に遊撃隊としての活動に熱中

してゐた。彼は朝から部下を率ゐて歩き廻つてゐた。彼は朝から晩まで、街道に接した林に沿つて、騎兵の附屬品と露西亞の俘虜から成る、佛蘭西の大輸送隊をつけ狙つてゐた。この輸送隊は他の軍隊から離れて、斥候や捕虜の言葉によると、強力な掩護を受けながら、スモレンスクへ向つてゐるのであつた。この輸送隊のことはヂェニソフや、ヂェニソフに接近して進んでゐるドーロホフ（矢張り小さな徒黨を率ゐた遊撃戦士であつた）に分つてゐたばかりでなく、司令部を持つた大部隊の長官達にも知れてゐた。皆この輸送隊のことを知つてゐて、ヂェニソフの言葉を借りると、腕に撚を掛けてゐるのであつた。かう云ふ大部隊の指揮官が二人——一人は波蘭人で一人は獨逸人である——殆ど同時にヂェニソフに使を送つて、いづれも自分の隊に合して輸送隊を襲はないかと勧誘した。

『駄目だよ、兄弟、俺だつて男一匹だ。』ヂェニソフは手紙を読んでかう言つた。そして早速獨逸人に返事を書いた。勇敢な名聲高い將軍の指揮下に働くのは、心の底から希望するところであるが、残念ながらこの幸福を斷念しなければならぬ。なぜと云つて、自分はもう波蘭人の將軍の麾下にいたから、とかう云ふ文意であつた。波蘭人の將軍の方へも矢張り同じやうな書面を送つて、自分はもう獨逸人の指揮に従ふことになつたと述べた。

ヂェニソフがかう云ふ處置をとつたのは、高級指揮官へ斷りなしに、ドーロホフと一緒に僅

かな手勢で例の輸送隊を襲ひ、それを鹵獲しようとしてゐたからである。輸送隊は十月二十二日、ミクローリノ村から шамшエブ村へ進んだ。ミクローリノから шамшエブへ通ずる街道の左側には、大きな林が続いてゐた。この林はところどころ、街道の傍まで迫つて來るかと思ふと、また處によつては一露里も、或ひはそれ以上も街道から離れてゐるのであつた。ヂェニソフはこの林の中を、奥ふかく入つたり端近くへ出たりし乍ら、行進中の佛蘭西軍を見失はないやうに、隊を率ゐて終日馬を進めてゐた。朝の中に、ミクローリノから餘り遠くない、林が街道近く迫つてゐる處で、ヂェニソフの徒黨に屬する哥薩克は、泥濘に没した佛蘭西軍の荷馬車を二臺、塔載してある騎兵用の鞍と一緒に鹵獲して、林の中へ引き込んだ。それからすつと晩まで襲撃せず、佛蘭西兵の行動を監視してゐた。ヂェニソフは佛蘭西軍を驚かさないうで、無事に шамшエブまでやり過し、夕方 шамшエブから一露里ばかり離れた林の中の見張所へ、打ち合せに來る筈のドーロホフと一緒になつて、夜明けがた兩方から不意に佛蘭西軍の寝ごみを襲撃し、一舉にして全軍を捕虜にしてはうと思つたのである。

ミクローリノから二露里へだてた後方には、林が街道近く迫つてゐるあたりに、六人の哥薩克が残された。彼等は新しい佛蘭西の縦隊が見えたら、さつそく報告する任務を帯びてゐた。

ドーロホフも矢張り шамшエブ前面の街道を調査して、ほかの佛蘭西軍がどのくらゐの距離

にあるか、突きとめなければならなかつた。輸送隊は千五百人と云ふ豫想であつた。然るにデニーツフの部下は二百人、ドーロホフの隊も矢張り同じ程度に過ぎなかつた。しかしデニーツフは敵の兵力が優勢なために、その企てを中止するやうなことはしなかつた。たゞ一つ知りたいのは、敵がどう云ふ隊から成り立つてゐるか、といふ事であつた。この目的のために、デニーツフは舌（即ち敵兵の一人）を掴まへなければならなかつた。今朝、荷馬車を襲撃した時は餘り急いので、荷馬車に附いてゐた佛蘭西兵を残らず殺して了つて、生擒つたのはたゞ落伍した少年鼓手だけであつた。そしてこの少年も、縦隊にどんな兵がゐるやら、確かなことを知らなかつたのである。

もう一度襲撃するのは、軍全體を騒がす虞があると思つたので、デニーツフは徒黨中のチーホン・シチェルバートフと云ふ百姓を、先にまづシャムシエデへやつて、もし出来る事なら、そこにゐる先着の佛蘭西宿營係を、一人でもいゝから捕虜にするやうにと命じた。

四

雨もよひの暖い秋の日であつた。空も地平線も一樣に濁り水のやうな色をしてゐた。時に霧のやうなのが降つてゐるかと思ふと、今度は俄かに大粒な雨が横なぐりに落ちて來るのであつた。

デニーツフはフェルトの外套に毛皮の帽子を被り、胴の引き締つて瘦せた純血種の馬に乗つてゐた。外套と帽子からは水が瀧のやうに流れ落ちた。馬は首を横に向け耳を伏せてゐたが、彼もそれと同じやうに横なぐりの雨のために顔を擧め、心配さうに前の方を見透かしてゐた。短く黒い鬚を一面に濃く生やした彼のやつれた顔は、何だか怒つてでもゐるやうに思はれた。

同じくフェルトの外套に毛皮の帽子を被り、肥つた逞しいドン馬に跨つた哥薩克の大尉が、デニーツフの相棒なのであつた。

矢張りフェルトの外套に毛皮帽を被つた、第二の哥薩克大尉ロヅイスキイは、背がひよろ長く、胸の邊が板のやうに平つたい男であつた。白い顔、亚麻色の髪、細い薄色の目、それから顔の様子にも乗り工合にも、落ち着き拂つた自足の色が浮んでゐた。馬と乗り手の特徴が何處にあるのか分らなかつたけれど、哥薩克大尉とデニーツフを一目見くらべただけで、デニーツフはずぶ濡れになつて如何にも工合悪さうで、要するに馬に乗つた人間だと云ふ感があつたが、哥薩克大尉の方を見ると、こちらは何時もの通り工合よささうに落ちつき拂つてゐるので、馬に乗つた人間といふよりも、むしろ馬と人とが一體になりきつて、その二重の力で廓大された存在物のやうに思はれた。

彼等の少し先には、灰色の長衣カフタンを着て、白い頭巾を被つた道案内の百姓が、びしよ濡れになつ

て歩いてゐた。

少し後ろからは、青い佛蘭西外套を着た若い將校が、痩せてひよろ／＼したキルギース産の馬に乗つて進んでゐた。尾と鬣の大きな馬で、唇は破れて血みどろになつてゐた。

その將校と並んで、一人の輕騎兵が馬を進めてゐたが、その後ろには方々裂けた佛蘭西の軍服を着け、青い頭巾を被つた一人の少年が乗つてゐた。少年は寒さのために赤くなつた手で、輕騎兵の體にしがみつきながら、むき出しの兩足を温めようと思つてもぞ／＼動かしたり、眉をつり上げて吃驚したやうに邊りを見廻したりしてゐた。これは今朝捕虜になつた佛蘭西方の鼓手であつた。

その後からは、轍の跡の縦横についた狭い長い林間の道路づたひに、輕騎兵が三人か四人づゝ續いて行くと、更にその後からは、或る者はフルトの外套、ある者は佛蘭西兵の外套を着込み、また或る者は頭から馬衣を被つた哥薩克が進んでゐた。馬は赤も栗毛も、瀧のやうに流れる雨のために、みんな黒馬のやうに見えた。そして頸は鬣が濡れたために奇妙に細く見えた。どの馬も體から湯氣を立ててゐた。服も、鞍も、手綱も——何もかも一切のものが、路に散り敷いてゐる。落葉や土と同じく、濡れてず／＼と腐つたやうになつた。人々は體の方まで流れこんだ水を温めるやうに、また尻や膝の下や頸筋へ侵入して來た、新しい、冷たい水の中へ入れないやうにす

るために、身動きもしまいと努めながら、體をすくめて固くなつてゐた。長くのびた哥薩克の列の中程には、佛蘭西の軍馬と鞍をつけた哥薩克の馬に曳かれた二臺の荷馬車が、切株や枝にぶつ突かつてがた／＼鳴つたり、水の溜つた轍の跡でばちや／＼音をたてたりした。

ヂェニーツフの馬は、行く手の水溜りを迂回しようと脇へそれた拍子に、乗り手の膝を樹の幹へした／＼か打つ突けた。

『え、こん畜生！』とヂェニーツフは憎々しさうに叫びながら、齒をむき出して鞭で三度ばかり馬を叩いたが、そのはずみに自分にも仲間にも泥水を跳ね飛ばした。

ヂェニーツフは不機嫌であつた。それは雨と空腹のためでもあつたが（みんな朝から何も食べてゐなかつた）、何より重なる原因は、今までドーロホフからまるで報告がないのと、「舌」を取りに行つた者が歸つて來ないことであつた。

「輸送隊を襲ふのに、今日のやうな機會はまたと再び來るかどうか分らない。しかし俺一人で襲撃するのは餘り冒険すぎるし、それかと云つて、この次に延したりなどすると、誰かの大きな遊撃隊が俺の鼻先で獲物をせしめて了ふだらう。」待ち兼ねてゐるドーロホフの使者を見つけようと、斷えず前方を見透しながら、ヂェニーツフはかう考へた。

右の方が遠く見渡せる伐木跡の空地へ出ると、ヂェニーツフは馬を止めた。

『誰か來てるぞ。』と彼は言った。

哥薩克大尉はデューニソフの指さす方角を見た。

『二人來てをります——將校と哥薩克と、しかし少佐ご自身だとは豫想困難であります。』と哥薩克大尉は言った。彼は部下に分らない言葉を使ふのが好きだったので。

二人の騎者は坂を降つて姿を消したが、やがて幾分か經つと再び姿を現した。長い鞭で馬を追ひながら、疲れ切つたやうな驅足で、先頭に立つて進むのは將校であつた。彼は頭をくしゃくしゃにして、體ぢうびつしよりに濡れしよぼけ、洋袴ズボンを膝の上まですり上らしてゐた。その後から一人の哥薩克が鐙の上に立つやうな恰好で、馬を驅けさせて來た。この將校はまだ若々しい少年で、幅の廣い薔薇色の顔に、快活な眼を敏捷に動かしてゐたが、デューニソフの傍へ驅け寄つて、濡れた封書を手渡しした。

『閣下からです。』と將校は言った。『濟みません、少し濡らしまして……』

デューニソフは顔を擧めて書状を受け取ると、封を開きにかゝつた。

『みんな危険だ危険だと言ひましてねえ。』デューニソフが渡された封書を読んでゐる間に、將校は哥薩克大尉に話しかけた。『尤もわたしはコマロフと、』彼は哥薩克を指さした。『二人でちやんと支度をしましたよ。二人とも二挺づゝピス……おや、これは何です?』佛蘭西の鼓手を

見て彼はかう訊いた。『捕虜ですか? あなた方はもう戦争したんですね? あれと話をしてもいゝですか?』

『ロストフ! ペーチャ!』丁度その時、渡された封書を走り讀みしたデューニソフはかう叫んだ。『一體どうして君は名を名乗らなかつたのだ?』デューニソフはにこ／＼しながら振り向いて、將校に片手を差し伸べた。

この將校はペーチャ・ロストフであつた。

ペーチャはこゝまで來る途すがら、デューニソフに會つたとき、以前からの知合ひだと言ふことを仄めかさなで、大人としてまた將校として恥かしくないやうに、立派な應對をしようと思ひ構へしてゐた。けれどデューニソフがにこり微笑するが早いから、ペーチャは直ぐに满面笑み輝きながら、嬉しさの餘り顔を赤くして、かね／＼用意してゐたよそ行きの態度を忘れて了つた。

彼は佛蘭西軍の傍を通り抜けて來た事や、かう云ふ任務を受けたのが嬉しいと云ふ事や、もうギャージマで戦闘に参加して、その時一人の輕騎兵が殊勳を樹てた事——などを話し始めた。

『いや、僕も君に會つて嬉しいよ。』とデューニソフは遮つた。と、その顔は再び不安げな色を浮べた。

『ミハイル・フェオクリーティッチ、』と彼は哥薩克大尉に話しかけた。『これもやはり獨逸人の

所から来た書面なんだ。この人はあの先生に附いてるんだよ。』

かう言つてデニソフは、いま持つて来た手紙の内容が、輸送隊襲撃のために合併せよと云ふ、獨逸將軍の再度の要求であることを、哥薩克の大尉に話して聞かせた。

『もし明日のうちに鹵獲しなければ、我々は自分の鼻先から獲物をさらはれて了ふんだ。』と彼は言葉を結んだ。

デニソフが哥薩克と話をしてゐる間、デニソフの冷淡な調子に當惑したペーチャは、それを自分の洋袴ズボンの不體裁から来たものと想像して、そつと誰も氣が附かないやうに、すり上つた洋袴を外套の下で直し、出来るだけ男々しい様子を見せようと努めた。

『少佐殿、何とご命令になりますか？』帽子の目庇へ片手を當てて、用意して来た副官と將軍ごつこに歸りながら、ペーチャはかう言つた。『それとも、わたくしは少佐殿の傍に残つてゐなければなりませんまいか？』

『命令？……』とデニソフは考へ深さうに言つた。『だが、君は明日まで残つてゐられるかね？』

『あゝ、後生ですから……僕あなたの傍にゐてもいいでせうか？』とペーチャは叫んだ。

『いつたい君は將軍からどんな命令を受けて来たんだね——すぐ歸れと言ふのかね？』とデニ

ソフは訊いた。

ペーチャは赤くなつた。

『いえ、別に何とも命令はありませんでした。僕かまはないと思ふんですが？』と彼は何ふやうに言つた。

『ぢやあ、いゝよ。』とデニソフは言つた。

それから彼は部下の方へ向いて、隊全部は林中の見張り場附近に指定された休憩地へ行くやうに命じ、キルギス産の馬に乗つた將校には（この將校は副官の役を勤めてゐた）ドーロホフを捜しに行つて、彼が今どこにゐるか、また晩に来るかどうか確めるやうに吩咐けた。デニソフ自身は哥薩克大尉とペーチャを伴つて、シャムシェデに面した林の一端に近づき、明日襲撃と豫定されてゐる佛蘭西軍の陣地を視察しようと考へた。

『さあ、鬚野郎、』と彼は案内の百姓に聲をかけた。『シャムシェデへつれて行け。』

デニソフとペーチャと哥薩克大尉は、幾人かの哥薩克と、捕虜を後ろに乗せてゐる輕騎兵を伴つて、凹地を越えて左方の森の一端へ進んだ。

雨は止んだ。そしてその後はたゞ霧がおりて、梢から雫が滴るだけであつた。ヂェニーツフも、哥薩克大尉も、ペーチャも、黙つて百姓の後からついて行つた。頭に頭巾を被つてゐる百姓は、木の皮靴をはいた外踏みの足で、音もなく軽々と、樹の根や濡れた落葉を踏みながら、一行を林の一端へ案内するのであつた。

とある傾斜へ出ると、百姓は立ち止つて邊りを見廻した後、樹立が疎らに並んでゐる方へ向つた。まだ葉をふるひ盡してゐない大きな樅の傍まで行くと、百姓は歩みを止めてさも神祕めかしく手招きした。

ヂェニーツフとペーチャはその傍に近づいた。百姓の立ち止つた處からは、佛蘭西軍が見渡された。林の直ぐ向うからは、春時の畑がだら／＼坂をなして下つてゐた。右の方には険しい谷を越えて、小さな村と屋根の崩れた地主邸が見えた。この村にも、地主邸にも、斜面全體にも、庭にも、井戸や池の傍にも、橋から村まで二百間ばかりの坂路全體にも、到るところ揺れ動く霧の中に人間の大群が見えた。荷車を曳いてゐる馬を坂へ追ひ上げる叫び聲や、互ひに呼び交す聲など、すべて露西亞語と違つた響が手に取るやうに聞えた。

『捕虜をこゝへ引つばつて來い。』ヂェニーツフは佛蘭西軍から眼を離さずに、低い聲でかう言つた。

哥薩克は馬から降りて少年を抱きおろすと、一緒にヂェニーツフの傍へ來た。ヂェニーツフは佛蘭西軍を指さし乍ら、あれはどう云ふ隊だ、これはどう云ふ隊だと疊みかけて訊いた。少年は凍えた兩手を衣囊の中へ突つ込んだまゝ、眉を上げて慄えたやうにヂェニーツフを眺めてゐた。そして知つてゐる事を残らず言つて了はうと云ふ希望は、明かに持つてゐるらしくたけれど、返答の言葉にまごついて、たゞヂェニーツフの訊く事を確めるだけであつた。ヂェニーツフは眉を擧げながら少年から顔を反け、哥薩克大尉の方へ振り向いて、自分の考察を告げた。

ペーチャは忙しげに頭を動かしながら、時には鼓手、時にはヂェニーツフ、時には哥薩克大尉、また時には村や道路にゐる佛蘭西兵を眺めながら、何かしら重大なものを見通すまいと努めた。

『ドーロホフなんか來ても來なくても、あれは取らんけりやならん!……なあ?』ヂェニーツフは愉快さうに眼を輝かしながらかう言つた。

『都合のいゝ地點ですからな。』と哥薩克大尉は言つた。

『歩兵を下の方から——沼地づたひにやる——』とヂェニーツフは語を續けた。『そして庭へ忍び寄せさせるのだ。ところで、君は哥薩克をつれてあつちから行く。』とヂェニーツフは村はづれの林を指差した。『おれは部下の輕騎兵を率ゐてこつちから出掛ける。そして一發の銃聲を合圖

に……』

『低地からは行けません……ぶよ／＼ですから。』と哥薩克大尉は言った。『馬が泥にはまつて了ひますよ。もつと左から廻らなけりや……』

かうして二人が小聲で話をしてゐる時、下の方の池に近い低地で一發の銃聲が響いて、一團の白い煙がぱつと擴がると、更にいま一發鳴り渡つた。つゞいて、丘の上にある數百の佛蘭西兵の、愉快さうに思はれるほどよく揃つた叫び聲が聞えた。最初の一瞬間、デニソフと哥薩克大尉は、思はず後ろへ身をひいた。餘り敵陣に接近してゐたので、自分達がこの射撃と叫喚の原因のやうに思はれたのである。しかし射撃と叫喚は、彼等に關係したものではなかつた。下の沼地を何か赤い物を著た男が走つてゐた。見受けたところ、佛蘭西兵はその男を狙つて射撃し、その男に向つて叫んでゐるらしかつた。

『あ、あれは隊のチーホンですよ。』と哥薩克大尉は言った。

『さうだ！ あいつに違ひない！』

『本當に仕様のない奴だ！』とデニソフは言った。

『なに、逃げおほせませすよ！』哥薩克大尉は眼を細めながらかう言った。

彼等がチーホンと呼んだ男は、小川の傍まで走りつくと、いきなりざんぶとその中へ飛び込ん

だ。ぱつとしぶきが散つて、一瞬間姿が見えなくなつたが、すぐさま全身黒々と濡れ鼠のやうになつて、四つんばひに岸へ這ひ上ると、また先へ先へと駆け出した。後から追つかけてゐた佛蘭西兵は立ち止つた。

『いや、すばしつこい奴だ。』と哥薩克大尉は言った。

『あの悪黨め！』デニソフは依然として忌々しげな表情でかう言った。『今まで何をしてゐやがつたんだらう？』

『あれは誰です？』とペーチャは訊いた。

『あれは隊の狙撃歩兵だ。おれが「舌」を取りにやつたんだよ。』

『あゝ、さうですか。』ペーチャはデニソフの言葉を一口聞くと、何もかもすつかり合點が行つたやうに點頭いた。その癖、彼はまるで一ことも分らなかつたのである。

チーホン・シチエルバートフは、仲間ぢうでもごく必要な人物の一人であつた。彼はグジャーチに近いポクローフスコエ村の百姓であつた。デニソフは自分の活動を開始する際、ポクローフスコエへ行つて例の通り百姓頭を呼び出し、佛蘭西軍について何か知つてゐる事はないかと訊いた。すると百姓頭は、すべての百姓頭の例に洩れず、まるで後難を恐れでもするやうに、佛

蘭西軍のことは一切存ぜぬ知らぬの一點ばかりであつた。けれどもデニソフが、自分の目的は佛蘭西人をやつつけることなのだと言明した後、佛蘭西兵がこの村へ迷ひ込みはしなかつたかと訊いた時、百姓頭はさう云ふ村荒らしが確かにやつて来たが、村でさう云ふことに關係してゐる者は、たゞチーシカ・シチエルバートフばかりだと言つた。デニソフはチーホンを呼んで來させて、その活動ぶりを賞めちぎつた後、百姓頭の前で、皇帝と祖國に忠義を盡すべき義務や、露西亞男子が佛蘭西人に對して抱くべき敵愾心などについて數言を費した。

『わしらあ佛蘭西人に悪いことなどしやしません。』デニソフの言葉に臆ぢ氣づいたらしく、チーホンはかう言つた。『わしらあ若え衆とほんの少しばかり惡戯しただけなんで。もつとも村荒らしはまつたく二十人ばかり殺したけれど、その他に何も悪いことあしなかつたでがすよ……』

翌日デニソフはこの百姓の事をすつかり忘れて、ポクローフスコエ村から出發したとき、チーホンが徒黨のものにうるさく付き纏つて、仲間に入れて貰ひたがつてゐる、と云ふ話を聞いた。デニソフはその乞ひを入れるやうに命じた。

初めチーホンは焚火を用意したり、水を汲んだり、馬の皮を剥いたりなどして、重に雑用をとめてゐたが、やがて間もなく遊撃戰に非常な興味と、手腕をもつてゐることが分つた。彼は毎

夜のやうに獲物を探しに出掛けて行つて、いつも必ず佛蘭西兵の服や武器などを取つて來た。それどころか、吩咐けられたら、捕虜さへつれて來るのであつた。で、デニソフはチーホんに雑用を免じて、斥候につれて行くやうになつた。そして彼を哥薩克の列に加へたのである。

チーホンは馬に乗るのが嫌ひで、いつも徒歩であつたが、それでも決して騎兵から後れるやうなことはなかつた。彼の武器と云つては、ほんの笑ひ草に持つてゐる火繩銃と、それに槍と斧であつた。彼がこの斧を自由に操るのは、丁度狼が巧みにその齒を使つて、毛の中の虱もとれば、大きな骨も噛み砕くのと同じやうであつた。チーホンは同じ程度の正確さをもつて、この斧を力一杯にふり上げて丸太も割れば、その頭を握つて細い串も削るし、匙なども造るのであつた。デニソフの隊の中で、チーホンは類のない特殊な地位を占めてゐた。何でも骨の折れる汚い事——例へば、ぬかるみに嵌つてゐる荷車を肩で押し出すとか、尻尾を掴へて馬を泥沼から引き上げるとか、馬の皮を剥ぐとか、佛蘭西軍のまつたぐ中へ忍び込むとか、一日に五十露里づゝも歩くとか、さういふ事をしなければならぬ時には、みな笑ひながらチーホンを指さすのであつた。

『あん畜生、どんな目にあつても平氣でゐるやがる、まるで頑丈な去勢馬だあ。』皆は彼のことをかう言つた。

ある時チーホンは一人の佛蘭西兵を掴まへようとして、拳銃で背中肉を射ちぬかれたことが

ある。チーホンは内用にも外用にも、たゞフォートカだけでこの傷を癒してゐたが、それが部隊中で何よりも愉快な冗談の種となつた。チーホンもまたその冗談に心持よく調子を合してゐた。

『どうだい兄弟、もうやらないか？ それとも骨身に徹へたかい？』と哥薩克達は冷かした。

チーホンはわざと體を竦めて、いかにも怒つたやうな振をしてしかめ面を作りながら、思ひ切つて滑稽な言葉で佛蘭西兵を罵るのであつた。この出来事がチーホンに與へた影響と云へば、この負傷以來あまり捕虜をつれて來なくなつただけのことである。

チーホンは徒黨の中で一番役に立つ勇敢な男であつた。誰一人として彼以上に襲撃の機會を發見する者もなければ、誰一人として彼以上に佛蘭西兵を捕虜にしたり、殺したりするものもなかつた。しかも、彼はそのためにすべての哥薩克や輕騎兵達の道化役にされてゐたし、また彼自身も喜んでこの役割を引き受けるのであつた。この日もチーホンは、まだ暗いうちから舌をとつて來るために、デューニソフの命でシャムシェブへ遣られたが、一人くらの佛蘭西兵では満足しなかつたためか、それともうっかり寝過した爲か、彼は晝日な藪を潜つて佛蘭西軍の眞中に入り込んだ。そしてデューニソフが丘の上から見た通り、佛蘭西兵のために發見されたのである。

六

デューニソフはなほ暫くの間、明日の攻撃（佛蘭西兵を間近に見た彼は、いよいよそれを決心したらしかつた）について哥薩克大尉と打合せをしたのち、馬首を轉じて引つ返した。

『さあ、君、もう歸つて服でも乾さうぢやないか。』と彼はペーチャに言つた。

林中の見張所に近づいた時、デューニソフは林の奥を見透しながら立ち止つた。森の樹立の間を縫つて、短い上衣を身に纏ひ、木の皮靴にカザン帽、銃を肩にかけ斧を腰に差した一人の男が、長い兩手をぶら／＼させながら、長い足で大股に軽々と歩いて來た。この男はデューニソフを見ると、急いで灌木の中に何やら抛り込んだ。そして鏢のだらりと垂れたぐし濡れの帽子をとつて、上官の方へ近づいて來た。これはチーホンであつた。痘痕と皺で一面に掘り穿たれた中に、小さな細い眼の明いてゐるその顔は、得意げな喜びに笑み輝いてゐた。彼は高く頭を反らせながら、笑ひたいのを怵へてでもゐるやうに、びつたりデューニソフの顔を見詰めた。

『おい、どこへ失せてゐやがつたんだ？』とデューニソフは言つた。

『どこへ失せてたつて？ 佛蘭西兵を掴まへに行つてたんでがすよ。』しやゑれてはゐるが唱ふやうな低音で、チーホンは臆する色なく早口にかう答へた。

『なぜ貴様は晝日中のこゝ／＼出かけたんだ？ 畜生！ うん、どうしたんだ、掴まらなかつたのか？……』

『掴まへることあ掴まへやしたよ。』とチーホンは言った。

『それはどこにゐるんだ?』

『へえ、わしあ夜が明けるが早いか、まつ先に一人掴まへたんですが。』チーホンは木の皮靴を穿いた、平べつたい、外輪に曲つた足を、一層大きく踏み開きながら言葉を續けた。『そして林ん中へ引つ張り込んだけれど、どうも見ると餘り面白くなささうだもんだから、ひとつもう一番出掛けて行つて、もちつと氣の利いた奴を掴まへてやらうと思つてね。』

『え、この悪黨、やはりさうだつたんだ。』とヂェニーソフは哥薩克大尉に言った。『なぜ貴様はそいつをつれて來なかつた?』

『だつて、そんな奴をつれて來て何にしますだ。』チーホンは腹立たしげに急いで遮つた。『何の役にも立ちやしませんよ。わしだつてあなた、どんな奴がお入り用なか、それくらゐのこたあ分りませあね。』

『仕様のない奴だ、畜生……それから?……』

『別の奴を掴まへに行きましたよ。』とチーホンは續けた。『かう云ふ鹽梅に林ん中を這つて行つて、そして臥つたのでがす。』チーホンはどんな工合にしたか仕方で見せるために、突然しなやかな體つきで腹這ひになつた。『そこへ一人ぶつ突かつたもんだから、』と彼は語り續けた。『わ

しあそいつをかう云ふ鹽梅にひつ掴んで(チーホンは身輕にひらりと起き上つた)、聯隊長のどこへ來いと言つてやりました。すると奴め、どえらい聲で喚き立てましたよ。ところが奴等は四人組だつたので、みんな刀を抜いて切つてかゝるぢやありませんか。そこでわしあ斧をかう云ふ風に振りまはして、何だこの野郎、覺悟しろつて言つてやりました。』チーホンは兩手を振りたてて物凄く顔を擧め、胸を突き出しながらかう叫んだ。

『道理で、俺たちは丘の上から、お前が溝川の中へさぶんとやるのを見た譯だな。』哥薩克大尉はその輝かしい眼を細くしながら言つた。

ペーチャは笑ひたくて堪らなかつたが、皆が笑ひを押しこらへてゐるのを見ると、チーホンの顔から哥薩克大尉とヂェニーソフの方へ、素早く視線を移すのであつた。彼はこの場面の意味が呑み込めなかつたのである。

『とぼけるんぢやない、』腹立たしさうに咳拂ひしながら、ヂェニーソフはかう言つた。『なぜ初めのをつれて來なかつたんだ?』

チーホンは片手で背中、片手で頭を掻き始めた。と、不意にその顔全體が晴れぐしした愚かしい微笑に擴がつて、一本ぬけた齒をあらはに見せた(そのためにシチェルバートフと呼ばれてゐたのである)。ヂェニーソフはにやりとした。ペーチャも愉快さうにからりと笑ひ出した。で、

當のチーホンもそれに聲を合はすのであつた。

『でもね、まるつきり役に立たない奴だつたんですがすよ。』とチーホンは言つた。『それにひどい服を着てるんですからね、何處へつれて行けるもんですかね。それに仕様の無い無作法もんでね、隊長殿、「俺は大將の息子だぞ、なんで行くもんか」などと吐かすんですがすよ。』

『何といふ畜生だ！』とヂェニーツフは言つた。『俺は訊問しなきやならないんぢやないか……』

『なに、わしが訊問しましたよ。』とチーホンは言つた。『ところが、そいつめ「よく承諾しねえ」つて言ふんですがす。自分達の方は人数こそ多いが、みんな碌なやつはゐねえ、たゞ觸れ出しただけだから、一つ大きな聲で呶鳴り付けたら、みんな残らず掴まりますつて、かう言ふんですがすよ。』とチーホンは愉快さうな斷乎たる目付で、ヂェニーツフの眼をまともに見つめながら言葉を結んだ。

『こいつめ、小つびどい鞭を百ばかり食はしてくるぞ。それでもまだ貴様はそんなに圖々しく恍けてゐられるか。』ヂェニーツフは嚴めしい聲でかう言つた。

『何もさう腹を立てるこたありませんよ。』とチーホンは言つた。『一體わしが佛蘭西兵を見たことがねえとでも言ひなさるんかね？ なあに、今に暗くなりさへすりや、どんなのでもお望

み次第、三人でも掴めえて來ますよ。』

『まあ、いゝ、出掛けよう。』とヂェニーツフは言つた。そして見張所の傍へ着くまで、腹立たしさうに押し黙つたまゝ顔を擧めてゐた。

チーホンはその後からついて行つた。チーホンが藪の中へ投げ込んだとか云ふ長靴の事で、哥薩克たちが笑つたりからかつたりしてゐるのが、ペーチャの耳に入つた。

チーホンの言葉や微笑に誘はれて催した笑ひが収まつた時、ペーチャはこのチーホンが人殺しをしたのだと反射的に悟つた。彼は妙にばつが悪くなつて來た。彼は虜になつた鼓手を振り返つて見た。と、何かある物がちくり彼の心を刺した。しかし、このばつの悪さはほんの一瞬間しか續かなかつた。彼は今度はいつた仲間の一人として恥しくないやうに、一層高く頭を擡げて、一層勇氣を振り起しながら、鹿爪らしい様子で明日の計畫を哥薩克大尉に訊かなければならぬ、といふ必要を感じたのである。

派遣された將校は途中でヂェニーツフに出會つた。その報告によれば、ドーロホフは自分でずぐやつて來る、そして彼の方も萬事都合よく運んでゐるとの事であつた。

ヂェニーツフは急に活氣づいて、ペーチャを自分の傍へ呼び寄せた。

『さあ、君、ひとつ自分の話を聞かしてくれんか。』と彼は言つた。

ペーチャは莫斯科を出る時、家族と別れて聯隊に加はつたが、その後まもなく大きな支隊を指揮してゐる、一人の將軍の傳令に採用された。彼は任官以來——殊に實戰隊へ入つてギャージマの戰鬪に参加して以來、自分はもう大人になつたのだと云ふ、不斷の喜ばしい幸福な感激と、眞の勇氣を示す機會を逸しまいと云ふ、慌たゞしい興奮を絶えず感じてゐた。彼は軍隊内で見たり經驗したりする事で有頂天になつてゐたが、それと同時に、いま自分のゐない處では、それこそ正真正銘の、本當に勇しいことが行はれてゐるのだと、始終そんな氣がしてならなかつた。で、彼は今自分のゐない處へ遅れぬやうに駆け着かうと、頻りに焦つてゐるのであつた。

十月二十一日、將軍がヂェニソフの支隊へ誰かやりたいと云ふ希望を表明した時、ペーチャはぜひ自分をやつて貰ひたいと、さも憐れつばい調子で訴へたので、將軍も強ひて拒む事が出来なかつた。しかし將軍はペーチャを送り出す時、彼がギャージマの戦ひで氣ちがひじみた行動をしたことを想ひ出した。その時ペーチャは命令された方へ道路づたひに行かないで、戦線へ出て佛蘭西軍の砲火を浴びながら、そこで二度拳銃ピストルを發射したのである。で、將軍はペーチャを送り出すとき、どんな性質のものであらうとも、決してヂェニソフの行動に加はつてはならぬと嚴

禁した。残つても差支へないかとヂェニソフに訊かれた時、ペーチャが顔を赤くしてどきまぎしたのは、つまりこれがためなのであつた。林のふちへ出るまでは、ペーチャも自分の義務を嚴密に實行して、早々歸らなければならぬと思つてゐたが、佛蘭西兵やチーホンを見て、今夜かならず攻撃があると云ふことを知ると、若い人の常として忽ち考へがぐらりと變つた。そしてこれまで非常に尊敬してゐた將軍などは、やくざな獨逸人に過ぎないが、ヂェニソフは勇士である、哥薩克大尉も勇士である、チーホンも勇士である、そしてかう云ふ困難に際して彼等の許を去るのは、恥づべき事であると決めてしまつた。

ヂェニソフがペーチャと哥薩克大尉と一緒に見張所へ近づいた時には、もう黄昏れかゝつてゐた。薄暗の中に鞍を着けた馬や哥薩克が見えた。空地に小屋を建てたり、佛蘭西兵に煙を見られないやうに、林の窪地に赤々と火を焚いたりしてゐる、輕騎兵の姿が見えた。小さい百姓家の廊下では、一人の哥薩克が袖をたくし上げて羊肉を刻んでゐた。百姓家の中では、ヂェニソフの部下の將校が三人、戸板で食卓をしつらへてゐた。ペーチャは濡れた服を乾かすやうに兵卒に渡すと、早速食卓を用意してゐる將校達の手傳ひを始めた。

十分の後、ナプキンで蔽はれた食卓が出来上つた。食卓の上にはフォートカと、小饅に入つたらム酒と、それに白麵麩と、羊肉の鹽焼きが並べられた。

將校達と一緒に食卓に向つて、香ばしい匂のする脂つこい羊肉を、ぬる／＼する手で裂きながら、ペーチャはすべての人に對する優しい、子供らしい感激に充ちた愛を感じた。さうしてその結果、ほかの人も自分に對して、同じやうな愛を抱いてくれるものと信じきつてゐた。

『ところで、ワシーリイ・フョードロヰッチ、あなたはどうお考へですか、』と彼はヂェニーツフに話しかけた。『僕が一日くらゐあなたの所にゐたつて、別に構やしないでせう?』彼はかう言ひながら答も待たずに、自分で自分に答へるのであつた。『だつて僕は様子を見て来いと吩咐かつたのですから、つまり今見てる譯なんですよ……唯ね、どうか僕を一番……その、重要な處へやつて下さい……僕、行賞なんかほしかありません……たゞ僕は何となく……』

ペーチャは齒を喰ひしばつた。そして反らした頭をしやくり片手を振り廻しながら、邊りを見まはすのであつた。

『いちばん重要な處へ……』ヂェニーツフは微笑しながら繰り返した。

『たゞね、どうか僕に部下を任して下さい。僕に指揮が出来るやうにね。』とペーチャは語を續けた。『そんな事はあなたにとつて何でもないぢやありませんか? あゝ、小刀ナイフですか?』羊肉を切りたさうにしてゐる一人の將校に向つて、彼はかう言つた。

ペーチャは自分の衣囊ポツトナイフ小刀を渡した。將校はその小刀を賞めた。

『ぢや、それを差し上げませう。僕そんなのを澤山持つてゐますから……』とペーチャは顔を赤くして言つた。

『あゝ、さうだ! 僕すつかり忘れてゐた。』と彼は不意に叫んだ。『僕は乾葡萄を持つてゐるんです。そりや素晴らしいものでしてね、核がないんですよ。僕の方では酒保が新しいものですかね、いろんないゝものを持つてゐるんですよ。僕は十斤ポンド買ひました。何か甘い物を食べるのが癖になつて了ひましてね。如何です?……』ペーチャはかう言ひながら、廊下にある自分の哥薩克の方へ走つて行つて、五斤ばかり乾葡萄の入つてゐる袋を持つて來た。『つまんで下さい、皆さん、つまんで下さい。』

『ときに、珈琲沸しは要りませんか?』と彼は哥薩克大尉の方へ向いて言つた。『僕は隊の酒保で素的なのを買ひましたよ! 彼奴は中々いゝ物を持つてゐるんですからね。それに人間が正直ですよ。それが何より肝腎なことです。僕は屹度あなたに送つて上げます。ところで、燧石ひうちいしがなくなつてやしませんか、多分耗つて了つたでせう——だつてそれはよくある事ですからね。僕は持つて來ましたよ、そこにあります……(と彼は袋を指さした) 百ばかりあります。非常に安く買つたんですよ。どうか要るだけお取り下さい、なんなら皆でも……』

ペーチャは圖に乗つて馬鹿なことを言ひはしなかつたかと、俄かにはつとして言葉を切ると、

顔を眞赤にした。

彼はまだ他に、何か馬鹿な眞似をしなかつたかと考へ始めた。そしてこの日の記憶を巻き返してゐるうちに、佛蘭西人の鼓手のことを想ひ浮べた。「我々はこんなに愉快にしてゐるが、彼奴はまあどんな氣持だらう？ 一體どこへやられたんだらう？ 食べ物を買つたかしら？ 酷い目に會はされやしなかつたらうか？」と彼は考へた。けれど燈石なんか馬鹿なことを言つたのに氣が附いて、彼はもう臆ぢけ氣味であつた。

「訊いてもいゝかしらん？」と彼は考へた。「でも自分が子供だから、子供を可哀さうに思ふのだ、なんて言はれやしないかしらん。なあに、明日になればみんなのものに、僕が子供か子供でないか見せてやらう！ だけど、訊くのは恥しいことかしらん？」とペーチャは考へた。「なあに、どうだつて構ふもんか？」彼は顔を赤くして、將校達の顔に嘲笑の色が浮んではゐないかと、おづ／＼一同を見廻しながら言ひ出した。

『あの捕虜になつた子供を呼んでもいゝでせうか？ 何か食べさしてやりたいんですが……事によつたら……』

『さうだ、可哀さうな子供だ。』彼のことを口にすることを、別に恥しい事とも思はないやうな風で、デニースフはかう言つた。『あいつを此處へ呼べ。彼奴は Vincent Bosse と云ふんだ、

あれを呼んで来い。』

『僕が呼んで来ませう。』とペーチャは言つた。

『呼んで来い、呼んで来い、可哀さうな子供だ。』とデニースフは繰り返した。

デニースフがかう言つた時、ペーチャは戸口に立つてゐた。ペーチャは將校たちの間をおし分けて、デニースフの傍へ近々と寄つて來た。

『お願いだから、接吻させて下さいね。』と彼は言つた。『あゝ、いゝ氣持だ！ 本當にいゝ氣持だ！』

デニースフに接吻すると、ペーチャは外へ駆け出した。

『ボッセ！ Vincent！』ペーチャは戸口に立ち止つてかう叫んだ。

『あなた、誰をお呼びですか？』と暗闇の中から誰かの聲がした。

ペーチャは、今日捕虜にした佛蘭西の少年だと答へた。

『あゝ！ エセンニイですか？』と哥薩克が言つた。

Vincent と云ふ彼の名を、哥薩克はもうエセンニイ、百姓や兵卒はギセーニヤと作り變へてゐた。この作り變へは兩方とも春を意味するもので、うら若い少年に對する觀念とびつたり合つてゐた。

『彼奴はあちらの焚火の傍で暖まつてをりました。おい、ギセーニャ！ ギセーニャ！ ギセーニャ！』と云ふ叫び聲と笑ひが、暗の中で次ぎ／＼に傳はつて行つた。『いや、中々すばしつこい餓鬼ですよ。』ペーチャの傍に立つてゐた一人の輕騎兵がかう言つた。『さつきわたし共が少し食べさせてやりましたが、どうも恐しく腹をへらしてをりましたよ！』暗闇の中に足音が聞えた。そして跣足でぬかるみをびちや／＼歩きながら、鼓手は戸口の方へ近づいた。

『Ah, c'est vous (あ、君)』とペーチャは言つた。『Voulez-vous manger ? N'ayez pas peur, on ne vous fera pas de mal (食べたかな？心配しなくてよろよ)』おづ／＼と愛想よく鼓手の手に觸りながら、彼はかう附け足した。『Entrez, entrez (入り給へ。)』

『Merci, monsieur (有り難うござます。)』まだ殆ど子供のやうな慄へ聲でかう答へると、鼓手は泥足を闕で拭き始めた。

ペーチャはこの鼓手に向いて、いろ／＼言ひたい事が澤山あつたが、思ひきつて言ひ出すことも出来なかつた。彼は廊下で足をもぞ／＼させながら、鼓手の傍に立つてゐたが、やがて暗闇の中でその手を取つて、ぎゆつと握りしめた。

『Entrez, entrez (入り給へ。)』彼はたゞ優しい囁くやうな聲で、かう繰り返すばかりであつた。

「あゝ、この人に何かしてやることはないかなあ！」と彼は獨ごちた。そして戸を開けると、自分より先に少年を部屋の中へ通した。鼓手が部屋へ入ると、ペーチャは少し離れて腰を掛けた。鼓手などに氣を留めるのが、自分の威嚴を傷つけるやうに思はれたからである。彼はたゞ衣囊の中で金をいぢりながら、これを鼓手にやるのは恥しい事ではないか知らんと、決し兼ねてゐるのであつた。

八

デュニソフの命令で、鼓手に火酒や羊肉が與へられた。またデュニソフは彼に露西亞風の長衣を着せて、他の捕虜と一緒に後方へ送らないで、隊の中に留めて置けと命じた。ペーチャの鼓手に對する注意は、ドーロホフの到着によつてはぐらされて了つた。ペーチャは隊にゐる時、ドーロホフのなみ／＼ならぬ勇氣や、佛蘭西人に對する殘虐な行爲について、いろ／＼澤山話を聞いてゐた。で、ドーロホフが部屋へ入つて來た時から、ペーチャは片時も眼を離さずに見守りながら、ぐつと反らした頭をしやくつて、ドーロホフのやうな人と一座しても恥しくないやうにと、ます／＼力み返るのであつた。

ペーチャはドーロホフの外貌の單純なのに異様な驚きを感じた。

デニーツフは哥薩克風の上衣を着け、顎鬚を生やし、胸には靈驗あらたかなニコライの聖像をかけて、話振りにもすべての態度にも、自分の特別な位置を現してゐた。ところが、ドーロホフはそれと反対に、以前莫斯科では波斯風の衣裳を着けてゐたのに、今は思ひ切つて氣障な近衛將校らしい風采をしてゐた。顔は綺麗に剃り上げてあつた。着てゐるものも綿を入れた近衛の制服で、釦穴にはゲオルギイ勳章をかけ、頭には平凡な軍帽を眞直に被つてゐた。彼は片隅に濡れたフェルトの外套を脱ぎ捨てると、デニーツフの傍に近づき、誰にも挨拶をしないで、いきなり状況を訊きだした。デニーツフは、かの輸送隊に對して大部隊が抱いてゐる計畫や、ペーチャの派遣や、兩將軍に對する自分の答へなどを、ドーロホフに物語つた。次にデニーツフは佛蘭西部隊の状態について、知つてゐるだけのことを残らず話した。

『それはさうだらうが、併し一體どう云ふ種類の軍隊で、どのくらゐ兵數があるか、それを知る必要がある。』とドーロホフは言つた。『一つ出かけなけりやなるまい。兵數も正確に分らないのに、實行に取りかゝる譯にゆかない。俺は物事をきちんとするのが好きなんだよ。どうだ、君らの中で誰か僕と一緒に、敵陣へ行きたい者はないかね？ 軍服も一着持つてゐるんだが。』

『僕が、僕が……僕と一緒にいきます！』とペーチャは叫んだ。

『行つて見る必要なんか少しもないよ。』デニーツフはドーロホフに向いてかう言つた。

『それにあれは決してやりやしない。』

『何といふ面白いことでせう！』とペーチャは叫んだ。『どうして僕が行つちやいけないんです？……』

『わけがないからさ。』

『いゝえ、失禮ですがそれは不承知です、なぜつて……なぜつて……僕行きます、それつきりです。あなた僕をつれてつて下さるでせう？』とペーチャはドーロホフの方へむいた。

『そりや別に……』とドーロホフは佛蘭西の鼓手の顔に見入りながら、氣のない聲で返事をした。『この子供は前から君の所にゐるのかね？』と彼はデニーツフに訊いた。

『今日つかまへて來たが、なんにも知らないんだ。おれは自分の傍へ置くことにしたよ。』

『ふん、ところで、君ほかのやつはどこへやるんだね？』とドーロホフは言つた。

『どこへもやるもんか、受取證と引換へに送りつけて了ふさ！』デニーツフは突然顔を眞赤にしてかう叫んだ。『おれは敢て斷言するが、たゞの一人だつて、良心の咎めるやうな扱ひをしたことはない。おれは率直に言ふがね、軍人としての名譽を穢すよりか、三十人だらうと三百人だらうと、護衛をつけて町へ送つた方が、樂だらうぢやないか。』

『まあ、こゝにゐられる十六やそこいらの小さい伯爵なら、そんなお優しい事を言ふのも似つ

かほしいが、』ドーロホフは冷やかな嘲りを浮べながらかう言つた。『君などはもうそんな事をよしてもいゝ時分だよ。』

『なに、僕は別に何も言やしません。僕はたゞ是非あなたと一緒にいくと言つただけです。』

ペーチャはおづ／＼とかう言つた。

『え、君、我々などはお互ひに、そんな生優しい見を棄てるべき時分だよ。』ヂェニソフを苛々させるこの問題を語るのが、格別愉快でもあるやうに、ドーロホフは言葉を續けるのであつた。『おい、君はどうしてこの子供を自分の傍に置くんだ？』彼は頭を振りながら言つた。『つまり可哀さうなからだらう？ 君の云ふ受領證なんか分り切つてゐるぢやないか。君が百人送れば、三十人しか着きやしない。かつゑ死にするか殺されるかだ。そんな事なら始めから捕まへない方がましだよ。』

哥薩克大尉は薄色の眼を細めながら、賛成するやうに點頭いた。

『そんな事はどうでもいい。何も議論なんかすることはありやしない。おれは良心の咎めるやうな事をしたくないんだ。君はどうせみんな死んでしまふと云ふが、それでもいゝさ。たゞ自分で手を下しさへしなけりやいゝんだ。』

ドーロホフは笑ひ出した。

『しかし奴等だつて、おれ達を二十遍でも三十遍でも、つかまへるやうに命令されてるんだぜ。一旦つかまへたら、おれだらうと武士道主義の君だらうと變りはありやしない、同じやうに白楊の樹に吊り下げられるんだ（彼はしばらく黙つてゐた）。だが、仕事にかゝらなけりやならん。おれの哥薩克に荷物を持つて來さしてくれ給へ。おれは佛蘭西の軍服を二着もつて來てるんだ。どうだ、一緒に行くかね？』と彼はペーチャに訊いた。

『僕ですか？ えゝ、えゝ、是非ゆきます。』ペーチャは涙が出るほど顔を赤くして、ヂェニソフを眺めながらかう叫んだ。

ドーロホフとヂェニソフが、捕虜の處分について議論してゐる間、ペーチャは又もやばつ、悪い、せか／＼した氣持を感じたが、同時にまた彼等の話してゐる事を、はつきり合點する餘裕がなかつた。「大人で名の聞えた人がさう考へてゐる以上、さうしなければならぬのだ、つまりさうした方がいゝのだ。」と彼は考へた。「しかし何よりも一番肝腎なのは、僕がヂェニソフに服従するなんて、そんな事をあの人に考へさせないやうにすることだ。ヂェニソフは僕を指揮する權利なんかありやしない。僕は是非ドーロホフと一緒に佛蘭西の陣地へ行くのだ。あの人に出來るくらゐなら僕にだつて出來るさ！」

どんなにヂェニソフが行くなと言つて聞かせても、ペーチャはそれに對して、自分も矢張り

物事をきちんとする習慣がついてゐるから、出鱈目のことをしたくない、それに自分の危険などと云ふことは決して考へないと答へた。

『なぜつて——考へてもごらんさい——敵方に何人ゐるか、それを正確に知らなければ……それがために何百と云ふ人命を失ふかも知れません。ところが、今なら僕達二人だけのことですからねえ。それに僕は非常に行きたいのです。僕は是非々々行きます。もうどうか止めないで下さい。』と彼は言つた。『却つていけなくするばかりですよ……』

九

ペーチャとドーロホフは佛蘭西の外套を纏ひ、尖帽シャポを被つて、夕方ヂニソフが立つて敵の陣地を見下した、林の中の空地をさして出かけた。二人は眞暗闇の中を林から窪地へ下りた。下まで降り切ると、ドーロホフは伴の哥薩克に待つてゐると吩咐けて、大股の早足で道路づたひに橋の方へ向つた。ペーチャも興奮のためにわく／＼し乍ら、ドーロホフと並んで馬を進めた。『もし捕まつたら、僕は生きちやゐません——僕は拳銃をもつてゐますから。』とペーチャは囁いた。

『露西亞語を使つちやいけない。』とドーロホフも早口に囁いたが、その瞬間、闇の中で『qui

vive (そこへ行くのは誰だ?)』と云ふ叫び聲と、銃をがちやりと云はす音が聞えた。

ペーチャの顔にはさつと血が上つた。彼は拳銃に手をかけた。

『Lanciers du 6-me (第六聯隊の槍騎兵だ)』馬の歩度を緩めも速めもせずに、ドーロホフはかう言つた。歩哨の黒い姿が橋の上に立つてゐた。

『Mot d'ordre (暗號)』

ドーロホフは馬の手綱を引き締めて、並足で歩き出した。

『Ditez donc, le colonel Gérard est ici (ゼラール大佐はここにゐられるかね?)』と彼は言つた。

『Mot d'ordre (暗號)』哨兵は返事もせずに、路を遮りながらかう言つた。

『Quand un officier fait sa ronde, les sentinelles ne demandent pas le mot d'ordre (將校が巡視してゐるのに哨兵が暗號を訊くといふ法はなご)』ドーロホフは突然かつとなつて、哨兵に馬をのしかけながらかう叫んだ。

『Je vous demande, si le colonel est ici (大佐はここにゐられるかと訊きてゐるんだ!)』

かう言つてドーロホフは、脇へよける哨兵の答を待たずに、悠々と並足で丘へ上り始めた。路を横切る黒い人影を見附けると、ドーロホフはその男を呼びとめて、聯隊長や將校達はどこにゐるかと訊ねた。肩に袋を載せたこの男——兵卒は、立ち止つてドーロホフの馬へ近寄り、片手で馬に觸りながら、率直な親しげな調子で、聯隊長と將校達は丘を少し上つた右側の農舎(フェタ)(彼

は地主邸をかう呼んだ)の庭にゐると言つた。

兩側の焚火の傍から起る佛蘭西語の話し聲を聞きながら、ドーロホフは道路傳ひに暫く進んだ後、やがて地主邸の方へ馬首を轉じた。門を入ると彼は馬から下りて、どんど燃えてゐる焚火の傍へ近づいた。その周りには幾たりかの人が、大きな聲で話をしながら坐つてゐた。端の方にかけた鍋の中では、何やらぐつぐつ煮えてゐた。布の帽子を被つて青い外套を着た一人の兵卒は、兩膝ついた姿をあか／＼と焚火に照されながら、鍋の中を柵杖で掻き廻してゐた。

『Oh, c'est un der à cuir (こいつは固いぞ、と)』焚火の向う側の物蔭に坐つてゐる、將校の一人がかう言つた。

『Il les fera marcher les lapins (あいつは兎を動かす)』と一人が笑ひながら言つた。

馬を曳いて焚火に近づくドーロホフと、ペーチャの足音を聞きつけると、二人とも闇の中を見透かしながら口を噤んだ。

『Bonjour, messieurs (諸君、今)』とドーロホフは大きな聲ではつきりと言つた。

將校達は焚火の蔭でもぞ／＼動き出した。背が高く、頸の長い一人の將校は、焚火を廻つてドーロホフの傍へ寄つた。

『C'est vous, Clément (君、クラン、)』と彼は言つた。『D'où, diable…… (どこから来たんだ、この野郎……)』けれども

彼はしまひまで言ひ終らないうちに、人違ひと氣が附いて軽く顔を擧め、未知の人としてドーロホフに挨拶すると、何の用かと訊ねた。

ドーロホフは同僚と二人で、自分の聯隊の後を追つてゐるのだと語つた後、一同に向つて、全體に第六聯隊のことを何か知つてゐるものはないかと訊いた。誰一人として何も知つてゐるものはなかつた。ペーチャは將校達が敵意をもつて、迂散くささうに自分とドーロホフを眺め出したやうな氣がした。幾秒かの間みんな押し黙つてゐた。

『Si vous comptez sur la soupe du soir, vous venez trop tard (晩飯をあてにして来たのなら)』焚火の蔭から誰かの聲が、笑ひを抑へたやうにかう言つた。

ドーロホフはそれに對して、自分達は腹一杯だし、それに夜道をして先へ行かなければならぬいからと答へた。

彼は鍋の中を掻き廻してゐる兵卒に馬を渡して、頸の長い將校と並んで焚火のそばにしやがんだ。その將校は、じつと眼を放さずにドーロホフを見詰めながら、何聯隊づきかともう一度き直した。ドーロホフはその問が聞えなかつたかのやうに、何とも返事をしなかつた。そして短い佛蘭西風のパイプを衣囊から取り出してくゆらしながら、この先の道はどのくらゐの程度まで、哥薩克襲撃の危険があるだらうか、と將校達に訊いた。

『Les brigands sont partout (あの強盗共はどこにでもおますよ。)』と焚火の蔭から一人の將校が答へた。

ドーロホフは、哥薩克が恐ろしいのは、自分達二人のやうな落伍者だけの話で、大きな部隊に向つては、彼等も恐らく襲撃は出来まいと、問ひ掛けるやうな調子で附け足した。誰も何とも答へなかつた。

「さあ、もう今度はあの人も出かけるだらう。」ペーチャは焚火の前に立つて、ドーロホフの話を聞きながら、一分毎にかう考へてゐた。

しかしドーロホフは一旦とぎれた話をまた始めた。そしてこの大隊には幾人ゐるかだの、みなで何箇大隊あるかだの、捕虜はどのくらゐあるかなどと、むきつけに訊き始めた。この部隊にゐる露西亞捕虜のことを訊きながら、ドーロホフはかう言つた。

『La vilaine affaire de trainer ces cadavres après soi. Vaudrait mieux fusiller cette canaille (あんな死骸を引き摺つて歩くのは實にいやな事です。)』と言つて、彼は如何にも異様な甲高い聲でわらひ出した。ペーチャは今にもすぐ佛蘭西人が、自分達の偽りを見破りさうな氣がして、思はず焚火から一步あとずさりした。

ドーロホフの笑ひに對して誰も一ことも答へなかつた。と、今まで見えなかつた(外套を被つて横になつてゐたのである)一人の佛蘭西將校は半ば身を起して、何やら同僚に囁いた。ドーロ

ホフは立ち上つて、馬を預けておいた兵卒を呼んだ。

「馬をよこすか、どうだらう？」思はずドーロホフに寄り添ひ乍ら、ペーチャはかう考へた。馬は曳かれて來た。

『Bonjour, messieurs (諸君、左様な。)』とドーロホフは言つた。

ペーチャも Bonsoir と言はうとしたが、この一ことが言ひ切れなかつた。將校達は互に何やら囁き合つてゐた。馬がじつとしてゐないので、ドーロホフは暫く乗るのに手間が取れた。やがて悠々と門の外へ乗り出した。ペーチャはドーロホフと並んで馬を進めた。彼は後から佛蘭西人が追つかけて來るかどうか、振り返つて見ようとしたが、思ひ切つてさうする勇氣がなかつた。道路へ出ると、ドーロホフは元の原の方へ歸らずに、村の往來に沿うて進んで行つた。或る所では、わざ／＼馬を止めて聞き耳を立てた。『聞えるかね?』と彼は言つた。ペーチャは露西亞人の聲を聞き分け、焚火の傍にゐる露西亞捕虜の黒い姿を認めた。橋のところまで下ると、ペーチャとドーロホフは、一言も口を利かないで、陰氣さうに橋の上をあちこちしてゐる歩哨の傍を通り過ぎて、哥薩克達の待つてゐる窪地へ出た。

『ぢや、左様なら、ヂェニーツフにさう云つてくれ、夜明に一發の銃聲が合圖だつてね。』かういつてドーロホフは行かうとしたが、ペーチャは手を伸して引き止めた。

『もう我慢できない！』と彼は叫んだ。『あなたはほんとに英雄ですねえ。あゝ、何ていゝ氣持でせう！ 何て痛快なこととせう！ 僕あなたが好きで堪らないんです！』

『あゝ、よしよし。』とドーロホフは言った。

けれどペーチャは放さなかつた。ドーロホフは闇をすかして、ペーチャが自分の方へ體を曲げるのを見た。ペーチャは接吻したかつたのである。ドーロホフは彼に接吻すると、笑ひながら馬首を轉じて、闇の中に姿を消した。

10

ペーチャが見張所へ歸ると、ヂェニーソフは廊下に出てゐた。彼はペーチャを手放した後悔に責められながら、興奮と不安の中に待ち侘びてゐるのであつた。

『いゝ鹽梅だつた！』と彼は叫んだ。『まあ、いゝ鹽梅だつた！』ペーチャの感激に満ちた話を聞きながら、彼はかう繰り返した。『いま／＼しい、君のお蔭で寝なかつたぜ！』とヂェニーソフは言った。『だが、いゝ鹽梅だつた。さあ、寝たまへ。朝までにはまだ一寝入りする間があるよ。』

『でも……よしませう。』とペーチャは言った。『僕まだ眠くないんです。それに僕自分でよく

知つてゐますが、一たん眠つたら、それこそもう駄目です。それに僕は戦闘の前は眠らない習慣なんですから。』

ペーチャは今夜の偵察を心嬉しく細かい所まで想ひ出したり、明日の光景をまざ／＼と想像して見たりしながら、暫く家の中にじつとしてゐたが、やがてヂェニーソフが寐入つたのを見ると、立ち上つて外へ出た。

外はまだ眞暗であつた。雨は止んだが、点滴はまだ樹から落ちてゐた。見張所の近くには、哥薩克のバラツクや、一緒に繋ぎ合せた馬の姿が黒く見えた。百姓家の向うには二臺の荷車が黒ずんで、その傍には幾頭かの馬が立つてゐた。窪地には消えるになん／＼とした火が赤く見えた。哥薩克や輕騎兵も皆が皆睡つてゐる譯ではなかつた。雨だれの落ちる音や、近くで馬の草を噛む音などと一緒に、囁くやうな低い聲がそこ／＼に聞えた。

ペーチャは廊下を出ると、闇の中を見廻して荷車の方へ近づいた。車の下では誰か薪をかいてゐて、その周りには鞍を着けた馬が、燕麥を噛みながら立つてゐた。ペーチャは暗闇の中で自分の馬を見分けると、その傍へ寄つて行つた。小露西亞の馬であつたが、彼はカラバーフ(カフカズ産の馬を云ふ)と呼んでゐた。

『おい、カラバーフ、あすは一働きしようぜ。』馬の鼻の孔を嗅いだり、接吻したりしながら

ペーチャはかう言つた。

『どうなさいました、旦那、まだお眠みにならないんですかね?』車の下に坐つてゐた哥薩克がかう言つた。

『寝ない。ところで……リハチョーフ（お前はたしかさう云ふんだつたね?）僕はたつた今歸つて来たばかりなんだ。僕は佛蘭西人の所へ行つて来たんだよ。』

ペーチャは哥薩克に向つて、自分の偵察して来た話ばかりでなく、何のために出掛けて行つたかといふことや、なぜ出鱈目な真似をするよりも、生命を賭して冒険を試みた方がましだと思ふか、などと云ふ譯を詳しく物語つた。

『どうです、一寸ひと寐入りなさつたら。』と哥薩克は言つた。

『構はない、慣れてるから。』とペーチャは答へた。『時にどうだね、お前ピストルの燧石は耗つてないかね? ぼく持つて来たんだ。要らないか? やるよ。』

哥薩克はもつとよくペーチャを見ようと思つて、荷車の下から頭を突き出した。

『僕は何でも几帳面にしつけてゐるもんだから。』とペーチャは言つた。『世間にはよく準備もしないで、いゝ加減なことをして、あとから後悔するやうな者がゐるが、僕はそんなことが嫌ひなんだ。』

『そりやあさうですとも。』と哥薩克は言つた。

『あゝ、それからねえ、お前、一つ僕の劍を研いでくれないか。刃がにぶ……（けれどペーチャは嘘をつくのを恐れた。彼の劍は一度も研いだことがないのである。）やつて貰へるかね?』

『そりやなに、やりますとも。』

リハチョーフは立ち上つて、袋の中を掻き廻し始めた。ペーチャは間もなく、鋼と砥石の摺れ合ふ勇ましい音を聞いた。彼は車の上に這ひ上つて、その端に腰をかけた。哥薩克は荷車の下で劍を研いでゐた。

『どうだい、みんな寝てるかね?』とペーチャは訊いた。

『寝てる者もあれば、こんな風にしてる者もありますよ。』

『ぢや、あの子供はどうしてるい?』

『エセンニイですかね? あいつは廊下で寝てをりますよ。恐しい目をした後は却つて寝られるもんですよ。そりや喜んでゐましたつけ。』

それからペーチャは砥石の音に耳をすましながら、長い間じつと黙つてゐた。闇の中に足音が聞えて、黒い姿が現れた。

『何を研いでるんだ?』男は車に近づきながらかう訊いた。

『この旦那に劍を研いで上げてるんだよ。』
『そりや結構なことだ。』と男は言つた。ペーチャにはその男が輕騎兵のやうに思はれた。『お前んとこに茶碗が残つてなかつたらうか？』

『あすこの車輪の傍にあるよ。』

輕騎兵は茶碗を取つた。

『もうやがて夜が明けるだらうよ。』彼は欠伸をしながらかう言つて、何處かへ行つてしまつた。

ペーチャは自分が道路から一露里離れた林の中で、チェニースフの隊にゐることも、佛蘭西軍から奪つた荷車の上に坐つてゐることも、その傍には馬が縛りつけられてゐることも、下では哥薩クのリハチョーフが坐つて、自分の劍を研いでゐることも、右の方に見える大きな黒い點は見張所で、左の低地に見える鮮かな赤い點は、消えるになん／＼としてゐる焚火だと云ふことも、茶碗を取りに来た男は、水が飲みたくなつた輕騎兵だといふ事も、すべて知つてゐなければならぬ筈であつたが、彼はそんな事などなんにも知らなかつたし、また知らうともしなかつた。彼は現實に似通つたものの少しもない、魔法の國に住んでゐたのである。大きな黒い點は、確かに見張所かも知れないが、或ひは地のどん底に通じる洞穴かも知れない。赤い點は火かも知れない

が、或ひは大きな怪物の眼かも知れない。彼はいま確かに荷車の上に坐つてゐるのかも知れないが、あるひは荷車の上ではなくて、高い恐しい塔の上にあるのかも知れない。この塔の上から落ちたら、まる一日——ことによつたら、まる一月飛び續けても、何時まで経つても地面につかないかも知れなかつた。荷車の下に坐つてゐるのは、たゞの哥薩クリハチョーフかも知れないが、或ひは誰も知る人こそないけれど、この上もなく善良で勇敢な、世界中で一番立派な一番偉い人間かも知れない。あの輕騎兵は確かに水を飲むために、窪地へ行つたのかも知れないが、或ひはたつた今姿を消したまゝ、それ切り影を晦まして、まるでゐなくなつて了つたのかも知れない。ペーチャは今どんな物を見せられても、決して吃驚しなかつたに相違ない。彼は如何なることでも出来ないと思ふことのない、魔法の國に住んでゐたのである。

彼は空を眺めた。すると、空も矢張り地上と同じく魔法めいてゐた。穹窿は晴れかゝつて、樹の梢の上には、星を隠してゐた幕を開けるやうに、雲が非常な速力で走つてゐた。時には所々雲切れがして、黒く澄み渡つた空が現れるやうにも思はれたが、時にはこれらの黒い斑紋が、かへつて雲のやうにも思はれた。時には空が頭上高く昇つて行くやうにも思はれたが、時には空がすつと下つて来て、手でも届きさうに思はれた。

ペーチャは眼を閉ぢてふらり／＼し始めた。

雨だれがぼたり／＼落ちてゐた。静かな話し聲が続く。馬は嘶いてちよつと暴れた。誰か薪をかいてゐる。

『しゅつ、しゅつ、しゅつ……』と劍を研ぐ音がした。と、不意によく調和した樂音がペーチャの耳に入った。それは莊嚴なしかも心持のいい、かつて聞いたことのない頌歌を奏してゐるのであつた。ペーチャはナターシャと同じくらゐ、ニコライ以上に音樂的素質をもつてゐた。しかし彼は一度も音樂を習つたこともなければ、音樂のことを考へた例もなかつた。それ故、突然いま彼の頭に浮んだ諧調は、彼にとつて殊に珍しく、魅力に富んでゐた。音樂はだん／＼はつきりと聞えて來た。旋律はいよ／＼大きくなつて、一つの樂器からまた別の樂器へ移つて行つた。それは複音律と言はれてゐるものであつた。尤も、ペーチャは複音律が何やらまるで知らなかつたのである。ヴィオリンや喇叭に似てはゐるが、ヴィオリンや喇叭よりすつと美しい澄んだ樂器が、銘々それ／＼に自分勝手なことを演奏してゐた。そして一つの節奏が終らないうちに、殆ど同じやうな節奏を始めた他の樂器に溶け合つたかと思ふと、又それからそれへと他の樂器に交るのであつた。終ひにすべての樂器が一つに溶け合つたり、またばら／＼に別れたり、再び莊嚴な聖樂になつたり、明るく華やかな凱歌になつたりするのであつた。

「あゝ、これは夢なんだ。」ペーチャはがくりと前へのめつて、かう獨りごちた。「これは僕の

耳が鳴つてるんだ。だけど事によつたら、これが僕の音樂かも知れない。さあ、またやれ。始めろ、おれの音樂！ さあ……」

彼は眼を閉ぢた。すると、まるで遠くの方から來るやうに、四方八方からさまざまの音が慄へながら起つた。そして調子を合したり、ばら／＼になつたり、溶け合つたりするかと思ふと、またもや一つのこゝろよい、莊嚴な頌歌に統一された。「あゝ、本當に何てい／＼んだらう！ 幾らでも、どんなにでも、お望み次第だ。」とペーチャは獨りごちた。彼はこの一大管絃樂を指揮して見ようと試みた。

「さあ、靜かに、靜かに、だん／＼音を消して、」樂音は彼の命令に従つた。「さあ、今度はもつと張つて、もつと愉快に。もつと、もつと、面白く。」どこか底知れぬ深みから莊嚴な樂の音が起つて、だん／＼強くなつて來た。「さあ、今度は聲もはいるんだ！」とペーチャは號令した。すると遠くから先づ男の聲、つゞいて女の聲が聞えた。聲は規則正しく莊嚴に力をまして行つた。ペーチャはその並々ならぬ美しさに注意を拂ふのが、恐しくもあれば嬉しくもあつた。

莊嚴な凱旋進行曲に歌聲が溶け合つた。雨だれは絶えず滴り、劍を研ぐ音は『しゅつ、しゅつ、しゅつ……』と鳴つた。と、また馬がいがみ合つたり嘶いたりしたが、それらは合唱の妨げをしないばかりか、却つてその中へ溶け込むのであつた。

これがどのくらゐ續いたか、ペーチャはよく知らなかつた。彼はじつと快感にひたつてゐた。そして絶えず自分の快感に驚きを感じながら、同時にそれを誰にも頷つことが出来ないのを悲しんだ。彼はリハチョーフの優しい聲に呼び起された。

『出来ましたよ、旦那。これなら佛蘭西人を眞二つにできますよ。』

ペーチャは眼を醒した。

『もう夜が明けて来た、ほんとに夜が明けて来た！』と彼は叫んだ。前には見えなかつた馬が、今では尻尾まで見分けられた。あらはな樹々の枝を通して水つぽい光がさして来た。ペーチャはぶるつと身慄ひをして飛び上り、衣囊かぶから一留とり出してリハチョーフに與へた。そして劍を一振りふつて見て鞘へ納めた。哥薩克達は馬を解いて、腹帯を締めてゐた。

『あゝ隊長もおいでになつた。』とリハチョーフは言つた。

見張所からヂェニーツフが出て来た。そしてペーチャを呼んで、支度するやうに吩咐けた。

一一

人々は薄暗がりの中で手早く馬を擇り分け、腹帯を締め、それ／＼自分の部署についた。ヂェ

ニーツフは最後の命令を發しながら、見張所の傍に立つてゐた。隊の歩兵は百に近い足を水溜りではちや／＼言はせながら、道路づたひに進んで行つて、忽ち夜明前の霧に包まれた木の間に隠れて了つた。哥薩克大尉は部下に何やら命令してゐた。ペーチャは馬の手綱を掴んで、乗馬の命令をじり／＼しながら待つてゐた。冷たい水で洗つた顔——殊に眼は火のやうに燃え、背筋には悪寒が流れ下つて、何だか體ぢうびり／＼と時どりして慄へるのであつた。

『さて、すつかり支度は出来たかい？』とヂェニーツフは言つた。『馬をもて来い。』

馬は曳かれた。ヂェニーツフは腹帯が緩いと言つて、酷く哥薩克を怒りつけた。さん／＼嘔鳴りつけて彼は馬に跨つた。ペーチャは鐙に手をかけた。馬はいつもの癖で足を嚙まうとしたが、ペーチャは自分の體の重みを感じないで、ひらりと鞍の上に飛び乗ると、後ろの暗闇の中で動き出した輕騎兵達を振り返りながら、ヂェニーツフの方へ馬を進めた。

『ワシーリイ・フォードロギッチ、なにか僕に吩咐けて下さい……どうか……後生ですから……』と彼は言つた。

ヂェニーツフはペーチャの存在を忘れてゐたらしかつた。彼は聲のする方へ振り返つた。

『たゞ一つ君に頼んで置くがね、』と彼は嚴つい調子で言つた。『必ず僕の言ふ事を聽いて、どこへも出しやばらないやうにしてくれ。』

行軍の間ぢう、ヂェニーソフはそれ以上ペーチャに一言も口を利かないで、無言のまま馬を進めた。林の端れまで出た時、野はもう目に見えて明るくなつてゐた。ヂェニーソフは何やら哥薩克大尉と囁き合つた。すると哥薩克たちは、ペーチャとヂェニーソフの傍を通り抜け始めた。哥薩克が残らず通り過ぎて了ふと、ヂェニーソフは馬を進めて、丘を下つて行つた。馬はみな尻を突つ張るやうにして、する／＼滑りながら、騎手を乗せて凹地へ下りて行つた。ペーチャはヂェニーソフと並んで行つた。彼の全身に傳はる身慄ひはますます／＼烈しくなつた。邊りは次第に明るくなつて、たゞ霧が遠くの方の物を隠してゐるだけであつた。下までおり切つた時、ヂェニーソフは後ろを振り返つて、傍に立つてゐる一人の哥薩克に頷をしやくつて見せた。

『信號！』と彼は言つた。

哥薩克は片手をあげた。と、一發の銃聲が鳴り響いた。その瞬間に前の方で駆け出した馬蹄の音と、四方から起る叫び聲と、なほ數發の銃聲が聞えた。

初めて馬の足音と叫び聲が響き渡つた瞬間に、ペーチャは自分の馬を一蹴りして手綱を緩め、ヂェニーソフの叫び聲には耳をも貸さず、一目散に前の方へ駆け出した。ペーチャはかの一發の銃聲が鳴り渡つた瞬間に、忽ち眞晝のやうに煌々と明るくなつたやうな氣がした。彼は橋を目ざして駆け出した。前の方では道路づたひに哥薩克の群が駛つてゐた。橋の上で彼は後れた哥薩

克にぶつ突かつたが、なほ先へ先へと走つて行つた。前方には誰やら一群の人——それは確かに佛蘭西兵らしい——道路の右側から左側へ駆け抜けてゐた。その中の一人はペーチャの馬の足もとで、ぬかるみの中へぶつ倒れた。

或る百姓家の傍で、一群の哥薩克が何やらしてゐた。群集の中からは恐しい叫び聲が聞えた。ペーチャはこの群集の傍へ駆け寄つた。彼が最初に見たものは、下顎をがた／＼慄はしてゐる、佛蘭西兵の蒼ざめた顔であつた。彼は自分に向けられた槍の柄を掴んでゐた。

『ウラー！……みんな來い……味方だ……』とペーチャは叫んで、はやり切つた馬の手綱を緩めると、街道づたひに先へ／＼と駆け出した。

前の方で銃聲が聞えた。哥薩克や、輕騎兵や、ぼろ／＼の服を着た露西亞の俘虜などが、道路の兩側から馳せ寄りながら、大聲で何やらつゞまりのない事を叫んでゐた。帽子なしに青い外套を着た、一人の元氣らしい佛蘭西兵が、赤い顔をしかめながら、銃劍で輕騎兵達を防いでゐたが、ペーチャが駆けつけた時には、もう倒れてしまつた。「また遅れた」と云ふ考へがペーチャの頭に閃いた。で、彼は銃聲の頻繁に聞える方へ駆け出した。銃聲の鳴り響いてゐるのは、彼が昨夜ドロホフと一緒に行つた地主邸の庭であつた。佛蘭西兵は灌木の生え繁つた庭の中で、編垣の蔭に隠れながら、門のあたりに群がつてゐる哥薩克を目がけて射撃してゐた。門の傍まで行

き着くと、ペーチャは硝煙の中にドーロホフを見付けた。彼は緑色が、つて見えるほど蒼い顔をして、何やら人々に叫んでゐた。『迂廻しろ！ 歩兵を待て！』ペーチャが近づいた時、彼はかう叫んでゐた。

『待てですつて？……ウラーアア……』とペーチャは叫んだ。そして一分の猶豫もなく、銃聲が聞え硝煙の濃く立ち罩めてゐる方へ駆け出した。

一齊射撃の音が聞えた。それ弾がひう／＼唸つて通つては、何かに當つてぐしやりと音を立てた。哥薩克とドーロホフとは、ペーチャにつゞいて門内へ駆け込んだ。佛蘭西兵は揺れ動く濃い煙の中で、武器を棄てて灌木の蔭から哥薩克の方へ駆け出す者もあれば、坂を下りて池の方へ逃げて行く者もあつた。ペーチャは馬に乗つて地主邸の庭を疾駆してゐた。そして手綱を押へてゐるべき両手を、奇妙に早く振り立てながら、次第に鞍の一方へ傾いて行つた。馬は朝の光の中に消えなんとしてゐる焚火に行き當つて、急に前足を突つ張つた。ペーチャは濕つた土の上へ重々しく落ちた。哥薩克たちは彼の頭が動かないのに、手や足がびく／＼慄へ出すのを見た。弾丸は頭を射ち抜いたのである。

刀に手巾をつけて家の蔭から現れて、投降を聲明した佛蘭西の故參將校と交渉を終つた後、ドーロホフは馬から下りた。そして両手を投げ出したまゝじつと横たはつてゐる、ペーチャの方に

近づいた。

『往つちやつた。』彼は顔を擧めながらかう言つて、向うからやつて来るヂェニソフを迎へに門の方へ行つた。

『やられたな？』まだ遠くから見覚えのある姿勢——疑ひもなく生の通つてゐないらしいペーチャの姿勢を見て、ヂェニソフはかう叫んだ。

『往つちやつた。』この言葉を發音するのか、さも愉快でもあるやうに繰り返しながら、ドーロホフは急ぎ足に俘虜の方へ行つた。彼等は馬を下りた哥薩克に取り巻かれてゐた。『收容するのは止さう！』と彼はヂェニソフに向つて叫んだ。

ヂェニソフは返事をしなかつた。彼はペーチャに近寄つて馬を下り、血と泥に汚れてもう眞蒼になつたペーチャの顔を、慄へる手で自分の方へ向けた。

「僕は何か甘い物を食べるのが癖になつてしまひましてね。素晴らしい乾葡萄ですよ。みんな食べて下さい。」と云ふ言葉がふと想ひ出された。と、哥薩克たちは犬の吠えるやうな聲が耳に入つたので、吃驚してヂェニソフの方を振り向いた。彼はその聲と共に急いでペーチャのそばを離れ、編垣に近づいて両手をかけた。

ヂェニソフとドーロホフが奪ひ返した露西亞俘虜の中には、ピエール・ベズーホフが交つて

ゐた。

一一

ピエールの入つてゐた俘虜隊は、莫斯科出發以來、一度も佛蘭西司令部から新しい命令を受けなかつた。この隊は十月二十二日には、莫斯科出發當時の軍隊や輜重などとは、もう一緒にゐなかつた。初め幾行程の間、乾麴を積んで後からついて來た輜重隊も、半分は哥薩克に鹵獲され、半分は前の方へ行つて了つた。先頭に立つてゐた徒歩の騎兵は、もう一人もゐなかつた。みんなどこかへ姿を消してしまつたのである。最初幾行程の間、先の方に見えてゐた砲兵は、今ではウエストフーリーヤ兵に護衛されてゐる、ジュノー元帥の大行李に變つた。俘虜の後からは騎兵隊の行李が進んでゐた。

最初三つの縦隊になつて進んでゐた佛蘭西軍も、ギャージマからはもう一塊りになつてしまつた。莫斯科出發後はじめての休息地で、ピエールの心づいた不規律の徴候が、今ではもう極度まで達した。

彼等の進んでゐた路の兩側には、斃馬が到る處に横たはつてゐた。ぼろ／＼の服を着た各部隊の落伍者は、絶えず入り代りながら、進んで行く縦隊に合したり、また離れたりした。

行軍中いく度となく空騒ぎがあつた。護送兵は銃を取つて射撃したり、押し合ひへし合ひしながら逃げ出したり、また一ところへ集まつて來て、詰らない事で脅かしたなどと、互ひに罵り合つたりした。

一緒に進んで行くこれら三つの集團——騎兵の行李と、俘虜隊と、ジュノーの輜重——は、いづれも見ると中に減つて行つたが、それでもなほ或る特別な一箇體を成してゐた。

初め百二十臺からあつた輜重も、今では六十臺以上は残つてゐなかつた。その他は鹵獲されたり抛棄されたりした。ジュノーの輜重も、矢張り幾臺か棄てられたり奪はれたりした。三臺はダヴー軍團の落伍兵に襲撃されて奪はれた。ピエールは獨逸人同志の話に依つて、俘虜隊よりもこの輜重の方へ、餘計に番兵が附けてある事や、彼等の仲間の獨逸兵が一人、元帥の所有に屬する銀の匙を持つてゐたため、元帥自身の命令で銃殺された事などを知つた。

これら三つの集團の中で、一番餘計に減つて行くのは、俘虜の組であつた。莫斯科を出る時は三百三十人ゐたものが、今では百人にも足りなかつた。俘虜の群は護送兵にとつて、騎兵の鞍やジュノーの輜重より、一層荷厄介なものであつた。鞍やジュノーの匙などは何かの役に立つ、それは彼等にも分つてゐたが、飢ゑて寒さに慄へてゐる兵士らが、同じやうに饑ゑて寒さに慄へてゐる露西亞人を、張番したり守つたりするばかりか、途中凍えて落伍するときは命令によつて

銃殺しなければならぬ——さういふ事は單に不可解であるのみならず、實に厭はしいことであつた。それゆゑ護送兵は、自分が苦しい状態に置かれてゐるにも拘らず、俘虜に對して以前いだいてゐた同情の念に引きずられて、それがために自分の状態を一層悪くするのを恐れるかのやうに、殊さら陰鬱嚴酷に俘虜を扱ふのであつた。

ドロゴブージュでは、護送兵が俘虜を厩へ閉ぢ籠めて、友軍の酒保を掠奪に出かけた間に、幾人かの俘虜兵卒は壁の下を掘つて逃走したが、佛蘭西兵のために捕まつて射ち殺されて了つた。莫斯科出發の際に定められた、俘虜の將校と兵卒を別々に歩かせると云ふ以前の規則は、もう疾うの昔に消滅して了つた。歩ける者はみんな一緒に歩いた。で、ピエールは第三行程から、またカラターエフや、カラターエフを主人に選んだ、例の足の歪んだ瑠璃色の犬と一緒になつた。

莫斯科を出て三日目にカラターエフは、以前莫斯科の病院で治療した例の熱病に罹つた。カラターエフが衰弱するに従つて、ピエールは次第に彼から遠ざかつて行つた。どう云ふ譯か自分でも分らなかつたけれど、カラターエフが弱り始めてから、ピエールは彼の傍へよるのに、よほど努力しなければならなかつた。また彼の傍へ行きかけた時でも、カラターエフが休息地で横になつてゐる間、大抵いつも發してゐる低い唸り聲を聞き、カラターエフの體からいよ／＼激しく發散する臭氣を感じると、ピエールはなるべく彼の傍から遠く離れて、彼のことを考へないやうに

した。

ピエールは俘虜としてバラツクに暮してゐるうちに、人間は幸福のために創られたもので、幸福は彼自身の中、つまり人間自然の要求を満足させることに存する、そして一切の不幸の原因は不足でなくして、過剰から生ずるものである、と云ふ事を悟つた。それは理智でなしに、彼自身の全存在、即ち生命で悟つたのである。けれど今度の行軍中、最後の三週間に、彼はもう一つ新しい喜ばしい眞理を悟つた——それはほかでもない、この世に決して恐ろしいものはない、と云ふことであつた。この世には人間が絶対に幸福で自由になり得る状態もないが、またそれと同じく、不幸とか不自由とか云ふやうな状態もない、それを彼は悟つた。苦痛にも限界があり、自由にも限界があつて、この限界が非常に接近して居る、それを彼は悟つた。薔薇の寢床で花びらが一枚めくれたと言つて苦にしてゐる人も、今じめ／＼した地べたに寝て、一方の脇腹は温くいま一方は冷たいと云ふやうな、苦痛を味はつてゐるピエールも、苦しんでゐるといふ點に相違はない。彼が以前小さな舞踏靴を穿いてゐた時も、今かさぶたの一面に出來た素足で（靴は疾うにぼろぼろになつて了つたのである）歩いてゐる時も、その苦しさにさして違ひはない、それを彼は悟つた。彼が自分自身の意志によつて（その當時はさう思はれた）自分の妻と結婚した時も、よる馬小屋の中に閉ぢ籠められてゐる今も、自由の點において大差がない、それを彼は悟つた。後

に彼も苦痛と呼ぶやうになつたが、當時ほとんど感じられなかつた様々な事件のうちで、一番苦しいと思つたのは、腫物とすり剥けだらけの素足であつた。(馬肉はうまくもあり滋養にもなつたし、鹽の代りに使はれた火薬の硝石の匂ひさへ快かつた。酷い寒さはなかつた——晝間行軍中はいつも暑いくらゐだつたし、夜は焚火があつた。彼の血を吸ふ虱も體を温めてくれた)。たゞ一つ初めのあひだ苦しかつたのは——足であつた。

二日目の行軍の時、ビエールは焚火の傍で自分の痲かさを見て、これではとても歩けないと思つた。けれども一同が立ち上つたとき、彼は跛を引きながら歩き出した。その後暖まると、痛みを感じないで歩けたが、しかしその晩自分の足を見ると、一層恐ろしい有様になつてゐた。では、彼は足を見ないでほかのことを考へた。

ビエールは今度初めて人間の生活力と、人間に與へられた注意轉換の救済力を完全に悟つた。それは蒸氣の壓力が一定の状態を超えると、すぐに餘剰を放散する、かの蒸氣機關の安全瓣に似てゐた。

落伍した俘虜は百人以上も銃殺されたが、ビエールはさういふ事を見も聞きもしなかつた。日ましに衰弱して行つて、早晩おなじ運命に陥らねばならない、カラターエフのことも考へなかつた。自分自身のことなどはなほ更考へなかつた。彼の境遇が困難になればなるだけ、またその將

來が恐ろしくなればなるだけ、彼は現在の境遇に何の關係もない、喜ばしい、心を慰めるやうな想念や、追憶や、映像などを思ひ浮べるのであつた。

一三

二十二日の正午、ビエールは自分の足や道路の凸凹を見ながら、滑つこい泥路を辿つて坂を上つてゐた。時たま彼は自分を取り圍んでゐる見慣れた群集を眺めたり、また自分の足を見やつたりした。兩方とも同じやうに自分のものであり、同じやうに見慣れたものであつた。瑠璃色をした足曲りのセールイは、自分の身軽さと満足さを見せるために、時々後足を一本あげて三本足で跳ねたり、それからまた四本足になつたり、馬の死骸にとまつてゐる鴉に吠えかゝつたりしながら、道路の脇の方を樂しさうに走つてゐた。セールイは莫斯科にゐる時分より浮きくして、毛並も好くなつた。どちらを向いても様々な動物——人間を始めとして馬に到るまで——の肉が、様々な程度に腐敗してごろ／＼してゐた。狼は人間がゐるために寄りつけないので、セールイは食べたい放題に喰べた。

小雨が朝から降つてゐた。もう今にも止んで、空が晴れるだらうと思つてゐると、わづかばかりの間を措いて、また前より一層激しく降り出した。充分に雨を吸ひ込んだ道路は、もう水を受

け入れなかつたので、轍の跡には水が小川をなして流れてゐた。

ピエールは兩側を見廻したり、歩数を數へて三步毎に指を折りながら歩いてゐた。彼は心の中で雨に向つて、「さあ、さあ、もつと降れ、もつと。」と言つた。

彼はなんにも考へてゐないやうな氣がした。しかし彼の心はどこか奥の方で、何か重大な懐かしいあるものを考へ耽つてゐた。その或るものと云ふのは、昨日カラターエフと交へた會話から引き出した、きはめて微妙な精神的なものであつた。

昨夜營のとき、焚火が消えて寒くなつたので、ピエールは起き上つて、よく燃えてゐる最寄りの焚火へ近づいた。彼が近づいた焚火の傍では、プラトンが外套を袈裟のやうに頭からかぶつて、ときばきした氣持のいゝしかし弱々しい病的な聲で、かつてピエールが聞いたことのある話を、兵士らに話して聞かせてゐた。もう夜中すぎであつた。それはカラターエフが何時も熱病の發作で活き／＼して、殊に元氣づいて來る時刻であつた。ピエールは焚火に近づいて、プラトンの弱々しい病的な聲を聞き、あか／＼と焚火に照されてゐるみじめな顔を見ると、何か不快なものもが心臓を刺すやうに感じた。彼はこの男に對する憐愍の情に慄然として、そのまゝ行つてしまはうとしたが、ほかに焚火がなかつたので、なるべくプラトンを見ないやうにしながら、焚火の傍に腰を下した。

『どうだね、加減は？』と彼は訊いた。

『加減なんか何もいふがものはありやしない！ 病氣をくよく／＼してゐたら、神様が碌な死に様をさして下さらぬ——だよ。』とカラターエフは言つて、すぐ途中やめになつてゐた話に歸つた。

『それでな、兄弟、』蒼い瘡せた顔に微笑を浮べ、眼には特別嬉しさうな光を湛へながら、プラトンは言葉を續けた。『それでな、兄弟……』

ピエールはこの話をとうから知つてゐた。カラターエフはピエールだけにでも、もう六遍くらゐこの話をして聞かせた。そしてその都度、一種特別な喜びを示すのであつた。ピエールはこの話をよく知り抜いてゐたけれど、今もまるで何か新しい話でも聞くやうに、じつと耳を傾けるのであつた。すると、カラターエフが話しながら感じてゐたらしい、靜かな歡喜がピエールにも傳はつて來た。それは、家族と共に方正で敬虔な生活をしてゐた老商人が、或る時仲間の富裕な商人と一緒に、マカリエへ出かけたと云ふ話であつた。

二人の商人は一軒の宿に泊つて、寝に就いた。翌日起きて見ると、仲間の商人が斬り殺されて所持品を盗まれてゐた。血に染つた刀が老商人の枕の下から出て來た。彼は裁判の上答刑を受けなほ鼻の孔まで裂かれて——カラターエフは『おきて通りに』と言つた——懲役に送られた。

『それでな、兄弟（ピエールはこゝからカラターエフの物語を聞き始めたのである）、それから

十年もそれ以上もたつた。老人は懲役で暮しながら、規則を守つて悪いことなど少しもせず、ただ神様に極樂往生ばかり祈つてゐた。よいかな……ところが、丁度今おれ達がかうしてゐるやうに、ある晩のこと囚人達が一緒に集つたと思ひなさい。その中に老人も交つてゐた。すると、誰はどう云ふ譯で苦勞してゐるか、誰は神様に對してどんな罪を犯したか、と云ふやうな話が始つた。そこでみんな話し出した。或る者は人を一人殺したと言ふし、或る者は二人殺したと言ふ、或る者はつけ火をしたと言ふし、或る者はたゞ脱走しただけで、別になんの譯もないと言ふ、まあこんな風だ。ところが老人は、「爺さん、お前は何のために苦勞してゐるんだね？」と訊かれたとき、「わしはな、皆の衆、自分の罪や人の罪の爲に苦勞してゐるんだよ。わしは人を殺したこともないし、人のものを取つたこともない。たゞ貧乏な兄弟に物を分けてやつたくらゐなものだ。わしはな、皆の衆、商人なのだ、そして莫大な財産も持つてゐたよ。」老人は一部始終の話をした。つまり何もかもそつくり順を追うて、みんなに話して聞かせたんだ。「わしは自分の事をくよくよ思はない。わしはつまり神様のお見出しにあづかつたのだ。たゞ婆さんと子供達が可哀さうでな。」と言つて老人は泣き出した。ところが丁度その仲間に、本當の下手人がゐたと思ひなさい。その男が「お爺さん、それはどこであつた事だね？　いつ、何月だね？」と根掘り葉掘り訊くんだ。聞いて見ると、男は心苦しうつて堪らなくなつた。で、かう云ふ風に老人の傍へ行つて――

いきなり足許にとつと身を投げた。「お爺さん、お前は俺のために一生を棒にふつたんだ。まつたく本當の事だ、皆も聞いてくれ、この人は無實の罪で苦しんでゐるんだ。あれは俺の仕業だ。刀もお前が寝てる間に、枕の下へ入れて置いたんだ。堪忍してくれ、お爺さん、後生だ。」と言ふぢやないか。」

カラターエフは嬉しさうにこゝして、焚火を眺めながら口を嚙んだ。そして燃えてゐる薪を直した。

『ところが老人は「神様がお前さんを赦して下さるだらう。わしらはみんな神様の前へ出ると罪びとだからな。わしは自分の罪のために苦しんでゐるのだ」と言つて、自分も熱い涙を流して泣き出した。そこでお前達はどう思ふね？」カラターエフはます／＼晴々とした顔附になつて、感激の微笑を輝かしながらかう言つた。それは自分がこれから話さうとしてゐることに、この物語の重な美と意味が含まれてゐるかのやうであつた。『みんな何う思ふ、この人殺しがお上へ自首したんだよ。「わたくしは六人の人を殺しました（中々の大悪黨だつたのだ）。けれど一番氣の毒なのはあの老人でございます。あの人がわたくしを怨まないやうに、どうかお取計らひを願ひます。」と名乗つて出た譯さ。お上の方ちやこの自首を書き留めて、規則通りに書類を送られた。しかし何分遠方だから、裁判だとか調べだとか言つて、いろんな書類を掟通りに方々の役所

で書かなくちやならん。到頭事件は陛下の手許まで届いた。さうかうするうちに、商人を放免して賠償金を拂つてやれ、と云ふ陛下のご命令が来た。その命令書が来ると、みんなで老人を捜しにかゝつた。「無實の罪で苦しんでゐる爺さんはどこにゐる？ 皇帝から書類が来たぞ！」かう言つて捜したんだ。』カラターエフの下顎はびくりと慄へた。『けれど神様はもうお赦しになつた——爺さんは死んでゐたのだ。かう云ふ譯なのさ。』と言つてカラターエフは語を結んだ。そして無言のまゝ微笑を浮べて、長い間まへの方をじつと見詰めてゐた。

この物語そのものでなく、物語の神祕的な意味と、話の間ぢうカラターエフの顔にかゞやいてゐた歡喜と、この歡喜の神祕的な意義が、今ピエールの心を漠然とした喜びで充してゐるのであつた。

一四

『A vos places (各自部署に就け)』突然かう云ふ叫び聲が聞えた。俘虜と護送兵の間には、喜ばしげな慌たゞしさと、何か幸福で嚴肅なものを豫期する心持が生じた。四方から號令の聲が聞えた。左側から俘虜の群を迂回しながら、立派な服装で美事な馬に乗つた騎兵の一隊が現れた。一同の顔には最高權威者を迎へる時に見られるやうな、緊張の表情が浮んでゐた。俘虜達は一塊りに小

さくなつたが、やがて道路の外へ押し出されて了つた。護送兵は隊伍を整へた。

『L'Empereur ! L'Empereur ! Le maréchal ! Le duc ! (皇帝だ！ 皇帝だ！ 元帥だ！ 藩侯だ！)』

満ち足りたやうな風貌をした、護送兵の一隊が騎馬で通り過ぎると、すぐ灰いろの六頭立に曳かれた箱馬車が轟然と疾驅した。三角帽を被つた、落着きのある、美しい、でつぷりした白い顔が、ちらりとピエールの目に映つた。それは元帥の一人であつた。元帥の視線は、目を惹きやすい大きなピエールの姿に注がれた。この元帥が顔を擧めてそつぽを向いた時の表情に、何かしらある同情の念と、同時にそれを隠さうとする希望が現れたやうに、ピエールには感じられたのである。

輸送隊を指揮してゐる將軍は、慄えたやうな赤い顔をして、瘦せた馬を追ひながら、箱馬車の後から走つてゐた。幾人かの將校が一ところに集ると、兵士らはそれを取り圍んだ。一同は興奮したやうな緊張した顔をしてゐた。

『Qu'est-ce qu'il a dit ? Qu'est-ce qu'il a dit ? (何と言つたんだ) (何と言つたんだ)』と云ふ聲が、ピエールに聞えた。

元帥が通り過ぎる間、俘虜は一かたまりに小さくなつてゐた。と、ピエールは今朝からまだ會はずにゐるカラターエフを見つけた。カラターエフはいつもの外套を着て、白樺の木に凭れなが

ら坐つてゐた。彼の顔には、ゆうべ罪なき商人の苦しみを話した時と同じ歡喜の外に、もう一つ静かな嚴肅な表情が輝いてゐた。

カラターエフは持前の善良な圓い眼でピエールを見た。その眼はいま涙に濡んでゐるのであつた。彼はピエールを招き寄せて、何か言ひたさうな風であつた。しかしピエールはあまりに自分で自分の弱さを恐れてゐた。彼はその視線を見ないやうな振をして、急いでその場を離れた。

俘虜隊が再び行進を始めた時、ピエールは後ろを振り返つて見た。カラターエフは道端の白樺の傍に坐つてゐた。二人の佛蘭西兵がそのすぐそばで何か言つてゐた。ピエールはそれ切り振り向いて見なかつた。彼は跛を曳きながら坂を上つて行つた。

と、後ろの方で、カラターエフが坐つてゐた邊から、一發の銃聲が聞えた。ピエールはこの銃聲をまぎ／＼と聞いた。けれどこの銃聲を聞きつけた瞬間に、ピエールは元帥の通過前から始めてゐた勘定——これからスモレンスクまで幾行程あるかと云ふ勘定が、まだ濟んでゐないのを想ひ出した。で、彼はまた勘定を始めた。佛蘭西兵が二人ピエールの傍を駆け抜けた。一人はまだ煙の出る銃を手に持つてゐた。二人とも眞蒼な顔をしてゐた。彼等の表情には——そのうち一人はおづ／＼とピエールを見た——かつて死刑執行の時、若い兵卒に見受けられたやうな、或る何物かが現れてゐた。ピエールは一人の方を見ると、一昨日その兵卒が焚火で乾すとて襯衣を焼

いて、みんなに笑はれたことを想ひ出した。

犬が後ろの方で——カラターエフの坐つてゐた邊で、悲しげに啼き出した。「何といふ馬鹿な奴だ、何を吠えてるんだ？」とピエールは考へた。

ピエールと並んで歩いてゐた仲間の兵士等も、矢張りピエールと同じやうに、最初の銃聲に續いて犬の啼き聲が聞えた方を、振り返つて見ようとしなかつた。しかし誰の顔にも嚴つい表情が浮んでゐた。

一五

騎兵の行李も俘虜隊も元帥の輜重も、シャムシエブ村に停つた。やがて何もかも焚火の傍へ一塊りになつた。ピエールも焚火の傍へ寄つて、焼いた馬肉を食べ終り、火に背中を向けて横になると、すぐさま眠りに落ちて了つた。彼は再びボロヂノ戦役の後、モジヤイスクで見たのと同じやうな夢を見たのである。

再び現實と夢とが結び合つた。再び誰かが（彼自身か或ひは誰かほかの者か）彼に或る思想を語つた。而もそれは、モジヤイスクで語られたのと殆ど同じ思想であつた。

「生は一切である。生は神である。すべては變轉し流動する。この運動は神である。生のある

限り、神性自覺の歡びがある。生を愛するのは、即ち神を愛することである。もつとも困難であると同時にもつとも大なる法悦は、苦痛の中で——罪なくして受ける苦痛の中で、この生を愛することである。」

「カラターエフ！」ふとピエールは思ひ出した。

疾うに忘れてゐた溫和な老教師の姿が、突然ピエールの心にまぎ／＼と浮んだ。それは瑞西でピエールに地理を教へた人である。『ちよつとお待ち。』老教師はピエールに地球儀を見せた。その地球儀は一定の形をもたない、生きて動揺してゐる球であつた。球の表面は一面にびつたりくつ附き合つた水の滴から出来てゐた。これらの水滴は悉く動き移つて、幾つかの滴が一つに溶け合ふかと思ふと、今度は一つの滴が幾つにも分れるのであつた。一つ／＼の滴が出来ただけ擴つて、少しでも澤山の場所を取らうとするが、矢張り同じ事を望んでゐる他の滴がそれを壓迫して、時にはまるで潰して了つたり、時には一緒に溶け合つたりした。

『これが人生なんだよ。』と老教師は言つた。

「何といふ單純で明白なことだらう。」とピエールは考へた。「どうして俺は今までこんな事が分らなかつたのだらう。」

『中心には神がある。そしてどの滴も出来るだけ大きく神を映す爲に、一生懸命に擴がらうとしてゐるのだ。滴は大きくなつたり、溶け合つたり、縮まつたりする。そして表面で姿を消したものは一旦底の方に隠れて、また再び浮び出すのだ。ほら、これがカラターエフだ。そらやはり擴つて姿を消した。Vous avez compris, non enfant (分つたら、お前。』と教師は言つた。

『Vous avez compris, sacrés nom (分つたら、畜生。』と誰かが呟鳴つた。ピエールは目を醒した。

彼は身を起して坐つた。一人の佛蘭西兵が焚火の傍にしゃがんで、柵杖にさした肉を炙つてゐた。彼はたつた今一人の露西亞兵を突き飛ばしたのである。袖をたくし上げた、毛むくぢやらの指の短い、筋だらけの赤ちやけた手は、巧者に柵杖をぐる／＼廻してゐた。眉を擧げた鳶色の陰鬱な顔は、炭火の明りではつきりと見えた。

『Ça lui est bien égal (あんな奴はどうもさへんだ。』後ろに立つてゐる兵卒の方をちらりと振り向き乍ら、彼はかう呟いた。『Brigand. Va! (強盗だ、去れ。』

佛蘭西兵は柵杖を廻しながら、陰鬱な目つきをしてピエールを睨んだ。ピエールは闇の中を見すかしながら顔を反けた。佛蘭西兵に突き飛ばされた露西亞の俘虜は、焚火の傍に坐つて、何やら手でぽと／＼叩いてゐた。目を寄せて見ると、それは瑠璃色の小犬が尾を振りながら、兵卒の傍に坐つてゐるのであつた。

『あ、来たな?』とピエールは言つた。『だが、プラ……』彼は言ひかけて止めて了つた。

突然かれの想像の中に、プラトンが樹の下に坐つたまゝ彼を見た眼つきや、その場で聞えた銃聲や、犬の啼き聲や、傍を駆け抜けた二人の佛蘭西兵の罪人めいた顔や、煙の出てる小銃や、この夜營にカラターエフの缺けてゐる事や——さういふ追憶が互ひに繋がり合ひながら、殆ど同時に浮んで來た。で、ピエールはすんでの事で、カラターエフの殺されたことを合點しようとしたが、丁度その瞬間彼の心中に、どこから出て來たものか、或る夏キーエフの持家の露臺で、佛蘭美人と共に過した一夜の追憶が浮んで來た。で、結局今日の記憶を繋ぎ合して、何等かの結論をする暇のない中に、ピエールは眼を閉ぢて了つた。すると夏の自然の景色は、水浴や、揺れ動く水の球の記憶と混り合つた。彼は何處やら水の底へ沈んで了つて、頭の上まで水を被つたやうな氣がした。

日の出る前に、ピエールは頻繁な高い銃聲や、人の叫び聲に眼を醒された。ピエールの傍を佛蘭西兵が走り過ぎた。

『Les cosaques (コサツク)』と一人の佛蘭西兵が叫んだ。やがて約一分の後、露西亞人の群がピエールを取り圍んだ。ピエールは長い間、自分がどうなつたのか合點が行かなかつた。彼は四方八方から仲間のもの悦ばしげな叫び聲を聞いた。

『あゝ皆の衆！ 懐かしい兄弟！』年とつた兵士らは、哥薩克や輕騎兵を抱き締めて、泣きながら叫ぶのであつた。

輕騎兵や哥薩克は俘虜を取り圍んで、ある者は服、ある者は靴、ある者は麵麩を、急がしげに薦めてゐた。ピエールはその真中に坐つて慟哭するのみで、一ことも口が利けなかつた。彼はまつ先に自分の傍へ來た一兵卒を抱きしめて、泣きながら接吻するのであつた。

ドーロホフは崩れた家の門際に立つて、武器を取り上げられた佛蘭西兵の群が、自分の傍を通るのを監視してゐた。今の出來事に興奮した佛蘭西兵は、互に大きな聲で喋り合つてゐた。しかしドーロホフの傍へさし懸ると、びつたり話し聲がやんで了つた。ドーロホフは鞭で軽く自分の長靴を叩きながら、硝子のやうに冷たい、如何にも不吉らしい眼附で、佛蘭西兵を眺めてゐた。今一方にはドーロホフ附の哥薩克が立つて、捕虜の數をしらべながら、百人毎に白墨で門にしるしを付けてゐた。

『幾人だ？』ドーロホフは捕虜を數へてゐる哥薩克にかう訊いた。

『かれこれ二百であります。』と哥薩克は答へた。

『Pilez, filz (おつぱと行け)』とドーロホフは言つた。これは佛蘭西人から習つた言ひ方なのであ

つた。過ぎ行く捕虜と視線が出合つた時、彼の眼は残酷な光に燃え立つた。

デニースフは暗い顔つきをしながら、毛皮帽を脱いで、庭の中へ掘られた穴へペーチャ・ロストフの死骸を運んで行く、哥薩克たちの後からついて行つた。

一六

十月二十八日に霜が降り始めてから、佛蘭西軍の逃走はいよ／＼悲劇的な性質を帯びて來た。兵卒は凍え死んだり、焚火の傍で焼け死んだりしてゐるのに、皇帝や王や藩侯達は、毛皮の外套にくるまり、掠奪した財物を持つて幌馬車に乗つて行くのであつた。併し本質上、佛蘭西軍の逃走と崩潰の經過は、以前と少しも變らなかつた。

莫斯科からギャージマまで行く間に、七萬三千の佛蘭西軍のうちで残つた者は、近衛兵を計算に入れないで（近衛兵は戦争の始めから終りまで、掠奪のほか何一つしなかつた）、三萬六千であつた（このうち戦死者は五千に充たなかつた）。尤もこれは級數の第一項で、これによつて他の諸項は數學的に確定さるべきである。かう云ふ比例で莫斯科からギャージマまで、ギャージマからスモレンスクまで、スモレンスクからベレージナまで、ベレージナからギリナまで、寒氣とか追撃とか退路の遮斷とか、その他さまざまの箇々の原因の程度いかに拘らず、佛蘭西軍は絶え

ず消滅して行つたのである。ギャージマから以後、佛蘭西軍は以前の三縱隊を一かたまりに崩して、最後までこの状態で進んで行つた。ベルチエは皇帝に報告を書いた（一般に軍指揮官が軍隊の状況を報告する場合、どれくらゐ眞實から遠ざかるか、それは疾くに周知の事實である）。彼は次のやうに書いた。

『臣は最近三日間、種々なる行程に於て見聞したる各種軍團の状況を、陛下に上奏するを以て己れの義務と愚考仕り候。各軍團殆ど悉く潰亂の状態に在り、隊の軍旗を守るものは僅々四分の一に過ぎず、他はみな各自欲する所の方向へ進み、ひたすら食を求め軍規を遁るゝに汲々たる有様に御座候。士卒はたゞスモレンスクのみを夢想して、そこに休息の地を發見し得る事と囑望致し居り候。數日來、多數の兵卒が彈藥筒、並びに銃を抛棄するの風を認め申し候。事態かくの如くに候へば、將來に對する陛下の聖慮如何に拘らず、隊務に關する能率増進の目的を以て、スモレンスクに各軍團を集合し、その中より軍務に不適當なる者、即ち馬を失ひたる騎兵、武器を有せざる歩兵、不要の輜重、今や全兵力との均衡を失したる砲兵の一部等の淘汰を必要とすべく、糧食並びに數日間の休養も肝要かと存じ候。兵卒は飢餓と疲労のため憔悴の極に達し、近日來路上ならびに野營地において死亡するもの頻々たる有様に御座候。かゝる寒心すべき情況は、刻々その度を強め居り候間、もしこの災厄豫防の策を講ぜざれば、やがて臣等は戦闘に際し、軍を指

揮する能はざるに立ち至るを虞るゝものに御座候。十一月九日、スモレンスクを距る三十露里の地點にて。」

佛蘭西軍は、聖約の土地のやうに思はれてゐたスモレンスクへなだれ込むと、互に糧食のために殺し合つたり、友軍の酒保を掠奪したりした擧句、何ひとつ残らず掠奪しつくすと、また先の方へ潰走するのであつた。

すべての者は自分達が何處へ何のために行くのか、少しも知らずに進んだ。殊に天才ナポレオンが誰よりも一番知らなかつた。それは誰も彼に命令する者がなかつたからである。しかしそれでも、彼を始めとして周囲の人々は、前からの習慣を守つて命令や、手紙や、報告や、ordre du Jour (日課簿) を書きたり、また互に『Sire, Mon Cousin, Prince d'Ekmuhi, roi de Naples (陛下、兄弟、エクミュール公ナポリ王)』などと呼び合つてゐた。しかし命令や報告はたゞ紙の上だけで、何一つ實行されなかつた。つまり、實行される筈がなかつたからである。そして互に陛下とか殿下とか従兄弟とか呼び合つてゐたけれど、みんな自分達が多くの悪を働いた、みじめな、穢ちかしい人間で、今その悪の酬いを受けてゐるのだ、と云ふことを感じたのである。彼等は軍隊のことを心配してゐるやうな振をしてゐたが、その實たゞ自分一個のこと——どうかして少しも早く逃げ出して、身を全うすることが出来るか、と云ふことだけしか考へてゐなかつた。

一七

莫斯科からネマン河に至る退却戦において、露佛兩軍の行動は、ちやうど盲鬼の遊戯でもしてゐるやうなものであつた。敵味方が両方とも眼隠しをしてゐて、一方が時々鈴を鳴らしながら、自分の在りかを鬼に知らせる。初めの間、掴まへられる方は對手を恐れずに鈴を鳴らしてゐたが、だん／＼雲行が悪くなつてくると、なるべく靜かに歩くやうにして敵を避ける。そして、しよつちう巧く逃げおほせる氣で、却つて敵の手中へ飛び込むことがあつた。

まだ初めの中は、ナポレオン軍も自分の在りかを知らせてゐた——それはカルーガ街道退却の初期であつた——けれどもその後スモレンスク街道へ出ると、彼等は手で鈴の舌を押へて逃げ出した。そしてまんまと逃げおほせたつもりで、ぱつたり露西亞軍にぶつ突かる事も度々あつた。

佛蘭西軍の逃走も露西亞軍の追撃も共に急速で、その結果馬の疲れが甚だしかつたために、概略敵の状況を知る重な方法——騎兵斥候と云ふものがなくなつた。のみならず、兩軍の位置が斷えず急變するので、何か情報を得ても間に合ふ道理がなかつた。最初の日敵軍のゐた地點について、二日目に報告が來たとしても、何か策應することの出来る三日目には、敵軍はもう二行程も前進して、全然別な位置を取つてゐるのであつた。

一方は逃走し一方は追撃した。スモレンスクから先は、佛蘭西軍の進むべき路がいろ／＼澤山あつた。佛蘭西軍はそこに四日も滞在したことであるから、どこに敵があるかと云ふことを究めて、何か有利な計畫を巡らし、何か新しい方法を講じるべき筈であつたのに、彼等は四日間滞在した後、再び群を亂して逃走を始めた。しかもそれは右でも左でもなく、また何等の企圖も考慮もなしに、一番不利な舊街道——一度踏み荒した足跡を辿つて、クラースノエからオルシャをさして逃げ出したのである。

敵は後方に在つて前方にないと豫期した佛蘭西軍は、端から端まで二十四時間を要する距離に跨りながら、別れ／＼に逃げて行つた。眞先に皇帝、つぎに王、つぎに藩侯といふ順で逃げた。露西亞軍はナポレオンが右の方へ取つて、ドネーブル河を渡る事と想像して（それが一番理に適つたことであつた）、矢張り右へ取つてクラースノエに通ずる大街道へ出た。と、そのとき佛蘭西軍は、ちやうど盲鬼のやうに、我が軍の前衛にばつたり出會したのである。突然敵を見た佛蘭西兵はすつかり狼狽した。そして餘りの意外さに驚いて停止したが、廳て後から續く味方を捨てて、再び逃走を始めた。それから三日間、佛蘭西軍の各箇部隊は相ついで——最初副王、次にダヴィ、次にネイと云ふ順で、露西亞軍のなかを潜るやうにして通り抜けた。彼等はみな味方を棄てた。一切の重いもの、砲、兵の半數を棄てた。そして夜に乗じて右の方から半圓を描きながら、露西

亞軍を迂廻して遁走した。

ネイは一番後から逃げた（彼は自分の不幸な境遇にも拘らず——或ひは却つてそれがためかも知れぬ——自分が倒れて傷ついた床を打つ子供のやうに、誰の邪魔にもならぬスモレンスクの城壁を爆破してゐたのである）。一萬の軍團を率ゐて一番後から進んでゐたネイが、オルシャなるナポレオンの所へ駆けつけた時には、手勢僅かに千人の兵しかなかつた。彼はすべての士卒と大砲を棄てて、夜ひそかにドネーブル河を渡り、林づたひに遁れて來たのである。

オルシャからも依然として追撃軍と盲鬼をしながら、彼等は更にギリノを指して街道づたひに走つた。その途中ベレージナ川で再び混亂を來し、多數の溺死者と投降者を出した。けれど、首尾よく河を渡つた者は、更に走りつゞけた。指揮官は毛皮外套を着て、櫓に乗り、僚友を棄ててたゞ一人遁走した。逃げられる者は——矢張り逃げた。逃げられなかつた者は——投降したり死んだりした。

一八

佛蘭西軍が自分で自分を滅すために、ありと有らゆる方法を盡したこの逃走戦は、まづカルーガ街道へ轉じた抑々から、指揮官が軍を棄てて逃走するに到る迄、一切の行動に何の意義もなさ

さうに思はれる。群集の行動を一人の意志に歸する歴史家も、戦争のこの時期——この退却を、さういふ意味に於て叙述することは、到底出来さうもないやうに思はれる。ところが、さうでない。歴史家はこの戦役について、汗牛もたぐならぬほど多くの書物を著してゐる。そして到る處にナポレオンの作戦と、その深謀遠慮——兵を指導した軍略と、諸元帥の天才的指令を吹聴してゐる。

糧食の豊富な地方へ入る路が開かれてゐるにも拘らず、またその後クトゥゾフが追撃の際に擇んだ平行の道路が開かれてゐるにも拘らず、小ヤロスラーエツから退却したといふことは、即ち徒らに荒廢した路を辿つて退却したと云ふことは、様々な意味深長な理由によつて説明されてゐる。またモレンスクからオルシャに至る退却も、同じく意味の深い理由をつけて辯護されてゐる。更にクラスノエに於けるナポレオンの勇敢な行動、と稱するものも傳へられてゐる。ここで彼は戦鬪に應じて、自ら軍を指揮する決心を固め、白樺の棒をもつて歩きながら、

『J'ai assez fait l'empereur, il est temps de faire le général』(今は驍分長と問皇帝となつてゐたが今は將軍となるべき時である)と言つたことである。併しそれにも拘らず、彼はすぐその後で、四離滅裂になつてゐる後方の各部隊を運命の掀翻に任せて、更に前方へ遁走したのである。その精神の偉大と云ふのは外で次に歴史家は諸元帥、殊にネイの精神の偉大さを説いてゐる。

もない。夜間迂路に依つて林を抜け、ドネープル河を渡り、軍旗も砲も棄てた上、十分の九まで軍隊を失つて、オルシャに逃れ着いたことを言ふのである。

最後に偉大な皇帝が勇敢なる軍隊を見棄てて了つたことを、歴史家は一種崇高な天才的行動のやうに描き出してゐる。人間の言葉で卑劣の最下級と名づけられ、三歳の幼児でさへ恥づべきことと教へられる、この遁走と云ふ行爲でさへも、歴史家の言葉では辯護を與へられてゐるのである。

歴史判断の伸縮自在な絲を、もうこれ以上不可能と云ふ所まで引き伸しても、或る一つの行動が、全人類によつて善もしくは正義と呼ばれてゐるものに、全然相反するやうな場合、歴史家は偉大と云ふ救ひの力を生み出すのである。それはまるで偉大と云ふものが、善惡の尺度を超越してゐるやうな工合である。偉大な人間にとつて惡はない。如何に恐怖すべきことでも、そのために偉大な者が罪に問はれるやうな處はない。

『C'est grand』(これは偉大)』と歴史家は言ふ。その時にはもう善も惡もなく。たゞ『grand』と『非 grand』があるだけである。Grand は善、非 grand は惡である。Grand は歴史家の考へによると、彼等が英雄と呼んでゐるところの、或る特殊な動物の特質なのである。ナポレオンは瀕死の戦友ばかりでなく(彼の意見によれば)自分でこゝまでつれて來た多くの人々をも見棄て

て、暖い毛皮外套にくるまつて逃げながら、*C'est grand* (これは偉大だ) と感じて、その良心は安らか
だつたのである。

『崇高（ナポレオンは自分の中に何かしら崇高なものを見てゐた）と滑稽とは、たゞ一步の差
に過ぎない。』とナポレオンは言つた。すると、全世界は五十年の間『*Sublime! Grand! Napo-*
léon le grand! Du sublime au ridicule il n'y a qu'un pas (崇高だ！偉大だ！ナポレオンは偉大
だ！崇高と滑稽とはたゞ一步の差だ！)』と
繰り返してゐる。

善悪の尺度によつて量り得ない偉大を認める事は、たゞ自分の無價値と、限りなき弱小を認め
るに均しいと云ふことに、誰ひとり思ひ及ぶものがないのである。

基督から與へられた善悪の尺度を持つ我々にとつては、計量することの出来ないものは一つも
ない。淳真と、善良と、正義のないところに、偉大はないのである。

一九

千八百十二年役の末期に關する記述を讀んだ露西亞人の中で、重苦しい悔恨と、不満と、曖昧
模糊の感じを味はない者があるだらうか？ また露西亞の三軍が優勢な兵力を以て、佛蘭西軍を
包圍してゐたにも拘らず——崩潰した佛蘭西軍が飢ゑ凍えながら、群をなして投降して來たにも

拘らず——更に歴史の語るところによれば、露西亞軍が佛蘭西の全軍を抑制し遮斷し、残らず捕
虜にしてふことを目的としてゐたにも拘らず、なぜ佛蘭西全軍を捕虜にもせず、剿滅もしな
かつたのか、とかう反問しない者が果してあるだらうか？

露西亞軍は數に於て佛蘭西軍より劣つてゐながら、ボロヂノに於いては、自ら進んで戰を挑ん
だ。その露西亞軍が今度は三方から佛蘭西軍を包圍して、しかもそれを捕虜にすることを目的と
してゐたにも拘らず、どうしてその目的を達しなかつたのだらう？ 果して佛蘭西軍は我々が優
勢な兵力で包圍しても、つひに撃破し得なかつたほど、露西亞軍以上に多くの強味を持つてゐた
のだらうか？ どうしてあんな風になつて了つたのであらう？

歴史（普通この言葉で呼ばれてゐるものを指す）は、これらの間に對する答として、あゝ云ふ
風になつて了つたのは、クトゥゾフ、トルマーソフ、チチャゴフ、その他の某々が、斯く斯くの
機動をしなかつたからだ、と言つてゐる。

しかし、なぜ彼等はさう云ふ機動を行はなかつたのだらう？ もし豫定の目的が達しられな
かつたのを彼等の責任とするならば、なぜ彼等を裁判に附して所罰しなかつたのだらう？ 假りに
露西亞の不成功の責任がクトゥゾフ、チチャゴフその他の人々にあるとしても、なぜ露西亞軍は
クラスノエヤベレージナで、あゝいふ状況に置かれてゐたにも拘らず（この場合ふたつながら、

露西亞軍は極めて優勢な位置にあつた、最初の目的どほり佛蘭西軍を元帥も王も皇帝も一緒に、捕虜にしてはなかつたかといふことは、矢張り了解に苦しむところである。

この奇異な現象を説明するのに（露西亞の戦争史家のごとく）、クトゥゾフが攻撃を阻止したからだと言ふのは、甚だしくはない事である。なぜと言つて、クトゥゾフの意志で軍の攻勢を抑へることが出来なかつたのは、ギャージマヤタルーチノ戦の事實に徴して、充分明瞭になつてゐるからである。

ポロヂノに於ては遙かに薄弱な力を以て、全盛の敵に打ち勝つた露西亞軍が、なぜクラスノエヤベレージナに於て優勢な兵力を擁しながら、潰亂せる佛蘭西軍に破られたのであらう？

もし露西亞軍の目的がナポレオン始め各元帥の退路を斷ち、彼等を捕虜にすることに在つたとすれば、この目的は單に達せられなかつたばかりでなく、それを達しようとするあらゆる試みも、その都度醜い失敗を繰り返したのであるから、従つてこの戦役の末期は佛蘭西側で考へる通り、彼等の連戦連勝を以て終始してゐるものと言ふべきであり、露西亞の歴史家が自國の勝利と思考してゐるのは、全然誤つてゐると言はなければならぬ。

露西亞の戦史家も、論理の要求する限り、識らず知らずこの結論に到着した形である。そして勇氣とか忠義とか云ふ抒情詩的感嘆にも拘らず、佛蘭西軍の莫斯科退却はナポレオンの勝利の連

續であり、クトゥゾフの敗北であることを承認しなければならなかつた。

しかし國民的自負心を全然除外しても、この斷案はそれ自身矛盾を含んでゐるやうに感ぜられる。なぜなれば、佛蘭西軍の連戦連勝は彼等を全滅に導き、露西亞軍の連敗は彼等をして敵を全滅せしめ、祖國から敵影を一掃したからである。

この矛盾のよつて發するところは、皇帝や將軍の書簡、さまざまの叙述、報告、計畫などによつて事件を研究してゐる歴史家が、千八百十二年役の後期に於て、かつて存在したことのない過つた目的——ナポレオン始め各元帥ならびに軍隊の退路を斷つて、彼等を捕虜にしようと言ふ目的を豫想したことに存する。

かう云ふ目的はかつてなかつた、またあるべき筈がない。なぜと言つて、そんなことは何の意味も持つてゐないし、その達成は全然不可能だつたからである。

この目的が何の意味も持たないと云ふ理由は、第一に、ナポレオンの崩潰した軍隊が、全速力で露西亞を遁れ去つてゐたからである。即ち、すべての露西亞人が望み得る最上の事を實行したからである。一生懸命に逃げて行く佛蘭西軍に對して、さまざまの作戦を講じたところで、それが一體何のためにならう？

第二に、自分の全精力を逃走に注いでゐる人々を、途に阻むと云ふことは無意味であつた。

第三に、外部的原因はなくとも、すでに滅亡しつつある佛蘭西軍を滅ぼすために、おのれの軍を失ふのは無意味であつた。實際、佛蘭西軍の自滅の速度は非常なもので、たとへ全く途を遮られないとしても、十二月に露西亞から遁れ出た數より以上——即ち全軍の百分の一以上が、國境を越すことは出来なかつたに相違ない。

第四に、皇帝や王や藩侯を捕虜にしようとする希望も無意味であつた。さう云ふ人達を捕虜にしたなら、露西亞軍の活動が極度の困難に陥つたに相違ない。それは當時の最も巧みな外交家(J. Maistre その他)も認めるところである。佛蘭西の軍團を捕虜にしようとする希望は、一層無意味なものであつた。なぜと言つて、クライスノエまでに半數を失つた露西亞軍は、幾軍團の捕虜のために多くの師團を護送として割かねばならなかつた。しかも兵卒は屢々充分な糧食を得ることが出来ないでゐるし、それまでに收容した捕虜は、飢餓のためにころ／＼死んで行く、といふやうな有様だつたからである。

ナポレオンとその軍隊の退路を断つて、これを捕虜にしようとする遠謀深慮は、菜園の畦を踏み荒した牛を追ひ出しながら、門の外まで駈け出してその牛の頭を叩かうとする、百姓の考へに似通つてゐる。たゞ一つこの百姓の辯護に言ひ得ることは、彼が前後を忘れるほど腹を立てたと云ふくらゐのものである。けれどこの辯護も作戰計畫の立案者に當て嵌めることは出来ない。な

ぜと言つて、畦を踏み荒されて迷惑したのは彼等でないからである。

なほその上、ナポレオンとその軍隊を遮断するのは、無意味なばかりでなく、不可能なことであつた。

これが不可能であると云ふ理由は、第一、實驗によつても知られるとほり、或る戦闘に於て五露里に互る大縦隊の行動は、決して計畫と一致するものでないから、従つてチチャゴフやクトッゾフやギトゲンスタインが、一定の時間に指定の場所に會合し得ると云ふ想像は、殆ど不可能と同じ程度に無意味な事だからである。クトッゾフが計畫を受け取つた時、大距離に互る轉向は所期の結果を齎すものでない、と言つたのは、まさにこの考へによるものである。

不可能である第二の理由は、ナポレオン軍の退却の惰力を痲痺させて了ふには、當時の露西亞が持つてゐたより、遙かに多くの兵力が必要だつたからである。

これが不可能である第三の理由は、「遮断する」と云ふ軍事上の用語が、何らの意味をも有してゐないからである。麵麩きれか何かなら断ち切ることも出来ようが、軍隊はさういふ譯に行かない。軍隊を断ち切ること——軍の道を遮ること——はどうしても出来ない。なぜと言つて、どんな所にでも迂廻の出来る場所は澤山あるし、それに何ひとつ見えない夜と云ふものがあるからである。これは軍事學者がクライスノエや、ベレージナの實例によつて確信し得るところである。

捕虜にするといふ點に到つては、當人の承知なしに、決して人間を捕虜にする譯に行かぬ。それは丁度燕が手に止れば掴まるけれど、さもない限り捕へる事が出来ないのと同じ道理である。獨逸人のやうに、軍略や戰術の法則によつて投降する場合には、捕虜にすることも出来る。しかし佛蘭西の軍隊は全然正當な理由から、捕虜になるのを好都合と認めなかつた。なぜと言つて、逃げても捕虜になつても同じやうに、飢死と凍死が彼等を待つてゐたからである。

これが不可能であると云ふ第四の最も主な理由は、世界はじまつて以來この千八百十二年役ほど、恐しい條件の下に行はれた戦争は曾てなかつたからである。露西亞軍は佛蘭西軍追撃に全力を注いでゐたので、もしそれ以上の努力をすれば、自ら滅びるよりほかになかつたのである。

タルーチノからクラスノエまで行く間に、露西亞軍は病兵や落伍者などで五萬人、即ち地方の大都市の人口に等しい兵員を失つた。軍隊の半數が戦はずして失はれたのである。

戰役のこの時期、即ち軍隊が長靴も毛皮外套もなく、足らぬ勝な食糧に養はれながら、アトカ火酒も飲まずに、何箇月といふあひだ零下十五度の雪中に野營した時期、一日のうち晝は僅かに七八時間だけで、あとは軍律の力でもどうすることも出来ない夜ばかりの時期、戰鬪中のやうにたゞ僅か數時間だけ、軍律の力も及ばぬ死の領域へ引き入れられるのではなく、斷えず餓死と凍死と戦ひながら、幾箇月も幾箇月も生活してゐた時期、一箇月のうちに軍の半數が消滅して了ふと云ふ

やうな時期——戰役のかう云ふ時期について歴史家達は、ミロラードギッチがどこそこへ側面行進をすべきであつたとか、トルマーソフが某々の地點へ赴くべきであつたとか、チチャゴフはかくかくの方面へ進むべきであつたとか（それは膝を没する雪中なのである）、また實際それらの人が如何に敵を撃破し遮斷したか、などといふやうな事を喋々してゐるのである。

半ば滅亡に瀕した露西亞軍は、自國民を辱めないやうな目的を達するために、なし得るだけの事をなし、なすべき事を悉くなし盡したのである。したがつて、温い部屋に坐つてゐる他の露西亞人たちが豫期してゐたやうな、不可能な事をなし得なかつたからと言つて、それは決して露西亞軍の罪ではない。

かう云ふやうな矛盾——今日から見れば奇怪で不可解な矛盾、事實と歴史の撞着のよつて生ずる所以は、たゞこの事件を書いた歴史家たちが、様々な將軍連の美しい感情や言葉の歴史を書いて、事件の歴史を書かなかつた點に存するのである。

彼等にとつてはミロラードギッチの言葉だとか、某々の將軍が受けた行賞だとか、もしくは彼等の豫想計畫などが、非常に重要なものと思はれて 病院や墓場に残つた五萬の人間に關する問題が、一顧の興味すらも惹き起さないのである。つまり、さう云ふ問題は彼等の研究の範圍に屬さないからである。

しかるに一たび將軍の報告や作戰の研究から離れて、事件に直接關與した數十萬人の行動に思を潜めるならば、以前不可解に思はれたすべての問題が立ちどころに、しかも極めて容易にかつ簡単に、謬りのない解決に到着するのである。

ナポレオン及びその軍隊を遮斷すると云ふ目的は、たゞ十數人の人々の想像以外に、決して存在してゐなかつたのである。そんなものの存在する筈がなかつた。なぜと言つて、それは無意味だからである。そんな目的の到達は不可能だつたからである。

國民の目的はたゞ一つしかない、即ち己れの祖國から侵入軍を掃蕩することであつた。この目的は、第一、佛蘭西軍の逃走で自然に達せられた。それ故たゞこの運動を止めないやうにすればいいのであつた。第二に、この目的は、佛蘭西軍剿滅に盡した國民戦の力によつて達せられた。第三に、この目的は露西亞の大軍が、佛蘭西軍の逃走中止の場合に力を用ひる身構へをし乍ら、佛蘭西軍の後を追跡した事によつて達せられた。

逃げて行く動物に對する鞭、これが露西亞軍のとるべき行動だつたのである。そのため一番利き目があるのは、鞭を振り上げたまゝ嚇かすことで、逃げて行く動物の頭をひつばたくことではない。それは經驗ある牧夫のよく承知してゐる所である。

第十五編

人は死にかゝつてゐる動物を見るとき、一種の恐怖に襲はれるものである。即ち彼自身であるもの——彼の本質——が、その眼前で明かに消滅し、存在を斷つからである。けれど、もし死にかゝつてゐる者が人間である時、しかも愛する人間——手に觸れて感じ得る人間である時は、生命の消滅に對する恐怖の外に、引き搦られるやうな精神的の手傷が感じられる。それは肉體の傷と同じやうに、時によると命を奪ふこともあるが、また時によると癒着することもある。しかしいづれにしても、その傷は烈しく痛んで、外部からの判戦的な接觸を恐れるものである。

アンドレイ公爵の死後、ナターシヤとマリヤは同じやうにこれを感じた。二人は精神的に萎縮して、自分の頭上に垂れ掛つた、恐しい死の雲に眼を細めながら、生活をまともに見詰める勇氣さへなかつた。そして自分達の開いた傷口を、侮辱をふくんだ病的な接觸に犯されまいと、一生懸命だいに庇つてゐた。通りを疾驅する馬車、食事の知らせ、どのお召物を用意して置きませ

うかと云ふ小間使の間、殊に眞實の籠つてゐないお手輕な同情の言葉——何もかも病的に傷口を刺戟して、侮辱のやうに思はれた。そしてまだ二人の想像のなかに鳴りやまない、恐しい嚴肅な合唱を聞き澄ますのに必要な靜寂を掻き亂して、時々ちらと目の前に展開される、神祕な無限のかなたを見入るのに、邪魔をするのであつた。

たゞ二人きりでゐる時だけは、さう云ふ侮辱や苦痛を感じなかつた。彼女らは互に餘り話しをしなかつた。たとへ話し合つても、ごく詰らないことばかりであつた。そして兩方とも何事にまれ、未來に關した話を避けるやうにしてゐた。

未來の可能を認めるのは二人にとつて、アンドレイ公爵の記憶を辱めるやうに思はれた。また互の話の中で、すべて故人に關係のありさうな事は、なほさら注意深く避けてゐた。二人は自分たちが経験したり感じたりした事は、言葉などで現すことが出来ないやうに思はれた。アンドレイ公爵の生涯の細事を言葉で話すのは、眼前で行はれた神祕の莊嚴と神聖を犯すやうに感じられた。

斷えず言葉を控へたり、亡き人に話題を向けさうな事柄を努めて避けたりしながら、もうこれより以上言つてはならないといふ境目で、すべてのことを喰ひ止めておくと云ふことは、二人が感じてゐるものをますます明瞭に、ますます鮮かに心の目に映し出すのであつた。

けれど張り切つた純粹の悦びがあり得ないやうに、張り切つた純粹の悲しみもあり得るものではない。マリヤはその境遇から云つて、自分の運命に對する一個の獨立した主でもあり、幼い甥の後見でもあり教育者でもあるところから、まづ第一番に、二週間ひたり盡してゐた悲哀の世界から、實生活のために呼び出された。彼女は身内の人達から手紙を受け取つたので、それに返事を出さなければならなかつた。ニコルシカを入れることにした部屋が濕つぽいので、甥が咳をするやうになつた。アルパーティチは家事の報告に、ヤロスラーヴリへやつて来て、莫斯科のゾドギージェンカの家が無事に助かつて、ほんのちよつと修復すればいゝのだから、あすこへお入りになつたらと勧めた。生活はすこしも停止しなかつたから、生きて行かねばならなかつた。今まで生活して來た孤獨な瞑想の世界を出るのが、マリヤにとつてどんなに辛くても、またナターシャを一人捨てて行くのがどんなに可哀さうでも、どんなにきまり悪く思はれても——實生活の問題が彼女の參與を要求するので、彼女は知らず識らずその方へ巻きこまれて行つた。彼女はアルパーティチと會計を調べたり、甥のことをデサールと相談したり、莫斯科移轉の手配や支度をしたりした。

ナターシャはたゞ一人とり殘された。そしてマリヤが出發の支度を始めた頃から、この友達をも避けるやうになつた。

マリヤは伯爵夫人に向つて、ナターシャを自分と一緒に莫斯科へ出すやうに勧めた。父母は娘の體が、日増しに衰へて行くのに氣附いた處であつたから、處を換へて莫斯科の醫者に見せるのも、娘のためによからうと考へたので、喜んでこの申し出に賛成した。

『わたしどこへも行きません。』この勧めを聞いた時、ナターシャはかう答へた。『たゞどうぞ打つ棄つて置いて。』と言ふなり、やつと涙を抑へながら、部屋を駆け出して了つた。それは悲しみの涙と云ふよりも、寧ろ忌々しさと腹立たしさの涙であつた。

彼女はマリヤに見捨てられて、たつた一人自分の悲しみに閉ぢ籠つてゐるやうに感じて以來、一日の大部分を自分の居間で過した。長椅子の隅に足を縮めて、細い張り切つたやうな指で、何か引き裂いたり揉んだりしながら、何でも眼に當つた物をじつと執念く見詰めてゐた。この孤獨生活は彼女を疲れさせ苦しめた。けれど、それは彼女にとつて必要なものであつた。誰か部屋へ入るや否や、彼女は急いで體を起し、姿勢や眼附を變へながら、本を取つたり刺繡にかゝつたりして、邪魔者が出て行くのを苛々と待つてゐるらしかつた。

彼女は自分の力に及ばないやうな恐ろしい疑問を以て、心の視線を注いでゐる或る一つのこと、十二月の末、やせて蒼い顔をしたナターシャは、毛織の黒い服を身にまとひ、編み髪を無雜作

に巻きつけたまま、縮めた足を長椅子の隅に載せて、緊張した表情で帶の端を丸めたり、また伸したりしながら、戸の片隅を見詰めてゐた。

彼女はアンドレイ公爵が去つた處、即ち生活の彼岸を見詰めてゐるのであつた。前には一度も考へたことのない、そして非常に遠い不確かなものに思はれてゐた生活の彼岸が、今となつて見ると、空虚と破壊でなければ、苦痛と屈辱に充ちた此方の岸より、遙かに近く懐かしく、かつ分りよくなつた。

彼女は公爵がゐると信じた方を見詰めるのであつた。けれど彼女は、曾て公爵がこの世にあつた時よりほかの姿を、想像する事が出来なかつた。彼女はムイチンチヤ、トロイツァ、ヤロスラーヴリにゐた時と同じ姿で、再び彼を見てゐるのであつた。

ナターシャは彼の顔を見、彼の聲を聞いた。そして彼の言つた言葉と、自分が彼に言つた言葉を繰り返した。時にはまた、そのとき言つたかも知れないと思はれるやうな新しい言葉を、自分の分ばかりでなく彼の分まで考へ出した。

いま彼は例の天鵞絨の半外套を着た儘、瘦せた蒼白い手で肱杖を突き乍ら、安樂椅子の上へ横になつてゐる。胸が恐ろしく凹んで肩が飛び出してゐる。唇は固く食ひしめられて、眼はぎらぎらと輝き、蒼白い額には一筋の皺が浮き上つたかと思ふと、また消えるのであつた。一方の足は

微かに心持ぶる／＼と慄へてゐる。彼が非常な痛みと戦つてゐることは、ナターシャにも分つてゐた。その痛みは一體なんだろう？　なぜ痛むのだろう？　彼は何を感じてゐるのだろうか？　かうナターシャは考へた。彼は女の注視に気がつくつと、眼を上げて微笑を含みながら言ひだした。『たつた一つ恐ろしいのは、』と彼は言つた。『それは苦しんでゐる人と永久に自分を結び合ふことです、それは永久の苦痛です。』かう言つて彼は試すやうな眼付で彼女を見やつた。その時ナターシャはいつもの通り、まだ自分の答へるべきことを考へもしないうちに、いきなり返事をして了つた。『こんなことはさう永續する氣遣ひありませんわ、そんなことありませんわ。あなたをよくおなりになりますわ——すつかり』と彼女は言つた。

ナターシャは今もう一度彼を見た。そしてあの當時感じた事を、今また残らず味はひ直した。彼女は自分がかう言つた時に、公爵が沈んだいかつい眼付で、長いあひだ自分を見めたことを思ひ出した。そしてその長い凝視の藏してゐた譴責と、絶望の意味を悟つたのである。

『わたしはあの時さうだと言つて了つたんだわ。』とナターシャは獨語ちた。『もしあの方が永久に苦しみながら生きてらつしやるとしたら、それは恐ろしいに違ひないと言つて了つたんだ。わたしがあの時あゝ言つたのは、あの方にとつて恐ろしい事だと思つたからだわ。だけどあの方はそれを別な意味にお取んなすつたに相違ない。つまり、それがわたしにとつて恐ろしい事だ、と思

ひになつたんだわ。あの時はまだ生きてあつてゐらしたつて——死ぬのを恐れてゐらしたつて。それなのにわたしはあんな不躰けな、馬鹿々々しい事を言つて了つた。わたしはそんな事なんか考へてもゐなかつたのに。わたしはまるつきり別な事を考へてゐたのだ。もしあの時わたしが考へてた事をそのまま言つたら、かういふ風になるんだわ——たとへあなたが死にかけてゐらしても、わたしの眼の前で永久に死に掛つてゐらしても、それでも今かうしてゐるのに比べたら、どれくらゐ幸福かされませんか、かうわたしは言つたに違ひない。今では……何もない、誰もゐやしない。あの方はこれを知つてゐらしたかしら？　いゝえ、ご存じなかつたんだわ、そして永久に知つては下さらないだらう。今ではもうどうしても、どんなにしたつて取り返しがつかないんだわ。』すると彼は再び彼女に向つて同じ言葉をくり返した。で、こんどこそナターシャは想像の中で、全く別な答をした。彼女は男の言葉を遮つてかう言つた。『恐ろしいのはあなたの事で、わたしの事ぢやありません。わたしはあなたといふ方がなかつたら、この世に何の望みもありません。あなたとご一緒に苦しむのは、わたしにとつてこの上もない幸福なんですもの。それはあなただつてご存じでせう。』すると彼は女の手を取つて、死ぬ四日前のあの恐ろしい晩と同じやうに、じつと握り締めた。かうして彼女は自分の想像の中で、なほその他さまざまな優しい、愛の籠つた言葉を囁いた。いま口にしてゐるこれ等の言葉は、あの時にも言ふ事が出来た

ものを……『わたしあなたを愛してゐます!……あなたを……愛してゐます、愛して……』痙攣的に両手を握り締め、物狂ほしく力をこめて齒を食ひしぼりながら、彼女はかういふのであつた。と、甘い悲しみが彼女を包んだ。涙はもう目に滲みだして來た。けれど彼女はふと自分で自分に訊いた、一體こんな事を誰に言つてゐるんだらう? あの人はどこにゐるのだらう、あの人は今どうなつてゐるのだらう? するとまたもや、何もかも冷たく固い疑惑に覆はれて了つた。彼女は再び神経的に眉根を寄せて、彼のゐる所をじつと見つめた。と、彼女は今にもすぐ神祕を直覺しさうな氣がした……けれどその不可解なものが、もう分りかけたやうに思はれた瞬間、扉のハンドルをがちゃ／＼と動かす高い音が、病的に彼女の耳朶を打つた。小間使のドゥニャーシャが、ナターシャの事など考へてもゐないやうな慄えた顔附をして、ばた／＼と不用意に部屋へ入つて來た。

『どうかお父様のところへおいで下さいまし、早く。』一種特別な活氣づいた表情で、ドゥニャーシャはかう言ひ出した。『ご不幸が……ピョートル・イリツチのことで……お手紙が。』彼女は急にしやくり上げながらかう言つた。

二

一般にすべての人から離れたいと云ふ感情の他、ナターシャはこの頃自分の家族に對しても、一種特別なうと／＼しい感じを経験してゐた。自分の身内の者は——父も、母も、ソーニャも——すべて餘りに近しく見慣れたために、日常茶飯的な氣持を帯びてゐるので、彼等の言葉や感情などは、最近自分の住んでゐる心の世界を、侮辱するものやうに思はれた。で、ナターシャは彼等に對して冷淡なばかりでなく、敵意の眼さへ向けてゐた。彼女は、ピョートル・イリツチとか、不幸とか云ふドゥニャーシャの言葉を聞いたが、その意味を悟ることが出来なかつたのである。

『あの人達にどんな不幸があるんだらう。不幸なんか有る筈がないわ。あの人達のもつてゐるものは、何もかもおきまりの、古くさい、慣れ切つた、暢氣なものばかりだわ。』ナターシャは心のうちでかう言つた。

彼女が廣間へ入つたとき、父親が急ぎ足に夫人の部屋から出て來た。その顔は皺だらけで、涙に濡れてゐた。彼は胸に迫るすゝり泣きを思ふ存分聲に出さうとして、部屋から駆け出したものらしい。ナターシャを見ると自暴に兩手を振つて、いきなり病的にしやくり上げながら、すゝり泣きを始めた。そのために彼の圓い柔い顔は醜く歪んで來た。

『へ……ペーチャが……行きなさい、行きなさい。お母さんが呼んでゐる……』とかう言つて

から、彼は子供のやうに慟哭しながら、弱つた足を小さく刻んで椅子に近づき、両手で顔を覆うたと思ふと、殆ど倒れるやうに身を投げた。

ふいに電氣の流のやうなものが、ナターシャの全身をさつと走つた。何やら恐しい力で、痛いほどナターシャの心臓を打つた。彼女は恐しい痛みを感じた。胸の中で何か千切れて、今にも自分が死にかゝつてゐるやうに思はれた。けれどその痛みに續いて、彼女は今まで自分の體に置かれてゐた生活の禁制が、一瞬の間に解き放されたのを感じた。父親の姿を見、戸の陰から響く母の恐しく荒々しい叫び聲を聞くと、彼女は忽ち自分と自分の悲哀を忘れて了つた。

彼女は父の傍へ駈け寄つた。けれどこちらは力なく片手を振りながら、母の居間の戸を指さした。蒼い顔をしたマリヤが、下顎を慄はしながら戸口から出て来て、何やら言ひながらナターシャの手を取つた。ナターシャはマリヤを見もしなければ、その言葉を聞きもしなかつた。彼女は急ぎ足に戸の中へ入ると、自分自身と戦ふかのやうに一寸の間立ち止つたが、いきなり母の傍へ駈け寄つた。

伯爵夫人は妙に窮屈らしく體を伸しながら、安樂椅子の上へ横になつて、頭を壁にぶつ突けてゐた。ソーニャと小間使達はその両手を掴んでゐた。

『ナターシャを、ナターシャを！……』と伯爵夫人は叫んだ。『そんな事はない、そんな事は

ない……あの人は嘘を言つたのです……ナターシャを！』自分を取り圍んでゐる者を突き退けながら、彼女はかう叫んだ。『みんな彼方へ行つておくれ、そんな事はない！ 殺されたつて……』

……はつ、はつ、はつ！ そんな事があつて堪るものか！』
ナターシャは安樂椅子に膝をついて、母の上に屈みかゝつた。そしてじつと彼女を抱き締めながら、思ひ掛けない力で持ち上げて、自分の方へ顔を向けさせると、母に體をびつたり押し當てた。

『お母様！……お母様！……わたしこゝにゐてよ、お母様、お母様！……』とナターシャは一秒の止み間もなく母の耳に囁いた。

ナターシャは母を放すまいとして、優しく闘ひつゞけた。そして枕や水を持つて來させたり、母の服の釦を外したり、きれを引き裂いたりした。

『お母様、ねえ……お母様、お母様。』と絶え間なく囁きながら、彼女は母の頭や手や顔を接吻した。そして母の涙が鼻や頬を擦りながら、止め度なく瀧のやうに流れるのを感じるのであつた。伯爵夫人は娘の手を握つたまゝ、暫く眼を閉ぢてじつとしてゐたが、突然、例になく身早く起き上つて、無意味にあたりを見廻した。ふとナターシャに氣が付くと、力一ぱいその頭を抱き締めにかゝつた。やがて苦痛のために皺められたナターシャの顔を、自分の方へ向け直して、長い

間じつと見入つてゐた。

『ナターシャ、お前はわたしを愛してくれるね。』 對手を信じ切つたやうな聲で、母親は静かにかう囁いた。『ナターシャ、お前はわたしを瞞しやしないねえ？ お前はありのまゝを言つてくれるね？』

ナターシャは眼に涙を湛へて母を見つめた。その顔にはたゞ赦しと愛の祈りが現れてゐるだけであつた。

『お母様、わたしの大すきなお母様。』 彼女は愛の力を一ぱいに緊張させて、どうかして母を壓倒してゐる悲哀の過剰を、自分に引き受けようとしながらかう繰り返した。

再び母は現實との戦ひに負けて了つた。あれほど生に充ちてゐた愛兒が殺されたと聞いては、自分などが生きて行かれようとは信じたくなかつた。彼女はまた現實から狂亂の世界へ逃避してしまつた。

ナターシャはこの日とこの夜、また次の日と次の夜が、どう云ふ風に過ぎたやら、まるで憶えてゐなかつた。彼女は一睡もしないで、母の傍から離れなかつた。執拗な我慢強いナターシャの愛は、説明や慰藉としてでなく、生へ招き返す呼び聲として、斷えず四方から母親を取り圍んでゐるやうな鹽梅であつた。

三日目の夜、伯爵夫人は一寸のあひだ落ち着いた。ナターシャは安樂椅子の腕木に凭れて眼を瞑つた。と、寢臺がぎいと軋んだ。ナターシャは眼を見開いた。伯爵夫人は寢臺の上に坐つて、低い聲でかう言ふのであつた。

『お前よく歸つてくれたね、わたしどんなに嬉しいか分らないよ。お前さぞ疲れたらうね、お茶でもほしくないかえ？ (ナターシャは母の方へ近づいた。) お前だいぶ男振がよくなつたねえ、そして大人々々してさ。』 伯爵夫人は娘の手を握つて語り續けた。

『お母様、あなたは何言つてらつしやるの！……』

『ナターシャ、あの子はゐない、もう歸つて來ない。』

伯爵夫人は娘を抱きしめながら、初めて泣き出したのである。

三

公爵令嬢マリヤは出發を延ばした。ソーニャと伯爵はナターシャに代らうとしたが、それは駄目だつた。伯爵夫人を物狂ほしい絶望に陥れないやうにすることが出来るのは、ナターシャより他にないと云ふ事が、彼等に分つたのである。三週間といふもの、ナターシャは母の傍に附きつ切りで、母の居間の安樂椅子に眠り、手づから母に飲ませたり食はせたりした。そして斷えず何

やら話してゐた。ナターシャの優しい撫でるやうな聲よりほかに、伯爵夫人を落ち着かすものがなかつたのである。

母親の心の痛手はどうしても癒らなかつた。ペーチャの死は彼女の命を半ば搖ぎ千切つてしまつた。ペーチャ戦死の報知を受け取つた時には、まだ水々しい元氣のいゝ五十女であつた伯爵夫人が、一箇月後に居間から出て來た時は、もう生活に交渉を持たぬ、半ば死んだやうな老婆になつてゐた。けれど伯爵夫人を半分殺して了つたのと同じ傷——その新しい手傷が、ナターシャを生に呼び戻したのである。

精神體の破裂から生ずる心の傷は肉體の傷と同じく（一見して不思議に思はるけれども）、深手が癒えて傷口が接合して了つた後では、内部から押し上げて來る生活力によつて、始めて全癒するものである。

ナターシャの傷も矢張りさうして癒着した。彼女は自分の生活が終りを告げたやうに思つてゐた。けれど母に對する愛によつて、自分の生活の眞髓たる愛が、まだ内部に生きてゐることを、思ひ掛けなく教へられたのである。愛は眼醒めた——そして生活も眼醒めた。

アンドレイ公爵臨終前の幾日かは、ナターシャとマリヤを結びあはせた。しかし、新しい不幸は一層二人を接近させたのである。マリヤは自分の出發を延ばして、最後の三週間と云ふものは、まるで病氣の子供か何ぞのやうにナターシャの世話をした。ナターシャが母の部屋で送つた

最近の幾週間かは、彼女の體力を疲弊させたのである。

ある日の午時分、ナターシャが熱のために悪寒を覺えて、がた／＼慄へてゐるのに氣が附いたので、マリヤは自分の居間へつれて行つて床に寝かせた。ナターシャはじつと横になつてゐたがマリヤが窓掛をおろして出て行かうとした時、急に呼び止めた。

『わたし眠くないのよ、マリイ、暫くこゝにゐて頂戴な。』

『あなたは疲れてゐらつしやるんだから——なるだけ眠るやうになさいよ。』

『いや、いや。なぜあなたはわたしをつれて出たの？ お母様がお呼びになつてよ。』

『お母様は大變およろしいのよ。今日はあんなによく話してゐらつしたんですもの。』とマリヤは言つた。

ナターシャは寢床の中じつと臥たまま、部屋の薄明りの中でまじ／＼とマリヤの顔を眺めてゐた。

「この人はあの方に似てゐるかしら？」とナターシャは考へた。「さう、似てゐるやうでもあるし、似てゐないやうでもあるわ。だけどこの人はどこか特別な、變つた世界から來た、まるつきり新しい、よく分らないやうな人だわ。そしてこの人はわたしを愛してゐる。一體、この人の

お腹なにあることは何だらう？ みんないゝことばかりだわ。だけど、どう云ふ風なのかしら？
どう云ふ工合に考へてらつしやるのかしら？ どう云ふ風にわたしを見てらつしやるのかしら？
さう、この人は立派な人だわ。」

『マーシャ、』彼女はマリヤの手を引きよせながら、おづ／＼した調子でかう言つた。『マーシャ、わたしを悪い女だと思はないで頂戴。ね？ マーシャ、わたしあなたが大好きなの。本當に、本當にすつかりお友達になりませうね。』

ナターシャはマリヤをかき抱いて、その手や顔を接吻し始めた。マリヤはナターシャのかうした感情の表白が、恥かしくもあればまた嬉しくもあつた。

この日からマリヤとナターシャとの間には、女同志の間にはしか見られないやうな、優しい熱情的な友誼が成立した。二人は絶えず接吻し合つたり、優しい言葉を交したりして、大部分の時を一緒に過すやうになつた。一人が出て行くと、今一人がそわ／＼して、急いで後を追うて行くのであつた。二人は離れて別々になるよりも、一緒にゐる時の方が、すつとよく調和が保てるやうに感じられた。二人の間には友誼以上に強い感情が確定された。それは、二人一緒にゐることによつて、始めて生活が可能に思はれるほど一種特別な感情であつた。

時によると、二人は幾時間も黙つてゐることがあつた。時によると、もう寢床に入つてから話

し始めて、朝まで話し明すこともあつた。二人は大抵とほい過去の事を話し合つた。マリヤは自分の幼い時分の事や、父母の事や、自分の空想などを物語つた。以前はかうした信服と従順の生活や、基督教的な自己犠牲の詩趣から顔を反け、そんなものを理解しなくても平氣でゐられたナターシャが、今ではマリヤと愛で結び合されてゐるやうに感じたので、マリヤの過去もすきなになつた。もと分らなかつた人生の一面をも理解するやうになつた。彼女はこの従順や自己犠牲などを、自分の生活に當て嵌めようとは考へなかつた。なぜと云つて、彼女は別の喜びを追求するのに慣れてゐたからである。けれど以前分らなかつた美德を、今は他人の所有物として理解もし愛しもあるやうになつた。マリヤの方から云つても、ナターシャの幼い時分や處女時代の物語を聞いて、以前分らなかつた生活の一面——生活とその享樂に對する信仰が啓示されたのである。

二人はやはり依然として決して彼のことを話さなかつた。それは自分達の中にある崇高な（と彼女等には思はれた）感じを、言葉でもつて破らないためであつた。けれど亡き人に關するこの沈黙は、二人が自分でも思ひそめない間に、段々と彼のことを忘れさせたのである。

ナターシャは痩せて蒼ざめて、肉體的に甚しく衰弱したので、一同は絶えず彼女の健康を口にしてゐた。これが彼女にとつては快かつた。けれど彼女は時とすると、突然死の恐怖に襲はれるばかりでなく、病氣したり、衰弱したり、美貌を失つたりするのが、恐しくて堪らないことがあ

つた。どうかすると、彼女は自分の裏れ方に驚きながら、あらはな腕を我ともなしにしみ／＼見まはしたり、毎朝鏡に向つては、長くなつたみじめな（彼女にはさう思はれたのである）自分の顔を眺めたりするのであつた。彼女は「これはさうあるべき筈だ」とも思はれたが、またそれと同時に恐しく侘しくもあつた。

ある時、彼女は急いで二階へ上つて、はあ／＼と重苦しく息をついでゐたが、やがてすぐ無意識に用事を考へついで下へおり、そこからまた二階へ駆け上つて、自分の力を試しながら、自分で自分を観察するのであつた。

また一度ドゥニャーシャを呼んだとき、まるで罅でも入つたやうな聲がした。彼女はドゥニャーシャの足音が聞えるにも拘らず、もう一度呼んで見た。もと歌を唱つた時のやうな、胸の奥から出る聲で叫びながら、その響に聞き入るのであつた。

彼女自身は知らなかつたし、また知つたとしても本當にはしなかつたらう。けれど彼女の心を蔽ひ隠して、他人の侵入を許しさうも思はれてゐた沈澱物の下から、いつしか細く優しい針のやうな若草がさし覗いてゐたのである。それは今にやがて根を張つて、その生き／＼した若芽をもつて、彼女を壓してゐた悲哀を包み盡すに相違なかつた。彼女の悲哀は程なく影を潜めて、目にとまらなくなるであらう。傷が内部から癒えて來たのである。

一月の末にマリヤは莫斯科へ去つた。伯爵はナターシャに向つて、是非一緒に出掛けて行つて、醫者にみて貰ふやうに主張してやまなかつた。

四

さしものクトゥゾフも、敵軍の撃破や遮断を熱望してゐる麾下の軍隊を制し切れないで、遂にギャージマで衝突してから以來、逃走する佛蘭西軍と、それを追跡する露西亞軍の行動は、一戦をも見るこゝとなしにクライスノエまで續いた。佛蘭西軍の逃走はきはめて敏速であつたので、その後を追ふ露西亞軍は歩調を合すことが出來ない程であつた。騎兵や砲兵の馬は止り勝で、佛蘭西軍の行動に關する情報は常に不正確であつた。

露西亞軍の士卒は、一晝夜四十露里の速度で進む、この間斷なき行軍に疲れ切つて、もうそれより速く進むことは出來なかつた。

露西亞軍の疲勞の程度を知るには、タルーチノ出發後の全行軍中、死傷に依つて五千人弱、捕虜によつて百人未滿の兵員を失つたに過ぎぬ露西亞軍が、タルーチノを出るとき十萬の兵力を有してゐたにも拘らず、クライスノエへ着いた時には、僅か五萬人しかなかつたと云ふ事實の意味を、はつきり理解しさえすれば充分であらう。

佛蘭西軍を追ふ露西亞軍の急速な行動は、恰も遁走が佛蘭西軍を滅亡させたやうに、露西亞軍に破壊的影響を與へたのである。差違の存する所は、たゞ露西亞軍が敵の頭上に懸つてゐたやうな滅亡の威嚇を受けないで、自由意志によつて進んだと云ふことと、落伍した佛蘭西の病兵が敵の手中に陥つたのに反して、露西亞の落伍兵は我家へ歸つたと云ふことだけである。ナポレオン軍の減少した重なる原因は、行動の敏速であつた。それを確實に證明するものは、敵軍に相當する露西亞軍の減少である。

クトゥゾフの活動は全部をあげて、タルーチノやギャージマの時と同じく、自分の権力のゆるす限り、佛蘭西軍にとつて滅亡的なこの行動を沮止せず（彼得堡でも軍隊でも、露西亞の將軍達は等しくその反對を望んでゐた）、却つてこれを助成しながら、友軍の行動を容易にしよう、と云ふ點にのみ向けられてゐた。

しかしそのほかに、急速な行動の結果として、軍の疲勞と兵力の大減少が生じるやうになつて以來、クトゥゾフは軍隊の行動を緩めて時期を待つために、なほ一つ別な理由を發見した。露西亞軍の目的は佛蘭西軍の追跡であつた。所で、佛蘭西人の退路は不明であつたから、友軍が敵の背後に近く迫れば迫るだけ、敵の通過距離は益々大きくなるのであつた。佛蘭西軍が採つた稻妻形の進路を、もつとも近い路によつて切斷するには、たゞ若干の距離を置いて追撃するより他に

方法がなかつた。各將軍が提出した巧妙な作戦は、すべて行程の増加と軍隊の移動に歸着してゐるが、しかし唯一の合理的な目的は、この行程を短縮することであつた。莫斯科からギリナに到るまでの全戦役中、クトゥゾフの活動はこの目的一つに集中されてゐた——それも偶然や一時ではなく、かつて一度もこの目的に背かぬやう、秩序的に行はれたのである。

クトゥゾフは理智や科學でなく、露西亞人としての自己の全存在によつて、露西亞の各兵卒が一樣に感じてゐたことを知り、かつ感じたのである。つまり佛蘭西軍は敗走してゐるのであるから、それを送り出さねばならぬと云ふことであつた。しかしまたそれと同時に、彼はすべての兵卒と同じやうに、速度と時候の點から見て、この前代未聞の行軍の困難さをも充分に感じたのである。

しかし殊勳を表したり、誰かを驚かしたり、何のためやら藩侯や王を捕虜にしたりしよう、などと望んでゐる將軍達——殊に露西亞人以外の將軍達は、すべての戦が忌はしく無意味であるべきこの場合に、今こそ一戦争して誰かを敗かしてやるのに、丁度いゝ潮時だと考へた。破れた靴を履いて、毛皮の半外套も着ずにゐる、半ば飢ゑた兵士、戦はずして一箇月の間に半數に減じた兵士、たとへ最良の條件で敵の逃走が行はれたとしても、やはりこれまで来たより以上の道程を踏んで、國境まで行かなければならない兵士——かういふ兵士を率ゐて機動しようといふ計畫

を、これらの將軍が代る代る提出した時、クトゥゾフはたゞ肩を竦めるのみであつた。

殊勳を樹てよう、作戰しよう、撃破しよう、遮断しようなどといふこの熱望が、殊に著しく現れたのは、露西亞軍が佛蘭西軍に追突した時である。

それはクラースノエ附近で生じた事である。露西亞側では、三箇の佛蘭西縦隊中、たゞ一箇だけに出會ふつもりであつたところ、豈圖らんや、一萬六千の兵を率ゐた當のナポレオンに打つ突かつたのである。クトゥゾフはこの破滅的な衝突を避けて、友軍を守るために極力方法を講じたけれど、遂にクラースノエ附近において、露西亞軍の疲れ切つた士卒は、潰滅した佛蘭西の亂軍に對して、三日の間虐殺を續けたのである。

トールは *die erst Colo ne marchirt* (第一縦隊は某々へ進出し云々) と作戰命令を書いた。しかしいつもの通り、すべて實際に行はれた事は命令と違つてゐた。ギルテンベルヒ公エヴゲーニイは、傍らを敗走する佛蘭西兵の群を丘の上から射撃して、増援を要求したが、遂に援軍は到着しなかつた。佛蘭西兵は夜々露西亞軍を迂廻しながら、散り／＼になつて林の中へ隠れ、出来る限りの者は更に前方へ逃げのびて行つた。

曾て一度も必要の時に見付かつた事のない枝隊の兵站事務なんか、どうなつてゐようと知りたくもない、かう言つてゐたミロラドギッチは、自ら *chevalier sans peur et sans reproche*

(恐怖と鑑賞を知らない騎士) と稱して、佛蘭西人と會談することの好きな人であつたが、この時も彼は軍使を遣はして降服を要求しながら、徒らに時を空費するのみで、命じられた事を實行しなかつた。

『諸子よ、この縦隊を諸子に與へる。』彼は部下の騎兵隊に近づいて、佛蘭西兵を指差しながらかう言つた。

騎兵達は、やつとの事で動いてゐる馬を拍車や劍で追ひながら、懸命の努力の後に、與へられた縦隊、即ち凍えて木か石のやうになつた上、饑ゑに責められてゐる佛蘭西兵の群に、駈け足で近寄つた。すると、與へられた縦隊は武器を捨てて、もう久しい前からの望み通り投降したのである。

クラースノエ附近の戦闘で、露西亞軍は二萬六千の俘虜と、數百門の大砲と、元帥の笏と呼ばれる妙な棒を鹵獲した。そして誰がこの役で殊勳を樹てたか、などと言ひ争つて、それに満足を感じてゐるのであつた。しかしナポレオンか、それでなければ、偉い豪傑か元帥を捕虜にしなかつたのを酷く残念がつて、そのためにお互ひ同志——殊にクトゥゾフを非難した。

自分の慾望のみによつて動いてゐるこれらの人々は、最も悲しむべき必然律の盲目的な實行者であつた。併し彼等は自分で自分を勇士と信じて、自分達の行爲は何より高潔な賞讃すべき事やうに自惚れてゐた。彼等はクトゥゾフを責めてかう言ふのであつた——彼は戦役の當初からナポ

レオン征服を妨げてばかりゐた。彼は己れの慾望を満足させる事に汲々として、ズゴモンから出ようとしなかつた。そこにゐる方が彼にとつては安全だつたからだ。クラースノエの會戦で彼が軍隊の出勤を阻止したのは、ナポレオン自身の存在を知つて、すつかりまごつて了つたためだ。彼はナポレオンに通じて、買収されてゐると思はれても仕方がない。(ウイリソン手記)云々云々。慾望によつて動いてゐた當時の人々が、さう云ふ風に言つたばかりでなく、後世の人も歴史家も、ナポレオンを目して grand (人) としながら、クトゥゾフの方になると、それに反して、外國人側では狡猾で淫蕩な意氣地のない老廷臣とされてゐるし、露西亞人側では何だか曖昧模糊な人物のやうに思はれて、たゞ露西亞名前を有つてゐるだけで役に立つた、一種の人形のやうな取扱ひしか受けてゐないのである。

五

千八百十二年ならびに十三年の役に於て、クトゥゾフは多くの過ちを犯したと云つて、露骨に世間から非難された。皇帝は彼に不満を抱いてゐた。最近勅令によつて書かれた歴史の中でも、クトゥゾフはナポレオンの名聲を恐れた狡猾な宮廷付の偽瞞者で、クラースノエ及びベレージナに於ける誤算の爲に、露西亞軍から佛蘭西軍全滅の名譽を奪つたと書いてある。(ボグダーノギツチ編)「千八百十二年史」。

これが露西亞の有識階級に認められなかつた非偉人、非 grand-homme の運命である。これが天帝の意志を悟つて、それに己れ一箇の意志を服従させ得る、常に孤獨な少數者の運命である。衆俗の憎惡と侮蔑は、最高法則の洞察に對する報酬としてかう云ふ人々を罰するのである。

ナポレオンは——いつ如何なる場所でも、流竄の身になつてさへも、かつて人間らしい品位を示したことの無い、最も無價値な歴史の道具に過ぎなかつたナポレオンは、露西亞の歴史家にとつて(言ふも不思議な恐しいことだが)、讚嘆と感激の對象になつてゐる。彼は grand である。しかるにクトゥゾフは——千八百十二年役に於て、ポロヂノよりギリナに到るまで終始一貫、言行ともに曾て一度も自己を裏切らず、青史上まれに見る自己犠牲の龜鑑と、事件の將來の意義を現在に於て洞察する實例を示したクトゥゾフは、歴史家の目から見ると、曖昧模糊としたみじめな者に映るのである。そしてクトゥゾフや十二年役のことを語るとき、彼等はいつも少々恥しいやうな氣持がするのである。

しかし史上の人物の中で、あれくらゐ一定不變の目的に精力を集中した人は、他に匹儔を求め難いほどである。あれ以上立派な、あれ以上全國民の意志と一致した目的は、殆ど想像するのも困難なほどである。史上の人物の抱いてゐた目的が、千八百十二年役でクトゥゾフが全精力を傾注した目的のやうに、充分完全に達せられた例を歴史中に見出すのは——更に一層困難である。

クトゥゾフは、金字塔ピラミッドの上から四十の世紀が瞰下してゐる事や、自分が祖國に犠牲を捧げた事や、これから實行しようとしてゐる事や、または實行した事などを、決して口にしなかつた。要するに、彼は自分の事を一ことも言はないし、如何なる芝居をも演じないで、いつも極めて單純平凡な人間らしい態度を採り、極めて單純平凡なことを口にした。彼は自分の娘達やスタール夫人に手紙を書いたり、小説を讀んだり、美しい婦人との交際を喜んだり、將軍や將校や兵卒などに冗談を言つたりして、自分に何か證明しようとする人に對して、決して反駁しなかつた。ラストープチン伯爵が莫斯科の滅亡に對する譴責をひつさげて、ヤウースキイ橋なるクトゥゾフの許へ駆けつけ、「あなたは戦はずして莫斯科を棄てるやうな、そんな事はしないと約束なすつたぢやありませんか」と言つた時、クトゥゾフはそれに對して、既に莫斯科は放棄されてゐるにも拘らず、「だからわたしも、戦はずして莫斯科を棄てるやうなことはしませんよ。」と答へた。皇帝の名代として到着したアラクチェーフが、エルモローフを砲兵指揮官に任命したらよからうと言つた時、「さうです、わたしもたつた今さう言つてゐたところでです。」とクトゥゾフは答へた。その實つて一分前までは、全然別なことを言つてゐたのである。當時盲目な周圍の群衆の中で、たゞ一人事件の偉大な意味を理解し盡してゐた彼にとつて、ラストープチン伯爵が舊都の災厄を自分の責任にしようが、或ひはクトゥゾフの所爲にしようが、それしきの事が何であらう？ 況や誰を

兵指揮官に任命しようが、そんな事は尙さら問題にならなかつた。

實生活の經驗によつて、思想とその表現たる言葉は、人間を働かす原動力でない、と云ふ信念に達してゐたこの老人は、單に上記の場合ばかりでなく、絶えず無意味な、口から出まかせの言葉を發してゐた。

しかし、それほど自分の言葉を輕視してゐたこの老人も、戰爭中絶えず到達に努力してゐた、唯一の目的に矛盾するやうな言葉は、その全活動を通じて唯の一度も發しなかつた。もつとも、種々雑多な事情の下に、再三自分の意見を開陳したこともある。が、しかしそれは明かに、誰も自分を理解してくれまいと云ふ、重苦しい確信をもつて、心ならずもした事なのである。始めて彼と周圍の人々の間に不和を生じたポロヂノ會戰の當初から、彼はたゞ一人、ポロヂノ戰は勝利であると言つた。そしてこの言葉を口頭でも、報告や上申書でも、死ぬる最後の時まで繰り返した。莫斯科の喪失は露西亞の喪失でない、と言つたのも彼一人であつた。彼はロリスTONの媾和提議に對して、媾和は成立し得まい。なぜと言つて、それがわが國民の意志であるから、と答へた。佛蘭西軍の退却中たゞ彼一人だけ、あらゆる策動は不要である、すべては自然に、我々が望んでゐるより以上によくなるだらう。敵には黄金の橋を渡してやらねばならぬ。タルーチノ、ギヤトジマ、クラースノエ、すべての會戰は不要なものである。國境まで行くには、幾らかの兵を持

つてゐなければならぬ。十人の佛蘭西兵に對して、一人の露西亞兵をも殺させはしない、などと
言つたのである。

皇帝のお氣に入るために、アラクチェーフに嘘を言つたと傳へられてゐる、この廷臣一人のみ
が、ギリナにおいて『このうへ國境外で戦ふのは不利でもあり、また無益でもある』と直言して、
そのために皇帝の不興を蒙つたのである。

併し單なる言葉だけでは、當時彼が事件の意味を本當に理解してゐた、といふ證據にならない
かも知れない。彼の行動は——一つとして例外なしに——常にことごとく三つの目的へ向けられ
てゐた。即ち、(一)佛蘭西軍との衝突のために全力を緊張すること、(二)彼等を撃破すること、
(三)出来るかぎり國民と軍隊の不幸とを軽減しながら、彼等を露西亞の國外に放逐することであつた。

果斷決行の敵であり、忍耐と時を標語としてゐた優柔不斷のクトゥゾフは、ポロヂノの戦を挑
むに當つて、並々ならぬ嚴肅な態度でその準備を整へた。アウステルリッツ役ではまだ戦争の始
らぬ前から、敗戦を豫言したクトゥゾフが、ポロヂノ役に於ては、將軍一同が敗戦と信じてゐたに
も拘らず、また戦勝後退却しなければならぬと云ふ、かつて例を見ぬやうな結果が生じたにも拘
らず、たゞ一人だけ一同に反對して、ポロヂノの戦は勝利であると、いまはのちまで主張した。

彼は佛蘭西軍が退却を續けてゐる間ぢう、今となつては全然益のない衝突をしないやうに、新た
に戦争を始めないやうに、露西亞の國境を越えないやうにと、たゞ一人斷えず主張してゐた。

今日において事件の意味を理解するのは、僅か十人くらゐの頭に宿つてゐた目的を、大群集の
行動に適用するやうなことさへしなかつたら、極めて容易なわざなのである。なぜと言つて、事
件の全體はその結果と共に、我々の眼前に横たはつてゐるからである。

しかし、當時この老人がたつた一人だけ、すべての人の意見に反して、あゝまで正確にこの事
件の國民的意義を洞察し、終始一貫それに背かなかつたのは、一體どう云ふ譯であらう？

目前の諸現象の意味に對する、かう云ふ異常な洞察力の源泉は、クトゥゾフがあくまでも純潔
に、かつ力強く自己の内部に保存してゐた、國民的感情なのである。

國民が彼の内部にこの感情を認めたからこそ、皇帝の不興を蒙つたこの老人を、あゝした奇異
な方法で、皇帝の意志に反してまで、國民的戦争の代表者に選んだのである。たゞこの感情のみ
が、彼を人間として最高の位置に立たしたのである。彼はこの總指揮官といふ高い地位に立ちな
がら、なるべく人々を殺したり滅ぼしたりしないで、かへつて救つたり愍んだりすることに、自
己の全力を傾倒したのである。

單純で、謙抑で、従つて眞に偉大であつたこの人物は、歴史が考へ出した歐羅巴流の英雄、す

なはち人々を指導してゐるといふ幻想に囚はれた、似て非なる英雄の型に入ることが出来なかつた。

下司に取つては偉人などと言ふものは存在し得ない。なぜと言つて、下司は下司に相應した偉大の觀念をもつてゐるからである。

六

十一月五日は所謂クライスノエ戦争の第一日であつた。將軍達が色々な議論をしたり、過失を犯したり、見當違ひの所へ進んだり、矛盾した命令をもつて方々へ副官を派遣したりした擧句、敵は到るところ敗走して、戦闘などはない、また有るべき筈がない、と云ふことが明瞭になつた時、クトゥゾフは夕方クライスノエを出發して、この日本營を移したドイブロエへ赴いた。

晴れた寒い日であつた。クトゥゾフは多數の幕僚將官を隨へながら、肥えた白い小馬に跨つてドイブロエへ進んだ。彼に不満を抱いてゐる將軍達は、後ろで何やらひそ／＼囁き合つてゐた。この日露軍に投じた佛蘭西の俘虜は、行く先々の道端に一團づゝ群をなして、焚火に暖まつてゐた（この日の俘虜は七千人であつた）。ドイブロエから程遠からぬところで、方々を繃帯で巻いて、手當り次第の物に纏まつてゐる、ぼろ／＼した恰好の俘虜の大群集が、馬をばづして路上に

長く列を作つてゐる、佛蘭西砲隊の傍に立ちながら、がや／＼と騒々しく喋つてゐた。總指揮官が近づくと、話し聲はびつたりやんだ。赤い帶バンドをつけた白い帽子を被り、屈み加減になつた肩の上に綿入の外套を丸々と着て、徐ろに街道を進んで行くクトゥゾフに、たちまち一同の視線が注がれた。將軍の一人はクトゥゾフに向つて、大砲と俘虜を獲た場所を報告した。

クトゥゾフは何かに氣を取られて、將軍の言葉をろく／＼聞いてゐないやうな風であつた。彼は不満らしく眼を細めながら、前にもましてみじめな光景を呈してゐる俘虜の姿を、じつと注意深く見詰めるのであつた。佛蘭西兵の大部分は鼻や頬を凍傷で痛めてゐる上に、殆ど全部赤く腫れて腐つたやうな目をして、恐しく醜い形相になつてゐた。

また別な佛蘭西兵の一團が道路のすぐ傍に立つてゐた。その中の兵卒が二人——ひとりの方は顔一面に痂が出来てゐた——手で生肉のきれを引き裂いてゐた。かたはらを通り過ぎる人々にちらりと投げた彼等の視線には、何か恐しい動物的なものが感じられた。痂の出来た兵卒は、憎らしい表情をしてクトゥゾフを見やると、すぐまた顔を反けて、そのまゝの表情で自分の仕事を續けるのであつた。

クトゥゾフは長い間、じつとこの二人の兵卒を見詰めてゐたが、なほ一層顔を擧げて眼を細めながら、物思はしげに頭を振つた。また別の處で、クトゥゾフは一人の露西亞兵に目をつけた。

その兵卒は笑ひ／＼一人の佛蘭西兵の肩を叩きながら、何か愛想よく話し掛けてゐた。クトゥゾフはまたもや同じ表情で頭を振つた。

『君はなんと言つたんだね？』彼は一人の將軍にかう訊いた。それは前からの報告を續けながら、プレオブラゼンスキイ聯隊の正面に立つてゐる佛蘭西の軍旗に、總指揮官の注意を惹かうとしてゐるのであつた。

『あゝ、軍旗か！』とクトゥゾフは言つたが、自分の心を領してゐる想念から離れるのが、如何にも難かしさうな様子であつた。

彼はぼんやり邊りを見廻した。と、數千の眼が元帥の言葉を待ち構へながら、四方八方から彼を見つめてゐた。

彼はプレオブラゼンスキイ聯隊の前で馬を止めて、重々しく溜息をつきながら眼を瞑つた。幕僚の誰かが、軍旗を持つてゐる兵卒達に向つて手を振りながら、すつと前へ進んで出て、軍旗の柄を總指揮官の周りへ並べるやうに合圖をした。クトゥゾフは暫く黙つてゐたが、自分の地位の命する必要に従ひ乍ら、進まぬ様子で顔を上げ、さて口を切つた。將校の群が彼を取り圍んだ。彼は注意深い目つきで將校の群を見廻したが、その中に幾人かの知つた顔を見分けた。

『諸君、ありがたう！』彼は始め兵卒の方へ、それから今度は將校たちの方へ向いてかう言つ

た（周圍を領してゐる靜寂の中で、彼のゆる／＼と發音する言葉がはつきり聞えた）。『諸君はよく困苦と戦つて忠實に働いてくれた。ありがたう。戦ひは完全に味方の勝利だ。露西亞國民は決して諸君を忘れないだらう。諸君の名譽は不朽である！』

彼は邊りを見廻しながら暫く口を噤んでゐた。

『下げる、そいつの頭を下げる！』佛蘭西の鷲章旗を持つてゐた兵卒が、偶然その尖をプレオブラゼンスキイの聯隊旗の前へ下げたのを見て、彼はかう言つた。『もつと低く、もつと低く、さうだ、さうだ。諸君、ウラー！』素早く顎を動かして兵士らの方へ向き直りながら、彼はかう叫んだ。

『ウラー、ラ、ラー！』と幾千の聲が咆哮を始めた。

兵士等が叫んでゐる間に、クトゥゾフは鞍の上に身を屈めながら頭を下げた。と、彼の隻眼は嘲るやうなつゞましい光に輝いた。

『さて、諸君……』人々の聲が止んだ時、彼はかう言ひだした。

すると、不意に彼の聲と顔の表情が變つた。それはもう總指揮官の話ではなく、自分の同僚に何かぜひ必要なことを傳へたいと望んでゐる、平凡な老人が語り出したのである。

將校の群と兵卒の列は、彼がこれから言はうとすることをはつきり聞くために、ざわ／＼と波

立つて来た。

『さて、諸君。諸君も随分くるしいだらう。それはわしも知つてをるが、どうも仕方がない！
いままの辛抱だ、もう長いことはない。お客を送り出してつたら、その時こそゆつくり休ま
う。皇帝は諸君の功勞を忘れはなさないだらう。諸君は苦しからうが、それでもまだ自分の國
にゐる。ところが、彼等の様子を見るがよい——何といふことに成り果てたものだ。』彼は俘虜
を指さしながら言つた。『乞食の中の一番屑よりもつとみじめではないか。彼等に力がある
間は、我々も自分の身命を惜まなかつたが、今では彼等を懲んでやつてもよい。彼等も矢張り人
間なのだからな。さうぢやないか、諸君？』

彼は周圍を見廻した。そして自分の方に注がれてゐる執拗な、恭しい怪訝の色を帯びた視線の
中に、自分の言葉に對する同感を讀んだのである。彼の顔は老人らしくつゝましい微笑のため
に、段々あかるくなつて来た。唇や眼のふちに星形の小皺が現れた。彼は暫く黙つてゐたが、何
か合點が行かぬと云ふやうに頭を垂れた。

『しかし、あいつら一體たれに呼ばれてこゝへ来たんだ？　と言ひたくなつて来るよ。罰があ
たつたんだ、馬鹿野郎……』彼はふいに頭を擡げてかう言つた。

彼はさつと鞭を振つて、戦争の前後を通じて初めてたつた一度馬に駆けをくれた。そして嬉し

さうに高笑ひして、ウラーを連呼しながら列を崩してゐる、兵士らの傍を離れた。

クトゥゾフの述べた言葉が、兵士らに分つたかどうかそれは覺束ない話である。初めは嚴肅な
調子で發しられ乍ら、終りは單なる好々爺の繰言になつた元帥の訓示の内容を、他に傳へ得る者
は殆どなかつたであらう。しかし、この言葉の底に潜んでゐる内面的意味は理解された。それは
かりか、敵に對する怒みの情と、自己の正義に對する意識（それは老人らしい人の好い罵詈の言
葉で言ひ表された）と一緒になつた偉大な勝利の感じ——この感じは、一人々々の兵卒の心に藏
されてゐた。そして喜ばしい叫び聲となつて、暫しは鳴りも止まなかつたのである。その後で將
軍の一人が總指揮官に向つて、幌馬車の用意を致しませうかと訊いた時、クトゥゾフはそれに答
へながら、不意にすゝり泣きを始めた。彼は非常に興奮してゐる様子であつた。

七

十一月八日、即ちクラスノエ會戰の最後の日に、軍隊が野營地へ着いたのは、もう黄昏どき
であつた。靜かな寒い日で、軽い雪がちら／＼と降つてゐた。夕方になつて晴れかゝつた。雪を
透して濃い紫色の星空が見え、寒さが冴え返つて来た。

タルーチノ出發の時三千人あつた銃兵聯隊が、いま先着隊の一つとして、指定の宿營地につい

た時には、僅か九百人になつてゐた。宿营地は村の大街道の傍であつた。聯隊を出迎へた設營官は、どの家も皆佛蘭西の病兵や陣歿兵や、騎兵隊や參謀部などに占領されてゐると報じた。やうやく一軒の百姓家が聯隊長のために残されてゐた。

聯隊長は自分の宿舎へ馬を進めた。聯隊は村を通り抜けて、村はづれの農家に近い路傍で銃を組み合せた。

ちやうど巨大な群を作つた多數の動物のやうに、聯隊は自分の寢どこや食物の支度に取り掛つた。兵卒の一部は脛を没する雪を踏んで、村の右側にある白樺の林へ分け入つた。と、すぐさま林の中では斧や短劍で木を伐る音、枝を折る響、にぎやかな話聲などが聞えた。また一部のものは、雑然と一かたまりになつた聯隊行李の真中で、鍋や乾パンを取り出したり、馬に飼糧をやつたりしながら、忙しげに働いてゐた。更にまた別の一部は、村ぢうへ散り／＼になつて、司令部附の將校達の居場所を造つたり、家々に横たはつてゐる佛蘭西兵の死體を片附けたり、焚火にする板や、枯木や、屋根藁や、風よけにする編垣などを引き摺つたりしてゐた。

十五人ばかりの兵卒は、村端れの百姓家の後ろで、愉快さうな叫び聲を上げながら、もう屋根を剥ぎ取られた納屋の、柳で編んだ高い壁を揺ぶつてゐた。

『さあ、さあ、もう一つ、うんと押せ！』と大勢の聲が叫んだ。と、斑に雪の附いた大きな編壁

が、ぱち／＼と寒さうな音を立てながら、夜の闇の中でぐら／＼と揺いだ。下の杭は段々はげしくめき／＼言ひだしたと思ふと、遂に編壁は、押し掛つてゐた兵隊どもと一緒にどろと倒れた。嬉しさうな粗暴な叫びと、高笑ひの聲が聞えた。

『二人づゝ掴まへろ！ 槓桿を此方へよこせ！ さうだ。貴様どこへ出しやばるんだ？』

『さあ、一緒に……だが、待てよ……音頭を取つてやらう！』

一同は口を噤んだ。と、天鷲絨のやうに氣持の好い聲が、靜かに歌を唄ひ始めた。三つ目の句が終るとき、最後の響が止むと同時に、二十人の聲が一齊に『うーんと、よし！ 一度に！ みんな力を入れて！……』と叫んだ。一同は氣をそろへて力を入れたけれど、編壁は餘り前へ出なかつた。續いて起つた沈黙の中に、重苦しい喘ぎが聞えた。

『おうい、六中隊の連中！ やい、畜生！ 手傳はんか……俺達だつてまたお前等の役に立つてやらあな。』

村へ進んでゐた第六中隊の兵士が二十人ばかり、編壁を引つ張つてゐる連中に加つた。長さ五間幅一間の編壁は、はあ／＼喘いでゐる兵士らの肩に食ひ込みながら、弓のやうになつて村の通りを進んで行つた。

『やらんか、おい……うんと、それ……何をぼんやり立つてるんだ、さうだ／＼……』

愉快さうな口汚い罵詈の聲は止め度がなかつた。

『貴様達はどうしたんだ?』突然一人の兵士が編壁を引つ張つてゐる連中の方へ駆けよつて、さも上官らしい聲でかう言つた。『旦那方がそこにおいでなんだぞ。小屋の中にはげんさい閣下もをられるのに、貴様達は犬だ、畜生だ、下司だ、本當に貴様達は!』と曹長は叫んで、丁度手に當つた一人の兵卒の背中を、力任せにどやし付けた。『一體しづかに出来んのか?』兵士らは鳴りをしづめた。曹長に殴りつけられた兵卒は、編壁へぶつ突けて血の出るほど擦り剥いた顔を、ぶつくさ言ひながら拭きにかゝつた。

『やい、あん畜生、酷いことをしやがるなあ! どうだ、面一めん血だらけにしやがつた。』曹長がいつて了ふと、彼はおづくした聲でかう言つた。

『一體お前は好きぢやないのかね?』と誰かの聲が笑ひながら言つた。兵士らは聲を加減しながら、また曳きにかゝつた。

村の外へ出はづれると、彼等は再び前と同じやうに、あてもない罵詈を間々にはさみながら、大きな聲で話し始めた。

兵士らが傍を通り過ぎた農家の中には、高級指揮官が集つて茶を飲みながら、もう過去となつた今日の日のことや、將來の豫定行動などを話し合つてゐた。豫定の行動と云ふのは、左翼へ側

面行進をして副王の退路を断ち、これを生捕らうと言ふのであつた。

兵士らが編壁を引つ張つて来たときには、もう四方八方で厨がはりの焚火がどん／＼燃え始めた。薪はぱち／＼はぜ、雪は見る／＼溶けて行つた。軍隊の占領した廣漠たる場所を、兵士らの黒い影が、雪を踏みつけ踏みつけあちこちしてゐた。

斧や短剣は到る處に働いてゐた。すべて何もかも一切命令なしに行はれた。夜中の補充用として薪が運ばれた。上官のためにはバラツクが建てられた。鍋はぐつ／＼煮えてゐるし、銃や武器も手入れが出来てゐた。

第八中隊の引つ張つて来た編壁は、北側へ半圓形に立てて杭で支へ、その前で焚火が燃やされた。日没の喇叭が鳴つて人員點呼がすむと、晩の食事をした。それから一夜を過すために、めいめい焚火の傍に陣取つて——ある者は靴を修繕し、ある者はパイプを吸ひ、またある者は眞つ裸になつて虱退治をするのであつた。

八

當時露西亞兵が陥つてゐた、殆ど想像も出来ないほどの苦しい境遇——防寒靴もなく、毛皮の半外套もなく、輜重が遅れ勝ちのため充分の糧食もなく、氷點下十八度の寒氣に野天の雪の中で

暮してゐたことを考へると、定めし兵士らは非常に悲惨な光景を呈して、悄然としてゐたらうと思はれる。

ところが事實は全く反對である。どんなに充分な物質上の條件に置かれた軍隊でも、あれ以上愉快な生き／＼した光景を呈する事は不可能であらう。これは、つまり、少しでも意氣銷沈したり、衰弱したりし始めたものは悉く、一日々々と列外へふるひ落されるからであつた。すべて肉體的精神的に弱い者は、もうとうに後ろへ取り残されて、踏みとどまつた者は、精神力に於ても肉體力に於ても、軍隊の精華といふべきものばかりであつた。

編壁を立て廻してゐる第八中隊には、一番おほぜい人が集つた。二人の曹長がその傍に坐り込んだ。すると、この中隊の焚火は他より明るく燃えだした。彼等は編壁の蔭に坐る權利を與へる代りに、薪を持つて來いと要求した。

『おい、マケーエフ、貴様はどうしたんだ……どろんをきめ込みやがつて。それとも狼にでも喰はれたのか？ 薪を持つて來い。』赤ら顔に赫毛の兵卒がかう叫んだ。この男は煙のために顔を掣かめながら、眼はばち／＼させてゐたが、それでも火の傍から離れようとしなかつた。『やい鴉め、お前でもい／＼から薪をもつて來いよ。』と彼は別の兵卒の方へ向いた。

赫毛の兵卒は曹長でもなければ上等兵でもなかつたが、頑丈な男だつたので、自分より弱い者

を傾使してゐるのであつた。鼻が尖つてゐるために鴉と呼ばれる、瘦せた小柄な兵卒は、すなほに立ち上つて、命令を實行に出かけようとした。が、丁度この時焚火の明りの中へ、若い兵卒の華奢な美しい姿が浮んで來た。彼は一抱への薪を運んでゐた。

『此方へよこせ、こりや大したもんだぞ！』

人々は薪を折つて、火の中へ押し込むと、口で吹いたり、外套の裾で煽いだりした。薪はばちばちと燃えて、焔はしう／＼と云ふ音を立て始めた。兵士等は火の傍へ寄つて、煙管をふかしかゝつた。薪を持つて來た若い綺麗な兵卒は、兩脇に手を當てがひながら、凍えた足で一つ處を身輕さうにばた／＼と踏み始めた。

『あゝ母よ、冷たい露よ、いとしの露よ、鐵砲もつた兵隊に……』彼は一句々々吃るやうに唄つた。

『おい、靴の裏當てが飛んで了ふぜ！』歌ひながら踊つてゐる兵隊の靴底が、ばた／＼してゐるのに氣が附いて、赤毛の兵士はかう叫んだ。『何といふ踊り氣ちがひだ。』

踊り氣ちがひはちよつと足を止めて、ばた／＼してゐる革を引き千切るなり、焚火の中にはふり込んだ。

『なるほど、それもさうだなあ。』と彼は言つた。それから坐り込んで、背囊から青い佛蘭西羅

紗のきれを取り出すと、それで足をぐる／＼巻き始めた。『湯気で参つちまふんだよ。』 兩足を火の方へ差し伸べながら、彼はかう附けたした。

『近いうちに新しいのが下るよ。何でもすつかりやつつけて了つたら、みんなに二人前づゝ品物が渡るつて話だぜ。』

『えゝ、あのペトロフの畜生たうとう落伍しやがった。』と曹長は言つた。

『おれは疾うから氣が付いてたよ。』といま一人が言つた。

『どうも仕様がな、あいつどうも弱い男で……』

『第三中隊ぢや、昨日の點呼に九人も足りなかつたと云ふことだよ。』

『でも考へて見ろよ、足が凍えちまつたら歩けるもんぢやないから。』

『おい、何を下らん事を喋つてるんだい！』と曹長は言つた。

『お前もやつぱり落伍したいのかい？』ひとりの老兵は、足が凍えると言つた兵卒の方へ向いて、詰るやうにかう言つた。

『ぢや、お前は何と考へてるい？』鴉と呼ばれた尖り鼻の兵士は、焚火の蔭から身を起して、甲走つた慄へ聲で、だしぬけにかう言ひ出した。『肥つてゐた者は痩せるし、痩せてゐた者は死んで了ふ。おれなどもこの通りだ。もう精も根もありやしない。』彼は不意に曹長の方へ向きな

がら、思ひ切つた調子でかう言つた。『病院送りにして下さい。すつかりレウマチにやられちやつたんです。さもなけりや、やつぱり落伍するばかりだ……』

『もう澤山だ、澤山だ。』と曹長は落ち着き拂つてかう言つた。

兵卒は口を噤んだ。一座の話は續いた。

『今日はするぶん佛蘭西人をふん捕まへたが、全くのところ、靴らしい靴を穿いた奴は一人だつてゐやしない——たゞ靴といふ名ばかりだよ。』と一人の兵卒が新しい話を始めた。

『哥薩克がすつかり剝いで了つたんだ。今日も聯隊長殿のために家を一軒あけて、奴等を擔ぎ出して了つたがね、お前、見てるのも可哀さうだつたぜ。』と踊すきの兵卒が言つた。『ごろ／＼轉がしてゐたら、一人生きた奴がをつてな、どうだい、何だか向うの言葉でぼそ／＼言つてるぢやないか。』

『だが、綺麗な人種だなあ、おい。』と最初の兵卒が言つた。『眞白な體をして、まるで白樺のやうだよ。それに、中には勇敢で立派なものもあるぜ。』

『お前なんと思つてるんだ？ 向うちやどんな身分の人でも、みんな兵隊にとられるんだぜ。』
『だが、やつ等こつちの言葉を少しも知らねえや。』 踊すきの兵卒は不審の微笑を浮べながらかう言つた。『俺が「お前は何隊だ？」と訊いたら、やつめ向うの言葉でべちや／＼喋りやがつ

たよ。不思議な連中だなあ！」

『それにまた、不思議な事があるぢやないか。』佛蘭西人の白いのに感心した兵卒が語り続けた。『モジャイスクで百姓共がさう言つてたつけ、戦争のあつた場所で死骸を片附けにかゝつたところ、妙な話があるもんぢやないか？ かれこれ一箇月ばかり打つちやらかしてあつたのに、紙のやうに白い綺麗な體をして、これんばかりも臭がしなかつたさうだよ。』

『一體それは寒さのせひだらうか？』と一人が訊いた。

『え、何を利口ぶるんだ！ 寒さのせひだつて！ 暑い時だつたんだよ。もし寒さのせひなら、こつちの者だつて矢張り腐らない筈ぢやないか。所が、こつちの兵の傍へ行くと、腐つて蛆が湧いてたと言ふ話だ。だから百姓共は鼻の上を手巾で縛つて、そつぽを向き／＼引き摺つて行つたつてよ。とてもやり切れなかつたさうだ。ところが、奴等の方は紙のやうに白くつて、これんばかりも臭がしなかつたさうだ。』

一同は暫く黙つてゐた。

『きつと食べ物のせひだらう。』と曹長は言つた。『奴等は旦那衆のたべ物を啖ひやがつたんだからな。』

誰も反對しなかつた。

『例の戦争のあつたモジャイスクで、その百姓が言つたことだが、十箇村から百姓どもを驅り集めて、二十日の間死骸を運んだけれど、みんな運び切れなかつたさうだ。奴が言ふには、狼の数がどえらいもんだつたさうだよ……』

『あれこそ本當の戦争だつたよ。』と老兵が言つた。『あの時は話の種になることばかりだつたが、それから後のはみんな……大勢の人間を苦しめるだけの事さ。』

『本當だよ、小父さん、一昨日も攻撃したんだが、いやもう、どうもかうもなりやあしない、てんで俺たちを傍へ寄せつけないんだ。すぐに鐵砲を投げ出して膝を突きながら、バルドン(ナボレ)と言ふぢやないか。どこでもこゝでもみんなこの手なんだ。何でもプラートフがポリオン(ナボレ)を二度もつかまへたと言ふことだが、あいにく咒文を知らないもんだから、掴んでも掴んでも、手の中でひよいと鳥に化けて、飛んで行つてしまつたさうだ。殺さうと思つてもそんな法はなしよ。』

『貴様はなか／＼法螺を吹くのが達者だなあ、キセリョーフ、どうも感心するよ。』

『何が嘘だ、全く本當なんだ。』

『もし俺がやつを掴まへたら、俺たちの流儀で土ん中へ埋めちやつて、どろ楊の棒でつき刺してやるんだがなあ。ほんとに大勢の人を殺しやがつてさ。』

『どつちにしたつて、片づけて了ふんだ。さうすりや奴も二度と來やあしまい。』老兵は欠伸をしながらかう言つた。

話は途切れた。兵士らは寢支度を始めた。

『あの星はどうだ。恐ろしい數ぢやないか、何だか話でもしてゐるやうだ！ まるで女共が布を擴げてるやうだ。』一人の兵卒が銀河を眺めながらかう言つた。

『あれはな、豊年のしるしだよ。』

『薪がも少しいるだらうて。』

『脊を温めると腹は凍えると來た、ほんとに奇體なこつた。』

『お、お、神さま！』

『何だつてさう押すんだ——お前一人の火ぢやあるまいし、どうだい……あのさばり返つてゐるこたあ。』

次第に深くなつてゆく沈黙の中に、いくたりか寢入つた兵士の鼾が聞えた。他のものは時々言葉交しながら、體の向を變へては暖まつてゐた。百歩ばかり距てた遠くの焚火からは、みんな揃つて一度にどつと笑ひこける陽氣な聲が聞えた。

『どうだ、あの五中隊の騒ぎやうは。』と一人の兵卒が言つた。『それにあの人數はどうだい——』

—すばらしいもんどぢやないか！—

一人の兵卒は立ち上つて、五中隊の方へ出かけて行つた。

『いや、お笑ひぐさだ。』彼は歸つて來てかう言つた。『佛蘭西人が二人やつて來たんだ。一人はすつかり凍えてるが、も一人の方は、どうして、なか／＼元氣のいゝ奴だ！ 歌なんか唄つてよ。』

『ほう？ 行つて見るかな……』

幾人かの兵卒は第五中隊の方へ赴いた。

九

第五中隊は林のすぐ傍に屯してゐた。大きな焚火が雪の中にあか／＼と燃えて、霜の重みに垂れた樹々の枝を照してゐた。

眞夜中ごろ第五中隊の兵士らは、林の中で雪の上を歩む足音と、枝のめき／＼折れる音を聞きつけた。

『おい、みんな、熊だ。』と一人の兵卒が言つた。

一同は頭を持ち上げて耳を敏てた。と、林の中から赫々たる焚火の照らしてゐる中へ、異様な

服装をした二人の人影が、互ひに縋り合ひながら入つて来た。

それは林の中に隠れてゐた二人の佛蘭西人であつた。彼等は兵士らにとつて不可解な言葉で、しや嘎れ聲を絞つて何やら言ひながら、焚火の傍へ近づいて来た。一人は少し脊が高く、將校の帽子を被つてゐたが、すつかり弱りきつてゐるらしかつた。彼は焚火に近づくと、そこへ坐らうとして地べたに倒れた。いま一人は小柄ながつしりした男で、手巾で頬をしぼつてゐたけれど、この方が大分しつかりしてゐるらしかつた。彼は仲間を抱き起して、自分の口を指しながら何やら言つた。兵士らは佛蘭西人を取り圍んだ。そして病人に外套を敷いてやつて、二人に粥と火酒フラトカを持つて来た。

弱つた方の佛蘭西將校はラムバールで、頬を縛つた方は從卒のモレールであつた。

モレールは火酒を飲み干し、粥を鍋の底まで平らげて了ふと、突然病的に活氣づいて、しつきりなしに兵士を掴まへて何やら言つたが、こちらは何が何だか分らないのであつた。ラムバールは食べ物を斷つて、無意味な赤い眼で露西亞の兵士らを眺めながら、無言のまゝ、脛を枕に焚火の傍で横になつてゐた。そして時々引き伸したやうな呻き聲を出しては、また黙りこむのであつた。モレールはラムバールの肩を指しながら、この人は將校だから、よく暖めてやらなければならぬと云ふ事を、露西亞の兵士らに悟らせようとした。焚火に近づいた一人の露西亞將校は、

聯隊長の所へ使をやつた。佛蘭西の將校を手もとへ引き取つて、暖めてやつては下さらないかと訊かせたのである。やがて使は歸つて来て、その將校をつれて来いと云ふ、聯隊長の命令を傳へた。ラムバールは出掛けるやうに言はれたので、起き上つて歩かうとしたが、思はずよろ／＼とよろめいた。もし傍に立つてゐる兵卒が支へなかつたら、彼はそこへ倒れたに違ひない。

『どうしたんだ？ 駄目かね？』一人の兵卒は嘲るやうに目をぼちりとさして、ラムバールにかう言つた。

『やい、馬鹿野郎！ だらしないことを言つてやがらあ。本當に百姓だ。全く百姓だ。』巫山戯た兵卒に對する詰責の聲が四方から聞えた。

人々はラムバールを取り圍んだ。中の二人が彼を兩手に抱き上げて、家の方へつれて行つた。ラムバールは兵卒の頸を手で巻いた。そして彼等が擔ぎ出した時、さも哀れつばい聲で口を切つた。

『Oh mes braves ! oh mes bons, mes bons amis ! Voilà des hommes ! oh mes braves, bons amis !』(あゝ、勇士！ あゝ、わたしの善良な、善良な友よ。こゝれこそ人間だ！ あゝ、わたしの勇敢な、善良な友よ。)そして子供のやうに一人の兵卒の方へ頭を傾けた。

その間にモレールは兵士らに圍まれて、一番いゝ場所に坐つてゐた。

がつしりした小柄な佛蘭西人のモレールは、充血した眼に涙をにじませ、女のやうに手巾で帽子の上から頬被りをして、毛皮の婦人外套を着てゐた。彼は一杯機嫌らしく、傍に坐つてゐる兵士を抱きながら、千切れくなしや噎れ聲で佛蘭西の歌を唄つた。兵士らは腰に手を當ててそれを見物してゐた。

『さあ、さあ、教へてくれ、どう言ふんだい？ 俺はすぐに覺えて了ふよ。何と言ふんだい？ ……』モレールに抱かれてゐる飄輕者の唱歌手がかう言つた。

『Vive Henri quatre. Vive ce roi vaillant(アンリ四世に榮あれ！)』モレールは片眼をぼちつかせながら唄つた。『Ce diable à quatre(王の智略は魔神をしのぐ)』

『ギブリカ！ ギフ・セルヅル！ シヂャブリヤカ……』と兵卒は片手を振りながら繰り返した。實際、彼は節廻しを飲み込んだのである。

『いよう、うまいぞ！ は、は、は、は、は！』と云ふ粗野な嬉しさうな笑ひ聲が四方に起つた。

モレールは顔を顰めながら、矢張り同じやうに笑つた。

『さあ、も一つやれ、も一つ！』

Qui eut le triple talent,

De boire, de battre
Et d'être un vert galant……

(酒と喧嘩と

色ごとと

三つ揃つたその人は……)

『これも中々いゝぞ。さあ、さあ、ザレターエフ！……』

『キュ……』とザレターエフは苦心しながら發音した。『キュウ、ウ、ウ……』彼は一生懸命に唇を突き出して、長く音を引つ張つた。『レトリプタラ、デ、ブ、デ、バ、イ、デトラヴガラ。』と彼は歌つた。

『よう／＼、素敵！ まるで佛蘭西人そつくりだ！ あゝあ……は、は、は、は、は。どうだ、もつと食べないか？』

『奴に粥をやれよ。腹の空いたのは中々急に堪能しないからなあ。』

また粥をやつた。モレールは笑ひながら三つ目の鍋に手を着けた。モレールを眺めてゐる若い兵士らの顔には、さも嬉しさうな微笑が浮んでゐた。こんな詰らない事にかゝづらふのを、大人氣ないと思つた老兵達は、焚火の向う側に長くなつてゐたが、時々眩突きして身を起しながら、

微笑を浮べてモレルを見透かした。

『やつぱり人間だあ。』老兵の一人は外套にくるまりながらかう言つた。『苦逢でも根があつて生えるんだからな。』

『お、お！ やれやれ！ 何と云ふ星だ、えらいこつた！ 寒くなるしるしだ……』

やがて邊りはしんと静まり返つた。今こそ誰も自分達を見てゐないぞ、とでも云ふやうに、星が暗い空で思ふさま輝き始めた。そして光りつ消えつ慄へつしながら、何かしら悦ばしい、とは云へ神祕な事を、互にせか／＼と囁き合ふのであつた。

10

佛蘭西軍は數學的に正確な加速度でじり／＼と溶けて行つた。やかましく書き立てられたベレージナ渡河なども、たゞ佛蘭西軍の滅亡の中間的段階の一つであつて、決して戦役中の決定的挿話ではなかつた。ベレージナのがやかましく書き立てられたばかりでなく、現に今でも書き立てられつゝあるのは、佛蘭西側にして見ると、佛蘭西軍がこれまでじり／＼に受けてゐた災厄が、このベレージナ河の中斷された橋の上で、とつぜん一瞬時に集中してしまつて、永久に人々の記憶に残るやうな、一つの悲劇的光景を呈したからである。また露西亞側がベレージナのこと

を、あれほどやかましく話したり書いたりする譯は、戰略の良によつて、ナポレオンをベレージナ河で捕虜にしようと云ふ計畫が、またもやプフルによつて、戰場から遠い彼得堡で編成されたからである。人々はすべて計畫通り實現されるものと信じてゐたので、ベレージナの渡河こそ佛蘭西軍を滅亡させたものと主張した。併しその實、ベレージナ渡河の結果は、數字の示す所によると、大砲や俘虜を失つた點から見て、クラースノエ會戦ほど佛蘭西軍の滅亡に効を奏さなかつたのである。

ベレージナ渡河が有する唯一の意義は、ほかでもない、すべての遮斷計畫の不合理なことと、クトツゾフ並びに全軍（群衆）の要求してゐた唯一の可能な行動——即ち敵軍追跡の正當なことが、この渡河によつて、判然と明確に證明された點である。佛蘭西兵の亂群は斷えず速力を増して、目的の到達に全精力を傾注しながら走つた。彼等は傷ついた獸のやうに逃げてゐたので、中途で立ち止るのは不可能であつた。これは渡河の設備よりは、寧ろ橋上の行動によつて證明される。橋が中斷された時、武器を持たない兵士や、佛蘭西軍の輜重隊に加はつてゐた莫斯科の住民や、子持の女達は、みな惰力に引きずられて、降服もせず前へ前へと走つて行つて、小舟の中や凍つた水の中へ飛び込んだのである。

この突進は合理的なものであつた。逃走者も追撃者も、同じやうに悲惨な状態に置かれてゐた

のである。味方と一緒に残つてゐたら、かうした災厄の場合であるから仲間の助けと、今まで占めてゐた一定の地位に望みを繋ぐ事が出来た。ところが、露西亞軍に投降すれば、不幸な境遇に置かれることは同じであつたが、生活上の必需品分配に、一段下の取扱ひを受けねばならない。露西亞軍の俘虜になつた味方の半数が、飢餓と寒氣のために死んだと云ふことは、佛蘭西軍にとつて確報を待つまでもなく明白な事實であつた。露西亞軍の方では、助けたいと云ふ希望を充分もつてゐたけれど、どうすることも出来なかつたのである。實際これ以外どうも仕方がない、それは佛蘭西側でも悟つてゐた。どんなに同情の深い露西亞の長官も、佛蘭西びいきも、露西亞軍に勤務してゐる佛蘭西人も、俘虜のためにどうしてやることも出来なかつた。露西亞人の置かれてゐる不幸な境遇が、佛蘭西の俘虜を破滅させたのである。飢ゑてゐる必要な兵卒から麵麩や被服を奪つて、害もなければ憎くもなく、また何の罪もないけれど、たゞ必要のない佛蘭西兵にやるといふことは、不可能であつた。中にはさうした人もあるが、それは要するに例外であつた。背後には確實な死があつた。前途には希望があつた。船は焼かれた。もうかうなつては一緒に塊つて逃げるよりほかに、救はれる途はなかつた。そこで佛蘭西軍はこの集合的逃亡に全力を注いだのである。

佛蘭西軍が遠く逃げれば逃げるだけ、殊に彼得堡案によつて特別な望みを囁かれてゐたベレー

ジナ渡河の後、佛蘭西軍の残兵が憐れな状態に陥れば陥るだけ、露西亞軍の指揮官一同の慾望はいよいよ激しく燃え立つた。彼等はお互同志——殊にクトゥゾフを非難した。ベレージナに對する彼得堡案の失敗は、當然クトゥゾフの責任に歸すべきものと考へて、彼に對する不満、輕蔑、嘲弄はますます激烈になつた。勿論、その嘲弄と輕蔑は極めて恭しい形式で現された。それはつまりクトゥゾフも、なぜどう云ふ點で自分を攻撃するのか、問ひ糺す譯に行かないやうな形式なのであつた。人々はクトゥゾフに報告する時も、その裁可を求めるときも、眞面目に話をしないで、まるで厄介な儀式でも行ふやうな風であつた。そして蔭に廻ると互に目交せをして、一から十まで彼を欺かうとした。

これらの人々は悉く、クトゥゾフを理解することが出来ないために、「あんな老人など何も話すことはない、あんな老人に自分達の計畫の深遠な意味を悟ることは不可能だ、たゞ黄金の橋がどうだの、ごろつきの群集をつれて外國へ行くことは出来ないとか、色々と例の文句（彼等はこれをたゞ文句に過ぎないと思つてゐた）を並べるだらう」と決めてしまつてゐた。こんな事はみんなもう疾くに聞かされてゐた。老人の言ふ事——例へば糧食の到着を待たなければならぬ、兵士は靴も穿かずにゐる——などと云ふやうなことは、みんな平凡なことであるが、彼等の提議するところは悉く複雑で、深い智力の所産であつた。従つて彼等に言はせれば、クトゥゾフは馬

鹿の老い耄れで、自分達は權力を與へられない天才的指揮官である、それはもう分り切つた事であつた。

殊に名聲赫々たる提督で彼得堡の勇士なる、ギトゲンシタインの軍が合して以來、かうした一般の氣分と司令部獨特の陰謀は極度にまで達した。クトゥゾフはこの有様を見ながら、たゞ溜息をついて肩をすくめるだけであつた。たゞ一度ベレージナ會戦の後、彼は非常に腹を立てて、個人的に皇帝へ報告を送つてゐたベニグセンにあてて、次のやうな手紙をしたゞめたことがある。

『閣下には病的發作に悩み居られ候田につき、此の狀御落手と共にカルーガへ御出發の上、同地にて皇帝陛下より向後の命令並びに任務を御待ちあつて然るべく候。』

しかしベニグセンの左遷後、續いてコンスタンチン・バーヴロギッチ大公が軍隊へ到着した。大公は戰役開始の際その局に當つてゐたが、クトゥゾフのために、軍隊から遠ざけられたのである。今また大公は軍を訪れて、皇帝が友軍の微弱な成功と緩慢な行動に對して、不満を感じてゐらせられること、並びに皇帝自身近々に戰地へ行幸の意向を抱いてゐられることを、クトゥゾフに報じた。

軍事上と同じく宮中の事にも經驗のある老クトゥゾフ——その年の八月皇帝の意志に反して總指揮官に選ばれたクトゥゾフ——皇太子や大公を軍中から遠ざけたクトゥゾフ——皇帝の意志にさからつて、自分の權力で莫斯科の放棄を命じたクトゥゾフ——このクトゥゾフは即座に一切を悟つた。もう自分の時は終つた、自分の役目は濟んだ、この似て非なる權力は最早自分の掌中がない、といふ事を悟つたのである。彼はたゞ宮中關係のみで、これを悟つたのではない。一方から見ると、自分の役割を演ずべき軍事行動が、終りを告げたことを知り、自分の使命が果されたことを感ずると同時に、いま一方からは自分の老軀の生理的疲勞と、休息の必要を感じ始めたのである。

一一

十一月二十九日にクトゥゾフはギリナへ——彼のいはゆる懐かしいギリナへ入つた。クトゥゾフは今まで勤務生活を續けてゐる間、二度もギリナの縣知事になつたことがある。クトゥゾフは些かも被害を受けなかつたこの富裕なギリナで、もう長い間奪はれてゐた生活の利便を得たばかりか、古い友達や追憶をも見出した。彼は急にすべての軍事上政治上の配慮から顔をそむけて、自分の周圍に沸騰してゐる野心や慾望が許す限り、慣れた靜かな生活に没頭して、いま歴史の世界で行はれてゐる事や、また行はれようとしてゐる事などには、すべてわれ關せず焉と云つたやうな態度を採つてゐた。

最も熱心な遮断撃滅派の一人であつたチチャゴフ、初め希臘へ次にワルシャワへ兵を向けて牽制運動を企てながら、命じられた處へは決して行かうとしないチチャゴフ、皇帝と思ひ切つた話をするので有名なチチャゴフ、千八百十一年にクトゥゾフをさし措いて、土耳其と媾和條約締結に派遣された時、もう和議が締結されたことを知つて、媾和締結の功はクトゥゾフに歸すべきものであると、皇帝に上奏したために、自分で自分をクトゥゾフの恩人と思ひ込んでゐるチチャゴフ——このチチャゴフが第一番にクトゥゾフを、その滞在所と豫定されたギリナ城の傍らで迎へた。彼は海軍の略服の上に短剣を佩び、軍帽を小脇に抱へて、陣中報告と市の鍵をクトゥゾフに渡した。少壯組が耄碌した老人に示す侮蔑的な恭しい態度は、チチャゴフの應對に充分現れてゐた。彼はクトゥゾフに加へる人々の非難を、もうちやんと知つてゐたのである。

クトゥゾフはいろ／＼な話の間に、ボリーソフで敵に奪取されたチチャゴフの食器が無事だつたから、程なく彼の手に戻るだらうと言つた。

『C'est pour me dire que je n'ai pas sur quoi manger……Je puis en contraire vous fournir de tout dans le cas même où vous voudriez donner des dîners』(あなたはわたしに食べる道具も無くと仰しやるのですね。それどころか、たとへあなたが大宴會をお催しなさらうとも、わたしは何不自由なくあなたのご用を務めることが出来ますよ。)チチャゴフはかつとなつてかう言つた。彼は一言ごとに自分の正しさを證明しようと望んでゐたので、クトゥゾフもやはりこの事を氣にしてゐる

と考へたのである。

クトゥゾフは持前の微妙な、相手の腹の中を見透すやうな微笑を浮べて、ちよつと肩を竦めながらかう答へた。『Ce n'est que pour vous dire ce que je vous dis』(わたしは今言つただけの事を言はうとしたので、それ以外に何も意味せぬ。)

クトゥゾフは皇帝の意志に反して、ギリナに軍隊の大部分を止めた。親近者の言に依れば、クトゥゾフはギリナ滞在中に並々ならず老い込んで、肉體的にも衰弱した。彼は進まぬ様子で軍務に従ひ、その大部分は將軍達に一任して了つた。そして皇帝の到着を待ちながら、放漫な生活に身を委ねてゐた。

皇帝は十二月七日に供奉の人々——トルストイ伯爵、ブルコンスキイ公爵、アラクチェーフその他——を従へて彼得堡を出發し、十二月十一日にギリナへ到着すると、すぐ旅行櫓のまゝで城へ乗りつけた。城の傍には、烈しい寒氣にも拘らず、百人ばかりの盛装をした將軍や、參謀將校や、セミョーノフスキイ聯隊の儀仗兵が並んでゐた。

汗ばんだ三頭立櫓に乗つて城へ駆けつけた先觸れの傳令は、『着御』と叫んだ。コノヴニーツィンは、小さな玄關番室で待つてゐるクトゥゾフに報告のため、玄關へ駆け込んだ。

一分の後、大禮服の胸一ぱいに様々な勳章を懸け連ね、飾帯で腹を締めた、大柄な肥つた老人

が、體を左右にゆりながら玄關へ現れた。クトゥゾフは三角帽を横に被つて手に手袋を持ち、少し横向きに難かしさうに階段を下り、皇帝へ捧呈のために用意してゐた上申書を手に取つた。ばた／＼駈け廻る音、囁き合ふ聲、それからまた三頭立てが恐しい勢で飛び過ぎた——と、一同の眼はまつしぐらに近寄る一臺の櫓にそゝがれた。その中にはもう皇帝とブルコンスキイの姿が見えた。

これらすべての事は、五十年來の習慣によつて、老將軍の肉體に不安な作用を及ぼした。彼はせか／＼と忙しげに體を撫で廻したり、帽子を直したりした。丁度、皇帝が櫓から出て、自分の方に眼を向けたその瞬間、彼は急に勇を鼓して體を伸し、上申書を捧呈した。そして持前の靜かな、媚びるやうな聲で口を切つた。

皇帝はクトゥゾフの頭から足の爪先まで、ちらりと見おろして、ちよつと顔を擧めたが、すぐさま自分で自分を抑へて老將軍に近づき、兩手を擴げて抱きしめた。すると再び昔から慣れて來た印象と、心内深く起つた或る想念の影響を受けて、この抱擁はいつもの通りクトゥゾフを感激させた。彼はすゝり泣き始めた。

皇帝は多くの將校や、セミョーノフスキイ聯隊の儀仗兵などに挨拶して、も一度老人の手を握り締めると、一緒に城の中へ入つて行つた。

元帥と二人きりになると、皇帝は追撃の緩慢なことや、クライスノエとベレージナの失敗に對する不滿を述べ、國境を越えて軍隊を進めようといふ未來の計畫を告げた。クトゥゾフは別に反對もしなければ、異議もさし挟まなかつた。七年前アウステルリッツの戦場で、皇帝の命令を聞いてゐた時と同じやうな、意味のない服従の表情が、今も彼の顔に凝結してゐた。

クトゥゾフが書齋を出て、じつと頭を垂れたまゝ、重々しい潜るやうな足取りで廣間を通つてゐると、誰かの聲が彼を呼びとめた。

『閣下。』と誰やらかう言つた。

クトゥゾフは頭を上げて、長い間トルストイ伯爵の眼を見つめてゐた。伯爵は銀の皿に何か小さな物をのせて、彼の前へ立つてゐた。クトゥゾフは何を要求されてゐるのか、合點が行かないやうな風つきであつた。

と、不意に彼は思ひ出したらしかつた。そのぶよ／＼した顔には、あるかないかの微笑が閃いた。彼は恭しく頭を下げて、皿の上に載つてゐるものを取りあげた。それはゲオルギイ一等勳章であつた。

翌日、元帥は晩餐會を兼ねて舞踏會を催した。それには皇帝も臨席の光榮を與へた。クトゥゾフはゲオルギイ一等勳章を授けられ、皇帝から最高の敬意を示された。しかし皇帝がクトゥゾフに不満を抱いてゐる事は、凡ての人に知れ渡つてゐた。表面の禮儀は固く守られて、誰より先に皇帝がその範を示したけれど、兎に角あの老人は失策をしてゐる、あれはもう何の役にも立たない、といふことは誰でも承知してゐた。舞踏の時クトゥゾフは舊いエカチエリーナ時代の習慣に倣つて、皇帝が舞踏室へ入つて來る時、鹵獲した軍旗を皇帝の足下へ横たへるやうに命じた。そのとき皇帝は不快さうに顔を擧めて、何やらぶつ／＼言つた。幾人かのは『老いぼれた道化役者』と云ふ言葉を小耳に挟んだ。

クトゥゾフに對する皇帝の不満は、ギリナへ來てから一倍強くなつた。それはクトゥゾフが目前に迫つてゐる戦役の意義を、理解しようとしなかつたし、また理解することも出来なかつたからである。

翌朝、皇帝が參集した將校達に向つて、『諸子は單に露西亞を救つたのみならず、歐羅巴をも救つたのである』と言つた時、一同はすぐその瞬間、戦争はまだ終らないのだなと悟つた。

たゞ一人クトゥゾフは、その意味を理解しようとしなかつた。そして、第二次の戦争は露西亞の國狀を改善することも、その國威を發揚することも出来ないばかりでなく、却つて露西亞の現

狀を害ひ、いま露西亞が享有してゐる最高の名譽を減ずるに過ぎない、かういふ意見を公然と發表した。彼は新たに軍隊を徵集する事の不可能を、皇帝に證明しようとなつた。そして國民困苦の狀態と敗戦の可能を説いた。

かうした氣持をもつてゐた元帥が、來るべき戦役の障礙であり、制動機であると思はれたのは、きはめて當然の事である。

老人との衝突を避けるために、自然と一つの方法が見出された。それはアウステルリッツの時や、また戦役の當初バルクライに對したのと同じやうに、當人には何一つ言はないで、一切不安を感じさせないやうにしながら、總指揮官の足下から權力の地盤を抜きとつて、それを皇帝自身に移すことであつた。

この目的をもつて總司令部は次第に改革された。クトゥゾフの司令部の中堅は全滅されて、皇帝の方へ移管された。トール、コノヴニーツイン、エルモーロフなどは別な任命を受けた。そして誰も彼も口を揃へて、元帥が非常に衰弱して、健康を害ねたと、仰山に言ひ立てた。

彼は自分の地位を後繼者に譲るために、病身な者となる必要があつた。しかも實際、彼の健康は衰へてゐた。

クトゥゾフが土耳古から彼得堡の議院へ歸つて、民兵を募つた後、次いで軍隊へ出て行つたの

が、自然で單純で必然の順序を踏んでゐたのと同じやうに、今クトゥゾフの役割が演了されたとき、新しい要求に應じた活動家が彼の代りにあらはれたのも、矢張り自然の順序をふんで單純に行はれたのである。

千八百十二年の戦は、露西亞人の魂にとつて貴重な國民的意義のほかに、なほ別な意義——全歐的の意義を持たなければならなかつた。

諸民族が西から東へ移動した後、その逆に東から西への移動を見なければやまなかつた。この新しい戦争のためには、クトゥゾフと異なつた資質と見解を有し、別種の動機に動かされる新しい活動家が必要であつた。

丁度クトゥゾフが露西亞を救ひ、その國威を高めるために必要だつたのと同じやうに、アレクサンドル一世は、諸民族が東から西へ移動するために、また各國民がその國境を恢復するために、必要かくべからざる人物であつた。

クトゥゾフは歐羅巴とか、勢力平均とか、ナポレオンとか云ふことが、何を意味してゐるのか理解しなかつた。彼はそれを理解する事が出来なかつたのである。敵が滅されて露西亞が自由となり、名譽の最高點に達してふと、露西亞人の代表者たる彼は、もつとも露西亞人らしい露西亞人たる彼は、もう何もすることがなくなつた。國民戦争の代表者は、たゞ死ぬより他に仕方が

なかつた。かうして彼は死んだ。

一三

よくあるやうに、ピエールは俘虜生活中に經驗した肉體的困苦と緊張が終つてから、始めてその苦しさを身にしみくと感じた。俘虜の境界から救はれると、彼はオリョールへ赴いた。到着後三日目に、キーエフへ出かけようと支度してゐるうちに發病して、三箇月の間オリョールに寝ついて了つた。彼の病氣は、醫師達の言ふ所によると、膽汁性の熱であつた。醫師達が藥を飲ませたり、放血したりして治療したにも拘らず、それでも彼は兎に角全快した。

ピエールが自由な身となつてから、發病するまでに經驗したさまざまな出來事からは、殆ど何の印象も残らなかつた。彼はたゞ灰色をした、陰鬱な、雨がち雪がちの天候や、内部の生理的憂悶や、足と脇腹の痛みや、他人の不幸や苦痛に關する一般的印象や、かういふものを憶えてゐるだけであつた。將校や將官たちが物ずきに色んな事を訊ねて、うるさくて堪らなかつた事も、馬車と馬を見附けようとして、いろ／＼骨折つた事も憶えてゐる。殊に、そのとき自分の思想と感情が、無力の状態にあつた事も憶えてゐる。自由になつた當日、彼はペーチャ・ロストフの死骸を見た。アンドレイ公爵がポロヂノ會戦の後、一箇月以上も生きてゐて、つい近頃ヤロスラーヴ

リのロストフ家で死んだと云ふ事も、同じ日に知つた。またその日、ピエールにこの珍事を知らせたデニソフは、四方山の話の間にエレンの死にも觸れた。そんなことはもう疾くに、ピエールに知れてゐると思つたからである。これらの事はその時ピエールにとつて、すべて不思議に思はれたばかりである。彼はかう云ふ様々な報知の意味を、理解することが出来ないやうに思はれた。その時は一刻も早く、人間同志が互に殺し合つてゐる處を遁れ出て、どこか静かな避難所へ赴き、そこで體を休めて心を落ち着けた上、この間ぢう見聞した不思議な出來事を、残らずゆつくり考へて見ようと思つた。しかしオリョールへ来るや否や、すぐ病氣になつて了つた。ピエールが始めて正氣づいたとき、莫斯科から來た二人の家僕——テレンチイとワシカと、それからピエールの領地エリツァに暮してゐる、一番年上の公爵令嬢を、自分の周圍に見出した。令嬢はピエールが助かつたことや、病氣に罹つたことを聞いて、看護のためにやつて來たのである。

ピエールは健康を恢復するに従つて、もう癖になりきつてゐる最近數箇月間の印象から、極めて徐々に離れて行つた。もう誰もあすの目自分を追ひ立てる者はない、誰も自分の温い寢床を奪ひはしない、午餐や茶や夜食は間違ひなく自分を待つてゐるのだ、と云ふ事を信じるやうになつた。けれど夢の中ではまだ長い間、依然として俘虜の境遇にゐる自分自身を見るのであつた。それからまたピエールは同様に徐々として、俘虜の境遇から遁れて後に知つた椿事、即ちアンドレ

イ公爵の死や、妻の死や、佛蘭西軍滅亡などの意味が分つて來た。

喜ばしい自由の感じ——人間固有な奪ふ事の出來ない完全な自由の感じ、莫斯科出發後はじめの休憩の時に経験した自由の意識が、健康の恢復につれて彼の心を充たして來た。彼は一切外部の状況に支配されないこの内部の自由が、今は更に外面の自由を加へて、有り餘るほど贅澤に充ち満ちてゐるのに驚いた。彼は縁もゆかりもない町にまるで知る人もなく、一人ぼつちで暮してゐた。誰ひとりとして自分から何物をも要求しない、何處へも自分を追ひ立てない、ほしいものは何でも目の前に現れた。以前絶え間なく彼を苦しめてゐた妻に關する聯想は、もう二度と起つて來なかつた。妻そのものももうなかつたのである。

『あゝ、實にいゝ！ 實に素敵だ！』匂ひのいゝ肉汁スープを載せて、さつぱりと準備された卓子が傍ちかく寄せられた時、夜やはらかい清潔な寢床に身を横たへた時、もう妻も佛蘭西人もゐないのだと思ひ出した時、彼はかう獨ごつのであつた。『あゝ實にいゝ、實に素敵だ！』

それから彼は昔からの癖で自問した。『ところで、それからどうなるのだ？ 俺はこれから何をやるんだ？』けれども彼はすぐに自答するのであつた。『何でもない。たゞ生きるだけだ。ああ、實に素敵だなあ！』

以前彼が絶えず苦しみ求めてゐたもの、即ち人生の目的は、いま彼にとつて存在しなかつた。

彼の尋ねあぐんでゐるこの人生の目的は、一時的に存在しなかつたのではない。もうそんな目的などはないし、またあり得るものでもないと言ふことを、彼ははつきり感じたのである。そしてこの目的がないと言ふことは、彼に完全な喜ばしい自由の意識を與へた。今の場合この意識は、彼の幸福を作りなしてゐるものであつた。

彼は目的をもつことが出来なかつた。なぜと云つて、彼はいま信仰をもつてゐたからである。それは何等かの法則や言葉や思想に對する信仰ではなくて、常に感知し得る生きた神に對する信仰であつた。以前彼は自ら課した目的の中に神を求めてゐた。この目的の探求は要するに神の探求にほかならなかつた。ところが、捕はれの身となつてゐる中に、とほい昔に乳母が言つて聞かせた言葉——「神様は、ほらあれです、そこにでも、どこにでもおいでになります」と言つた事を、言葉や理窟でなく直感を以て忽然と悟つたのである。彼は捕はれの身となつてゐるうちに、カラターエフの内部にひそんでゐる神の方が、共濟組合の認めてゐる宇宙の建築者よりも、遙かに偉大で、無限で、到底捕捉しがたいものだと言ふことを知つたのである。彼は視神経を緊張させて遠くの方を眺めながら、一生懸命に探してゐたものを、ふと偶然足もとに見つけた人のやうな感じを経験した。彼はこれまで周囲の人々の頭ごしに、どこか向うの方を眺めてゐたが、そんなに視神経を緊張させるまでもなく、自分の前さへ見ればよかつたのである。

彼は以前いかなるものの中にも、偉大で、無限で、捕捉し難いものを認めなかつた。彼はたゞどこかにさう云ふものがあるべきだと感じて、それを捜してゐたのである。自分に理解の出来る手近なものの中には、たゞ限りのある、淺薄俗惡な、無意味なものばかり目についた。彼は理智の望遠鏡を構へ込んで、遙かな遠い處を眺めてゐた。そこでは淺薄俗惡なものが、模糊たる遠景の中に没して、如何にも偉大で無限なものやうに思はれた。併しそれはたゞはつきり見えなかつたからに過ぎないのである。歐羅巴の生活や、政治や、共濟組合や、哲學や、博愛主義など、悉くさう云ふ風に思はれた。けれどその當時でも、彼が自分の弱點としてゐるやうな氣分に襲はれた時には、彼の智力はこの遠景の底に浸透して、そこにも依然として淺薄俗惡な、無意味なものを見出すのであつた。然るに今や彼はあらゆる物の中に、偉大で永久で無限なものを見ることを學んだ。従つてそれを見かつ樂しむために、これまで人々の頭越しに眺めてゐた望遠鏡を棄てて、自分の周圍で絶えず變化して行く、永久に偉大な捕捉し難い無限の生活を、悦びをもつて觀照するやうになつた。近寄つて見れば見るだけ、彼はいよゝゝ安靜と幸福を感じた。以前、ありとあらゆる彼の智的建設を破壊してゐた、恐しい「なぜ？」と云ふ疑問は、いま彼のために存在しなくなつた。今ではこの「なぜ？」と云ふ疑問に對して、彼の心内には何時も單純な答が準備されてゐた。それは「神があるから」と云ふ一句であつた。その意志によらなければ、人間の

頭から一筋の毛も落ちることのない、偉大な神があるからであつた。

一四

ピエールはその外面的態度から見ると、ほとんど變つてゐなかつた。一見した所、彼はまるで以前と同じことであつた。矢張り以前のやうに放心家で、眼の前にあるものと違つた、自己獨特のものに心を領せられてゐるやうな風であつた。たゞ以前の彼と、今の彼の状態の相違は次の點にあつた。他でもない、以前目の前にあるものや、現在人の話してゐる事を忘れた時、さも苦しげに顔に皺を寄せて、遠く離れたあるものを見分けようと努めながら、それが出来ないらしい表情をしてゐたのに引きかへて、今では自分の目の前にあるものも、人の話してゐる事も、矢張り同じやうに忘れはするものの、しかしほんの心もち嘲るやうな微笑を浮べて、自分の目の前にあるものを見、人の話してゐることを聞くのであつた（尤も、まるきり別なことを見たり、聞いたりしてゐるやうであつた）。以前彼は善良な人らしくはあつたけれど、併し不幸な人と思はれてゐた。そのために、皆が自然と彼から離れて行つた。ところが、今では生の喜びの微笑が絶えず彼の口邊に踊つて、眼には他人に對する關心と、人も自分のやうに満足してゐるだらうか？といふ疑問が輝いてゐた。それ故、人は彼と同座するのを愉快に感じた。

以前の彼は多辯で、喋るとすぐ熱して、人の言ふことをろくに聞かなかつたが、今では滅多に自分の話に釣り込まれないで、人の話を聞くすべを心得てゐたので、人々は喜んで彼に自分の胸奥を打ち明けるやうになつた。

公爵令嬢はこれまで曾てピエールを愛したことがなかつたばかりか、老伯爵の死後ピエールの恩恵を受けてゐると感じて以來、彼に對して特別ふかい敵意を抱いてゐた。彼女は對手の忘恩をも顧みずに、看病の義務を感じてわざ／＼やつて來たことを、ピエールに思ひ知らせるつもりであつたが、しばらくオリョールに滞在してゐるうち、ふと自分が彼を愛してゐるのに氣づいて、忌々しく感じもしたしまた驚きもした。ピエールは少しも公爵令嬢の機嫌を取らうとせず、たゞ好奇心を持つて彼女を見まもつたばかりである。以前公爵令嬢は、自分を眺めるピエールの眼つきに冷淡な嘲笑を感じたので、ほかの人に對する時と同じやうに、彼に對しても妙にひねこびれて了つて、たゞ自分の挑戰的な一面だけを見せてゐたが、今ではその反對に、ピエールが自分の生活の奥祕に掘り込んで來たやうな氣がして、初めの中は半信半疑であつたが、やがて次第に感謝の念をもつて、自分の性格の隠れた善良な方面を示すやうになつた。

たとへどんなに狡猾な人でもピエールほど巧みに、公爵令嬢の心に青春の楽しい追憶を喚び起して、それに同情を表し乍ら、彼女の信用を得る事は出来なかつたであらう。けれどピエールの

巧みなやり口と云ふのは、たゞ自分の満足を求め乍ら、それと同時に、一種獨特の自尊心を持つた公爵令嬢の、意地悪い、乾き切つた心の中に、人間らしい感情を喚び起すだけの事であつた。

『さうだわ、あの人は悪い人達に迷はされないで、わたしのやうな者の感化を受けると、本當に、本當にいゝ人なんだわ。』と公爵令嬢は獨ごちた。

ピエールの内部に起つた變化は召使達——テレンチイやワシカなどにも認められて、彼等一流の解釋を下された。彼等はピエールが非常にきさくになつたのを認めた。テレンチイは主人に着換へをさせた後、手に長靴や服を持つたまゝ、夜の挨拶をしながら、主人が何か話しかけはしないかと、出て行くのをためらふことが度々あつた。さう云ふとき大抵ピエールは、テレンチイが話をしたがつてゐるのに氣がついて、彼を呼び止めるのであつた。

『ときに、一つ聞きたいことがあるが……一體お前達は、どうして食べ物を手に入れてたんだね?』と彼は訊いた。

するとテレンチイは莫斯科の荒廢や、故伯爵のことなど話し始める。そして服を手を持つて長い間じつと立つたまゝ、自分でも話をしたり、時にはピエールの話も聞いたりした。そして主人と親密になつた事を快く意識しながら、一種の友愛の情を抱いて控室へ出て行くのであつた。

毎日ピエールの所へ往診に来る醫師も、醫師としての職責上、一分一秒と雖も苦しめる人類の

ためにおろそかにならぬ、といふやうな顔つきをするのを義務と心得てゐたけれど、ピエールの所へ来ると、幾時間も幾時間も尻を据ゑて、病人全體——殊に婦人患者の氣質について、得意の逸話や觀察談をするのであつた。

『いや、あゝいふ人と話をするのは愉快だ。この邊の田舎者とはまるで違ふ。』と彼は言つた。

オリョールには佛蘭西の俘虜將校が幾たりか住んでゐた。醫師はその中から一人の若い伊太利將校を引つ張つて來た。

この將校はピエールの所へ出入りするやうになつた。その伊太利人がピエールに示す優しい感情は、公爵令嬢の笑ひぐさになるほどであつた。

伊太利人はピエールの所へ來て世間話をしたり、自分の過去や家庭生活やロマンスを物語つたり、佛蘭西人——殊にナポレオンに對する不満を洩らしたりする時だけ、はじめて幸福を感じるやうな風であつた。

『もし露西亞人全體が少しでもあなたに似てゐたら、』と彼はピエールに言つた。『あなた方のやうな國民と戦争するのは瀆神の行爲です。あなたは……佛蘭西人のためにあれほど酷い目に合つたあなたが、少しも彼等に悪意をもつてゐられないんですからねえ。』

今ピエールがこの伊太利人の熱烈な愛情を贏ち得たのは、たゞ對手の心の好い方面を喚び醒し

て、それに見惚れてゐたために過ぎなかつた。

ピエールのオリョール滞在の終りに、舊い知人で共済組合員たるギルラルスキイ伯爵が、彼の許を訪ねて來た。それは千八百七年に彼を組合へ入れた人で、オリョール縣に大きな領地をもつてゐる金持の露西亞婦人と結婚して、この町の食糧部に臨時の席を占めてゐるのであつた。

ギルラルスキイは、ベズーボフがオリョールにゐることを知ると、別して近しい知合ひではなかつたけれど、彼の家を訪問して、さながら、曠野で出會つた人が、普通たがひに示し合ふやうな友情と親愛を表明した。ギルラルスキイはオリョールで退屈してゐたので、自分と同じ社會に屬し、自分と同じ興味をもつ（彼はさう考へたのである）人に出會つたのを非常に悦んだ。

しかし程なくギルラルスキイは、ピエールが本當の生活から遠く離れて（彼が自分一人で勝手にピエールを定義したところによると）、倦怠と利己主義に陥つてゐるのを認めて、一驚を吃したのである。

『Vous vous enroulez, mon cher (あなたは大分ひねて來ましたね)』と彼はピエールに言つた。

それにも拘らず、今ギルラルスキイは、ピエールと一緒にゐるのが前より愉快になつた。彼は毎日のやうにピエールの所へ出かけて行つた。ピエールはピエールで、ギルラルスキイを見たり、その話を聞いたりしてゐると、自分自身もつい近頃まであんな人間であつたのかと、本當に

出來ないほど不思議な氣持がするのであつた。

ギルラルスキイは結婚して家庭をもつてゐる人で、妻の領地の仕事や、勤務や、家庭などのために忙しかつた。彼はかう云ふ仕事を生活の障礙と見なして、それらすべてを輕蔑してゐた。なぜと言つて、それらのものは自分と家族との個人的幸福を目的としてゐるからであつた。彼の注意は絶えず軍事、行政、政治、共済組合などに關する考慮に吞まれてゐた。ピエールは彼の見解を變へようとしなければ、また非難するやうなこともせず、彼獨特の悦ばしげな嘲笑（それも今ではいつも靜かな感じに充ちてゐた）を浮べながら、この不思議な、とは云へよく知りぬいてゐる現象を眺めた。

ギルラルスキイ、公爵令嬢、醫師、すべて今度接觸した人々に對するピエールの態度には、すべての人に好感を抱かせなければやまぬ、一つの新しい特徴が含まれてゐた。それはほかでもない、如何なる人でもみな自己獨特の考へ方、感じ方、觀方が出来るもので、言葉で人の信念を翻すのは不可能だ、と云ふことを是認する氣持であつた。この當然な各人各様の特質は、もとピエールを興奮させたり、苛立たせたりしたものであるが、今では他人に對して持つ同情と興味的基础となつてゐた。人々の見解とその實生活の差異——いな、時として全然相反せる矛盾は、却つてピエールを喜ばせ、嘲るやうなつましい微笑を喚び起すのであつた。